

ルノ不幸ヲ免レサル所ノモノトス  
 法律ハ之ニ反シ其語ヤ正確其義ヤ嚴明幾ント餘地ノ存  
 スルモノナシ蓋シ法律ハ素ト道理ノ領分ニ屬スト雖モ  
 而カモ又道理以テ全ク之ヲ左右スルヲ能ハス何者凡ソ  
 法律ノ説明ニ就テハ先ツ法章ノ明文及ヒ論事矩ノ名義  
 ヲ以テシ而シテ之ヲ遵奉スルノ條件ヲ具備スルニ非ル  
 ヲリハ如何ニ道理ヲ以テスルト雖モ又得テ之ヲ動カス  
 ヲ能ハサレハナリ  
 是ヲ以テ世ノ代言人タル者多クハ唯事實ノ一邊ニ偏倚  
 スルノ傾向アリ是レ必竟法律上ノ公正ヨリモ寧ロ事實  
 上ノ公正ヲ欲スル二三裁判官ノ寵護ヲ恃ミ常ニ其事實  
 ニ依テ判斷センヲ欲スル者ナリ寔ニ此方法以テ古來

其功ヲ奏シタル者ナキニ非ス又大井ニ才能アル者ニシ  
 テ此説ヲ主唱セサルニ非ス而シテ今其説者ノ理由ト爲  
 ス所ヲ云ハンニ曰ク凡ソ訴訟事件ハ事實ニ依テ其訴訟  
 ノ全部ヲ成スモノナリ故ニ若シ其訴答ヲ能セント欲セ  
 ハ必ス事實ヲ熟知スルノ外ナク即チ此事實ヲ除テ他ニ  
 據ルヘキモノハ幾ント之ナキナリ蓋シ嚴確ナル法章モ  
 事實ニ依テ容易ニ之ヲ轉回スルヲ得ヘク百般ノ證書  
 亦皆ナ事實ニ依テ解釋スルヲ得ヘシ而シテ夫ヲ判決ハ  
 之ヲ受ケタル者ノ外ニ對シテハ何ノ効ヲモ有セサルヲ  
 以テ徒ラニ判決事例ヲ搜索シ法律ノ深意ヲ考查スルカ  
 如キハ共ニ無益ノ事業ナリ」ト  
 此説素ヨリ代言人ノ信ス可キ所ニ非ス



リウピール氏曰ク斯ノ如キ説ヲ主張スル者ノ過半ハ其室内唯未染ノ筆ト未繙ノ書籍ヲ有スル者タルヲ認メタリト

苟クモ一國ニ於テ法律ノ存スル以上ハ善良ノ法官ハ日々ニ之ヲ適用スヘシ故ニ善良ノ代言人亦常ニ之ヲ講究セサルヘカラサルナリ

勿論時トシテ事實ノ法律ニ優ルヲナキニ非スト雖モ是レ唯非常ノ場合ナル而已サレハ同一ノ巧妙同一ノ銳意以テ事實及ヒ法律ヲ論究スルノ代言人ニ非ルヨリハ決シテ之ヲ完全ノ代言人ト稱スルヲ得サルナリ

【第一〇八號】 二 證書 ○夫レ證書ハ事ヲ確然ナラシムルカ爲メニ供スル者ナリト雖モ而カモ復々常ニ其功用ヲ

爲ス能ハサル者アリ即チ證書ノ固ト未熟者ノ手ニ成リタルト公證人ノ公式ヲ履ンテ作リタルトニ論ナク現ニ其文面上不確然ノモノ往々ニシテ之レアリトス

故ニ其真正ノ解釋ヲ發見センカ爲メニハ深ク精神ニ立入り其約條ノ全體ヲ聚合シ又ハ其約條ヲ分離シテ之ヲ研究シ就中其同時若クハ前後ノ證書又ハ事實ニ依テ其意ヲ檢案シ殊ニ其直接若クハ間接ノ執行ニ注意ス可シ

蓋シ證書ノ執行ハ概ネ結約者雙方ノ意思ノ所在ヲ見ルニ於テ最モ効力アルモノナレハナリ

凡ソ證書ノ解釋認定ノ一様ナラサルヲハ猶ホ夫ノ訴訟事件ノ種類及ヒ其被訴者ノ智識ノ相異ナルカコトシ故ニ其證書ニ就テ代言人ノ議論ノ方法亦此情狀ニ從ヒ常



ニ一定ナルヲ能ハサルナリ  
故ニ代言人ノ證書ヲ論スルヤ或ハ全體ニ就テ其主意ヲ  
發揚シ或ハ二三ノ部分ニ據テ疑義ヲ辯解シ或ハ許多ノ  
情況ヲ總攬シテ一大論斷ヲ成シ或ハ全證ノ原由ヲ明カ  
ナラシメンカ爲メニ種々ノ細目ヲ措テ一箇ノ要點ヲ主  
張シ今日ハ解釋ノ妄ヲ破ランカ爲メニ法律ノ解釋法ヲ  
用ヒ明日ハ文義ノ不明ヲ消散セシメンカ爲メニ雙方ノ  
意思ニ依ル等所謂臨機應變ノ敏智ヲ以テ之レカ解釋ヲ  
求ム可キナリ

〔第一〇九號〕 三 法律○法律ノ討論ハ確實嚴正且ツ學識  
ヲ以テスヘキモノトス而シテ其之ヲ討論スルニ方テハ  
法律ノ正文ニ就テ每語ノ眞意ヲ求メ立法者ノ精神ニ溯

ツテ之レカ本義ヲ繹尋スヘシ蓋シ立法者ノ精神ハ即チ  
每語ノ法律トモ云フヘキモノナレハナリ  
而シテ法律正文ノ説明ヲ爲スニ就テハ左ノ三箇ノ事項  
ヲ探求スルヲ要ス曰ク來由○曰ク解釋法○曰ク從前ノ適用○  
即チ是ナリ  
第一 法律ノ來由○(フ井リアシヨ)○凡ソ法律ハ或ハ他  
國ノ法律ニ由來シ或ハ自國ノ慣習ニ根基スルモノニシ  
テ要スルニ皆ナ其出所アルモノナリ夫ノ佛國ノ古法ノ  
如キハ即チ羅馬法ト曰ク耳曼ノ習慣ト佛國ノ舊慣トニ由  
來スルモノナリ  
サレハ法律ノ外面即チ其字面ニ就テ法律ノ眞意如何ヲ  
確知スヘカラサルキハ其來由如何ニ就テ之ヲ討求スヘ



キナリ寔ニ法律ヲ解釋スルニ就テハ其宗系來由ノ如何ニ從テ大井ニ其趣キヲ異ニシ所謂毫釐千里ノ大差ヲ生スルニ至ルモノトス是レ其法律ノ真意ヲ知ルニ就テ法律ノ來由ヲ知ルヲ必要トスル所以ナリ

第二 法律ノ解釋(アンテルプレタション)○法律ノ解釋ニ就テハ世上既ニ内外ノ著書註解書ニ乏シカラサルヲ以テ苟クモ世ニ代言人タラン者ハ勉メテ之ヲ閱讀スヘキナリ

佛國那烈翁「コード」法典ノ一タヒ世ニ出ツルヤ之ヲ見テ歎シテ曰ク「我法典亡矣」ト寔ニ其著書ノ多キ積ンテ山ヲ成スニ至ルヲ見レハ此歎ノ發スル亦故ナキニ非スト雖モ而カモ若シ能ク之ヲ檢閲講究セハ當ニ其書ノ法典ニ害

ナクシテ其明ヲ掩ハサル而已ナラス却テ此解釋以テ愈光輝ヲ發セシメ而シテ其學理ノ之ニ加フル所アルヲ知ルニ至ラン

第三 法律ノ適用(アプリケーション)○凡ソ法律ノ適用ハ全國總テノ裁判所ニ於テ爲ス所ノモノニシテ其既ニ爲セシ法律ノ適用ハ將來ノ適用如何ヲ知ルニ就テ最モ必要ノト爲ス故ニ代言人ハ宜ク古今種々ノ適用ヲ搜索シ之ヲ研究ス可キナリ此法律適用ノ先例ヲ稱シテ判決事例(シユリスプリユダンス)ト云フ

若シ夫レ法律ノ明文ナク古今學士ノ論說ナク又判決事例ダモ之レアラサル問題ノ生スルヲアラン乎代言人ハ自家ノ見識以テ一己ノ說ヲ立テ若シ此點ニ關シ法律ノ



存スルヲアラシメタランニハ必スヤ斯ノ如ク明言シタ  
 ランヲ信スルニ足ルヘキ確論ヲ案出スルヲ務ムヘ  
 キナリ  
 以上三箇ノ事項ハ即チ法律ノ解釋説明ニ必須ノ要訣タ  
 ルヲ以テ代言人ニ於テハ殊ニ注意研究ヲ要スル所トス  
 今又茲ニ立論及ヒ討論ノ順序ノ一ヲ知ラサルヘカラサ  
 ルナリ  
 凡ソ立論ノ方法種々アリト雖モ其最良ニシテ公明正大  
 且ツ其勝ヲ制スルニ宜キモノハ着實直入以テ至強ノ議  
 論ヲ爲スニ在リ  
 夫ノ猛牛ノ雙角ヲ捕テ其頭ヲ傾ケントスルニハ強剛ノ  
 腕力ヲ要シ而シテ強剛ノ腕力未タ以テ常ニ之ヲ能クス

ルニ足ラサルヲハ人ノ普ク知ル所ナリ今此議論ノ方法  
 ニ就テ論スルモ亦然リ唯至強直入ノ論法ヲ用フル而已  
 ニテハ未タ以テ足レリト爲スヘカラサルヲ勿論ナリト  
 ス故ニ又夫ノ徐説衝側若クハ迂曲ノ論法ヲ以テスルカ  
 如キモ一概ニ之ヲ賤視スヘカラス然レモ通常正面論法  
 ヲ用フルヲ以テ最良ノ法ト爲スナリサレハ代言人タル  
 者ハ宜ク其業ヲ創ムルノ時ヨリ常ニ此法ヲ慣用シ而シ  
 テ之ニ習熟スヘキナリ

【第一一〇號】 討論ノ順序ニ就テハ事件ノ性質ニ從ヒ異同  
 アルヲ以テ豫メ此ニ一定スルヲ能ハス  
 然レモ第一事實ニ就テ論究シ第二證書ニ就テ論究シ第  
 三法律ニ就テ論究スルヲ最モ當然ノ順序ト爲ス



第四節 駁論ノ事 (レフエタシヨン)

【第一一號】 若シ駁論ニシテ立證ノ論辯ト相混スルキハ證明ノ後チニ駁論シ駁論ノ後チニ答辯スルヲ以テ通常トス

若シ又之ニ反シ特ニ駁論ヲ爲スニ方テハ立證當然ノ順序(即チ一、事實二、證書三、法律ノ順序ヲ云フ)若クハ對手結論ノ順序ニ從フヲ得可キナリ

茲ニ立證ノ論辯ト其駁論トニ通用スヘキ事項ヲ述ヘントス

第一 結論ノコ(コンクリエシヨン)○凡ソ代言人ノ周到ナル注意ヲ以テ作爲セル訴訟中ニハ概ネ其事件ヲ約言スル所ノ結論アリ此結論ハ獨リ代言人ノ先導ヲ爲ス而

已ナラス又以テ其攻撃及ヒ辯護ノ要項ト爲ス寔ニ此結論ハ訴答ノ基本タルヘキモノニシテ即チ其辯論ノ骨子タリ故ニ代言人ハ成ルヘク其順序ニ從フヲ要ス此事タル裁判官ノ爲メニハ殊ニ肯綮ト爲ス寔ニ斯ノ如クスルキハ裁判官ニ於テ審ニ其訴答ノ基本相同シキヲ見易キ而已ナラス其辯論若クハ論辯書ニ於テ順序ノ同一ナルガ爲メ其事ニ從フ亦最モ容易ナル可ケレハナリ代理人中動モスレハ此結論ヲ措キ別ニ一箇ノ順序ヲ設クル者アリ是レ大ナル謬リニシテ宛カモ骨學ヲ知ラサル醫ニシテ漫ニ背骨ノ解剖ヲ爲サント企ル者ニ異ナラサルナリ  
夫レ然リ然リト雖モ代書人ノ結論或ハ不完全ナルヲア



リ又太シキハ頗ル危険ナルモノアリ此場合ニ方テ之ヲ  
 補全シ之ヲ訂正シ之ヲ其代書人ニ示シテ改作セシムル  
 ハ蓋シ又代言人ノ任ト爲ス  
 第二 裁○判○言○渡○ノ○フ○(シエヂユマン)○以上述フル所ノモ  
 ノハ專ハラ始審ノ辯論ノ用ニ供スルモノナリ  
 若シ代言人控訴事件ヲ擔任スルキハ其辯論ヲ爲スニ就  
 キ最良ナル指導線在テ存スルナリ何ソヤ始審ノ裁判言  
 渡書即チ是ナリ而シテ此裁判ハ我レニ利アルモノタル  
 ト否トニ關セス共ニ其議論ノ指針ト爲スヘキモノナリ  
 控訴者ノ代言人タラン乎先ツ始審裁判言渡書ヲ採テ之  
 ヲ審査シ毎項其非ヲ擧ケテ之ヲ論破スヘシ而シテ其虛  
 妄ヲ論駁スルヤ假令ヒ始審裁判言渡書ニ爲ス所ノ順序

稍論理ニ違フアルモ仍ホ其順序ニ從フヘシ是レ其控訴  
 裁判官ヲシテ聽取シ易カラシメンカ爲メナリ  
 寔ニ控訴裁判ニ就テハ諸般ノ推測中始審ノ裁判ヲ以テ  
 最モ至重ナルモノト爲ス故ニ代言人能ク之ヲ顛覆シ去  
 ルニ非ルヨリハ對手ニ於テハ其裁判ヲシテ既決ノ力ヲ  
 得セシメンカ爲メ更ニ一言ヲ加フルヲモ要セサルヲ多  
 カルヘシ

〔第一一二號〕 若シ被控訴者ノ代言人タラン乎乃チ始審裁  
 判ヲ以テ公正ナリト認ムルキハ又固ヨリ之ヲ論據ト爲  
 シ其順序ニ從ヒ此ニ論場ヲ構ヘ敵手ノ議論ヲシテ常ニ  
 之ニ引付ケ而シテ順次其裁判ノ至當ナル所以ヲ辯明ス  
 ヘシ苟モ其裁判不當ナルニ非ル限リハ決シテ他ノ趣向



ヲ用フヘカラサルナリ

以上立證ノ辯論及ヒ駁論ノ一ヲ述ヘ畢リタレハ以下反駁辯論ノ一ニ就テ一言スヘシ

### 第五節 反駁ノ事(レブリック)

〔第一一三號〕 今先ツ駁論ト反駁トノ相異ナル所ヲ云ハシニ第一反駁ト駁論トハ辯論中其當サニ爲スヘキノ地ヲ異ニシ而シテ其敷衍ニ精疎ノ差アルヲ第二反駁ハ必ス一駁撃後ノ答辯ナリト雖駁論ハ或ハ豫メ之ヲ爲スヲアリ第三反駁ハ概子辯論ノ最中舌頭火ヲ發スルノ時ニ方テ不意ニ爲ス所ノ即答ニ係ルト雖モ駁論ハ概子豫期シテ準備セルモノタルヲ即チ是ナリ

反駁ノ一大困難ナル所以ハ無備即辯ヲ要スルニ在リ而

シテ其一大緊要ナル所以ハ裁判官既ニ雙方ノ陳述ヲ聽キ既ニ原被訴答ノ事情ヲ瞭知シ而シテ或ハ其心中既ニ判定シ了リタルノ時ニ在ルヲ以テナリ故ニ倘シ敵手ノ爲メニ其訴旨ヲ妨碍セラレタル代言人ニ在テハ無上ノ力ヲ要スル所トス寔ニ斯ル場合ニ際シテハ勢力ト勇氣トヲ加倍シ且ツ巧妙ヲ盡シテ敵手ノ抗撃ヲ論駁シ彼レノ利トナル所悉ク我レ之ヲ奪却セサルヘカラスサレハ此時ノ論駁タル最モ純粹ニ最モ確實ニシテ最モ活潑ナルヲ要シ而シテ一言ノ空論虚説ニ走ラス其論鋒ノ銳利ナル宛カモ名劍利刀ヲ以テ猛撃スルカ如クナラサルヘカラス若シ能ク果シテ斯ノ如クナルキハ業ニ既ニ論争ニ疲倦セル裁判官ヲシテ奮然自ラ刮目セシメ而



シテ再ヒ其辯論ニ着意セシムルニ至ルヘシ蓋シ之ヲ爲  
スノ法唯此一策アル而已トス  
抑此反駁ニ備フルノ方法タル百方其事件ヲ觀察シ許多  
ノ細目ヲ詳悉シテ且ツ彼我兩造ノ間ニ起リシ最初ヨリ  
ノ辯論ヲ蓄ヘ之ヲ腦中ニ藏ムルニ在リトス

### 第三章 辯論ノ元素

〔第一一四號〕 凡ソ代言人ノ訴答辯論ニ必要ニシテ即チ其  
元素ト稱スヘキモノ數項アリ請フ左ニ之ヲ列叙セン  
第一 明白（クラルテト）○凡ソ辯論ニ明白ヲ要スルハ猶  
ホ夜行燭ヲ要スルカゴトシ故ニ其辯論ノ明白ナラサル  
片ハ裁判官ハ宛カモ無燭暗夜ヲ行ク者ノ如ク遂ニ其論  
旨ヲ認ムルヲ能ハサルヘシ

サレハ代言人ニシテ不明ノ辯論ヲ爲スハ猶ホ夫ノプラ  
ンノ詩ニ所謂、點火セサル魔燈ヲ携示スル所ノ猿猴ト一  
般ニシテ最モ賤ムヘキ者ト爲スナリ  
寔ニ代言人ナル者ハ裁判官ヲ引誘スルカ爲メニ設ルモ  
ノナリ然リ而シテ若シ其辯論明白ナラサル片ハ却テ大  
ニ迷誤セシメ遂ニ其被護人ノ不利ヲ來スニ至ラン豈之  
ヲ代言人ノ職ニ適スル者ト云フヘケンヤ  
リウピール氏曰ク若シ代言人ニシテ其辯論ノ不明、裁判  
官ノ迷誤ヲ來ス如キアラハ余ハ組合會長ノ職權ヲ以テ  
之ヲ訟廷ヨリ逐斥スヘキナリト  
第二 短簡（ブリエウテ）○辯論ニ短簡ヲ要スルヲ猶ホ  
夫ノ明白ヲ要スルト同シク殊ニ明白ト短簡トノ二者ハ



互ニ相須テ離ルヘカラサルモノト爲ス  
 寔ニ其辯論ノ各章各句ニ就テ見ルキハ概ネ皆ナ明白ナ  
 リトスルモ若シ其論冗長ニ渉ルニ於テハ唯此一事ヲ以  
 テ遂ニ不明トナルヘキナリ  
 今近ク取テ譬ヘンニ辯論ハ猶大氣ト水ノゴトシ人若シ  
 大氣ノ一分子ヲ觀ルキハ純然無色ナルモ而カモ天ハ蒼  
 タタリ、又夫一掬ノ水ハ透明無色ニ似タリ而カモ湊合、深  
 淵ヲ爲スニ至テハ水底ノ砂石ヲ辯スルヲ能ハス蓋シ辯  
 論ノ法之ニ異ナラサルナリ  
 第三 順序(メトード)○凡ソ演說ニシテ順序ナキモノハ  
 之ヲ訴答ノ辯論ト稱スヘカラス世人之ヲ呼ンテ「ガリマ  
 シアム」紛亂解ス可カラト云フ故ニ一定ノ順序ナキ辯論

ハ忽チ其價格ヲ失ヒ而シテ其効果ヲ得サルヘシ  
 代言人ノ辯論ニシテ順序ナク爲メニ裁判官ノ心思ヲシ  
 テ此レヨリ彼レニ移ラシメ彼レヨリ此レニ轉セシメ僅  
 ニ一線路ヲ認メテ此ニ其歩ヲ固メントスルヤ代言人ハ  
 又偶然之ヲ他ノ線路ニ導キ或ハ直チニ他ノ新路ニ推進  
 セシメ或ハ又既ニ經過シ來レル舊線路ニ再誘スルカ如  
 キヲアルキハ裁判官ヲシテ徒ラニ其間ニ彷徨セシメ遂  
 ニ其出ル所ヲ知ラサラシムルニ至ル於之乎若シ敏捷ナ  
 ル敵手アツテ少シク明白簡易ノ進路ヲ指示スルニ於テ  
 ハ直チニ其路ニ入ル可キナリ  
 第四 主一(ユニテイ)○凡ソ裁判上ノ演說ハ百事唯一ノ  
 目的ニ向テ誘致スルヲ必要トス否サレハ遂ニ其目的ヲ



達スルヲ能ハサルヘシ  
 サレハ代言人ノ知識ヤ精神ヤ巧妙ヤ皆ナ之ヲ勝訴ノ一  
 事ニ供セサルヘカラス若シ夫レ之ヲ他事ニ供スルハ  
 即チ其知識精神巧妙ヲ浪費スルモノト云フヘキナリ  
 又之ヲ他事ニ供スルモ時トシテハ群衆ノ喝采ヲ博スル  
 一アラン然レモ其喝采ハ決シテ裁判官ト依頼人トニ出  
 サルヘキナリ  
 第五 詞章(スチール)○上文明白ノヲヲ説クニ際リテ既  
 ニ裁判上ノ文書ニ主要ノ性質ヲ一言セリ今之ニ加フル  
 ニ純正(ピユルター)ト簡易(サンプリシター)トノ二者ヲ以  
 テス可シ而シテ通常ノ事件ノ爲メニハ他ニ何等ノ事項  
 ヲモ要ヒサルナリ然レモ夫ノ詞章ナル者ハ事件ノ情況

ト輕重トニ從テ變動アルモノナレハ右述フル所ヲ以テ  
 百事皆ナ充分ト云フヘカラス夫ノデモステ一又 紀元前  
 十一年アテヌニ生レ四カ帝室ノ爲メニセシ演説シセロ  
 百二十二年毒殺ニ遭フ  
 紀元前百七年アルピニユムガシロンノ爲メニセシ論  
 ンニ生レ四十四年暗殺セラレムニ生レ共和ガモラン  
 辯ランゲ一 千七百三十六年レームニ斬セラレ 千七百三十三年十  
 チエー侯ノ爲メニセシ辯護タルシエ 二月十七日巴里ニ  
 生レ千八百七年九月七ガラロシエールドサランシ一ノ  
 日モリエルニ於テ死ス  
 爲ニセシ辯論ノ如キ或ハ貴重ノ生命ニ關シ或ハ自由名  
 譽ニ關スル事件ニ至テハ其詞章亦夫ノ年金或ハ地役若  
 クハ買戻シ契約ニ係ル訴答ノ事件ト同シカラサルナリ  
 然レモ通常ノ事件亦裁判官ノ意ニ快適シ又ハ其精神ヲ  
 振起スル所ノ佳言婉語ヲ用ヒテ其詞章ヲ飾ルヲ得ヘシ



然レト此文飾ヲ用ヒンニハ宜ク左ノ二要件ヲ守ルヘキナリ即チ第一此文飾ハ巧手ノ施ス所タルベク第二之ヲ以テ聽者ノ意想ヲ事件外ニ移轉セシメス常ニ其事件ニ誘致スルモノタルヲ要スル一是ナリ

第六 辯説法(テビ一)又言容ト譯ス○凡ソ辯説ノ方法ハ質素ニシテ且ツ溫柔ナルヲ要ス寔ニ溫柔ノ一タル能ク何人ニモ適合スル所ナリト雖モ殊ニ少壯ノ者ニ於テ必要トス

然レト代理人ハ保護ノ職ニ任スル者タルヲ以テ又漫ニ怯憶ニ過クヘカラス

代言人ハ疾クヨリ其聲音ニ餘力ヲ蓄フヘシ若シ常ニ高聲ヲ發スルニ慣ル、ニ於テハ假令之ヲ能クスル者ト雖

モ時ニ臨ンテ高聲ニ過キ高聲變シテ喊叫トナリ辯者ト聽者ト共ニ疲勞ヲ覺フルニ至ルヘシ

第七 手容(セスト)○手容ハ音調ノ憑據ト之カ補充ニ用フルモノナリ

凡ソ手容ヲ用フルハ質素ニシテ且ツ控目ナルヲ要ス殊ニ法廷ニ於テハ粗大ノ手容ヲ要スル一甚々稀ナリ

蓋シ上古ニ在テハ代言人ノ辯論ヲ爲スニ方テ身體ノ暴動及ヒ劇烈ノ手容ヲ爲スヲ以テ常トセリ而シテ甚シキ

者ニ至テハ自己ノ席ヲ離レ柵欄ノ内ニ進入シテ裁判官ト並立スルニ至ル者アリ或ハ又辯論シナカラ法廷ヲ逍

遙スル一數千歩ニ及フ者アリト其他手ヲ以テ額ヲ打ち又踵ヲ打ち若クハ足ヲ以テ地ヲ打ツカ如キハ夫ノシセ



ロン、カンチリアンノ如キ有名ノ辯士モ亦之ヲ許ス所ナ  
 リキ  
 或人曰ク言容ト手容ト而已ヲ以テハ未タ其演説ヲ全フ  
 スルヲ能ハス宜ク之ニ體容、面容ヲ以テスヘク就中目容  
 ヲ以テ之カ勢ヒヲ助クヘシト  
 凡ソ辯者ニ感動ノ徴ナキハ聽者亦之ニ感スルナキヲ  
 以テ以上舉クル所ノモノ悉ク之ヲ不用ト云フヘカラス  
 唯其之ヲ用フルニ過不及ナカラントヲ要スル而已  
 第八 辯説ノ作用(アグシヨン、ヲラトワール)○何ヲカ辯  
 説ノ作用ト云フ曰ク當然ニシテ且ツ完全ノ意義ヲ云ヘ  
 ハ所謂作用トハ上文述ヘ來ル所ノモノ即チ言容、手容、體  
 容、面容等皆之ニ包含スルモノナリト

故ニ辯説ノ作用ハ最初ノ發音最初ノ手容最初ノ放眼ヲ  
 以テ始リ而シテ又其最後ノ聲音手容放眼ヲ以テ終ルモ  
 ノトス  
 或人デモテ一ヌニ問テ曰ク何ヲカ演説ニ主要ノト爲  
 スヤト答テ曰ク曰ク作用ナリ再ヒ問フ曰ク作用ナリ三  
 ヒ問フ又曰ク作用ナリトデモ一ヌノ作用ヲ重ンスル斯  
 ノ如シ而カモ未タ以テ驚クニ足ラサルナリ何トナレハ  
 夫ノ善良ノ演説モ其聲音美ナラサルキハ毫モ其効ヲ生  
 スルヲナク而シテ其演説ノ稍拙劣ナルモ其發聲ノ活潑  
 且ツ爽快ナルニ於テハ却テ其効ヲ生スルヲ大ナレハナ  
 リ  
 夫レ然リ數千ノ群衆雲霧ノ如ク相集ル大會ニ向テ演説



ヲ爲ス者ハ實ニ其作用ヲ以テ主要ノ勢力ヲ收ムルモノトス

夫ノ僅々三五ノ裁判官アルニ過キサル狹隘ナル訟廷ニ於テハ辯說ノ作用斯ノ如キ勢力ヲ生スルニ至ラス而カモ若シ此ニ陪審ノ列席スルアルキハ之ニ對シテ一大勢力ヲ顯ハスモノトス何トナレハ凡ソ演說ノ脈絡ニ巡還スル所ノ靈魂ノ熱度ハ又必ス他人ニ感通スルモノナレハナリ乃チ其作用ニ依リテ聲音、震動ヲ發シ、雙眼、光ヲ放チ、手容、活潑ト爲ル此時ヤ其辯護人ノ狀宛カモ鬼神ノ如ク又精神ノ全カト滿身ノ舉動ヲ以テ辯說スルカ故ニ裁判官及ヒ傍聽人ノ之ニ感スルコト幾ント其然ル所以ノ理ヲ解スヘカラサルモノアルニ至ル蓋シ此微妙親密ノ氣

脈ハ一種ノ震動ヲ起シテ他人ノ心神ニ感通ス而シテ其之ニ感動スル者ハ恍惚トシテ醉ヘルカ如ク遂ニ其心氣ヲ奪ハル、ニ至ル辯ノ力又鴻大ト云フヘキナリ

第四章 商量(詞訟鑑定)ノ事

〔第一一五號〕 夫レ商量ハ往古ニ在テハ百般ノ訴訟ニ付テ豫メ行フヲ要スルコトナリシナリ故ニ當時一モ商量ヲ經サルノ訴ヘナク又商量ヲ經サルノ辯護ナカリシナリ夫ノ羅馬人ノ如キ苟モ其權利ノ明確ナラサル事件ニ付テハ悉ク之カ商量ヲ爲シタルナリ

佛國ノ如キモ古來專ハラ商量而已ニ從事スル代言人太々多カリシト蓋シ商量ハ代言職ノ一部分ニシテ最モ重要ノモノタリシナリ



然レモ職業事務ノ流行亦夫ノ衣服ノ流行ノ如ク然ルモ  
ノナルヲ以テ既ニ輓近ニ至リテハ此有益ノ事業モ幾ン  
ト人ノ賤視スル所ト爲リ又世人ノ商量ヲ求ムル者亦太  
タ稀ナリト故ニ今日ノ如キハ從來久シク代言ノ本務ヲ  
執行シタル二三ノ代言人ニシテ晩年僅ニ之ニ從事スル  
者アルニ過キスト云フ

サレハ方今ニ在テハ凡ソ訴訟ノ事件ハ既ニ代書人ノ準  
備ヲ經タル後チニ代言人ノ手中ニ移轉シ來ルモノニシ  
テ代言人ハ唯之ヲ研究スルニ止マルナリ故ニ若シ代書  
人ニシテ堅固ナル實際家タラス從テ其實行ニ就キ嚴密  
ノ論旨在テ備ハラサルキハ代言人自ラ之ヲ發見シ而シ  
テ辯論スルヲ要ス且ツヤ其一件書類モ僅ニ辯論數日ノ

前ニ至ラサレハ之ヲ交付セサル一往々之レアルヲ以テ  
夫ノ「バル、マン」在昔裁判ノ時代ニ於ケル如ク常ニ充分  
ノ準備ヲ盡シテ訟廷ニ出ル一時期ス可カラサルナリ  
〔第一一六號〕 代言人ノ商量ヲ爲スニハ書面若クハ口述ヲ  
以テ其旨趣ヲ説明ス可シ

書面ヲ以テ説明スル場合ニ於テハ先ツ書類ヲ檢閲シ而  
シテ其依頼人ノ姓名ヲ記シタル後チ依頼人ノ告知シタ  
ル事實ニ從ヒ簡短ナル略述書ヲ作ルヲ以テ始メト爲シ  
次キニ法律ノ一ニ及フ可シ  
又口述ヲ以テスル場合ニ於テハ別ニ事實ノ畧述書ヲ作  
ルヲ要セス唯依頼人ヨリ示ス所ノ書類ニ就テ其意見ヲ  
陳告スルヲ得可シ



蓋シ依頼人ヨリ告クル所ノ事實及ヒ其提供スル所ノ書類ハ概子之ヲ敵手ノ書類ト参照検査スヘカラサルカ故ニ乃チ此商量ノ意見ハ敵手ノ書類ニ關セス一ニ依頼人告クル所ノ事實ヲ眞實ト認メテ爲セシ者ニ過キサルヲ明記スルヲ可トスルナリ

又既ニ他人ノ爲シタル商量ノ檢閲ヲ依頼セラルヘトアラシカ此場合ニ於テハ其説明書ニ依ラスシテ專パラ一件書類而已ニ依テ商量シ而シテ若シ其説明書ニ對シ反對ノ意見ヲ述フルノ必要ナルキハ即チ之ヲ詳述シ且ツ其錯誤アル所ヲ指示ス可シ

凡ソ商量ニハ最モ簡明ニ其理由ヲ述ヘ而シテ不用ノ言語ヲ用ヒス又毫モ主旨以外ノヲヲ説クヘカラス

而シテ其意見ハ成ル可ク一般ニ涉ラスシテ格段ノ事實ト特別ノ問題トニ分割スルヲカムヘシ但シ特ニ一般且ツ普通ノ問題ニ關スルキハ格別トス

〔第一一七號〕 商量ハ訴答辯論ト相異ナルモノトス蓋シ商量ハ敵手ノ權義如何ニ拘ハラス一ニ依頼人ヨリ示シタル所ノ事實如何ニ就テ斷案セサルヘカラス寔ニ商量ノヲタル夫ノ訴答辯論ニ於ケルカ如ク辯護人タリ保護人タルノ事業ニ非スシテ謂ハ、私ノ裁判言渡ヲ爲スモノナレハナリ

此時ニ際リ代言人ノ依頼人ニ利益ヲ致スヤ之ヲシテ不利ノ詞訟ヲ起サシメス若クハ速ニ其詞訟ヲ止メンヲ命スルニ在リ而シテ其之ヲ不利ナリト斷定スルノ利益



ハ却テ之ヲ利アリト鑑定スルノ利益ニ優ルヘキナリ(第二七號參觀)

故ニ代言人ハ其依頼人ニ對シテハ充分ノ眞實ヲ告知スヘシ假令之カ爲メ依頼人ノ不滿ヲ懷キ若クハ其關係ヲ破滅スルニ至ルノ恐レアルモ仍ホ其忠言ヲ盡スヲ要ス蓋シ本分ハ代言人ノ爲メニ最上ノ法律タレハナリ

第四編 法廷雄辯史略

第一章 辯ノ起源及ヒ其總論

夫レ辯ハ言語ノ精華達意ノ活機而シテ其起源蓋シ天地剖判ノ時ニ在リ

此ニ天地アリ則チ此ニ人ナキト能ハス天地ト人トハ殆ト同時ニシテ生成ス然リ而シテ人ノ初メテ此世ニ生スルヤ其腔子裏必ス一種子ヲ包ム時ニ事物ニ觸レテ其萌芽ヲ發セントス是レ則チ所謂辯ナリ

曰ク天、曰ク人、曰ク智識、曰ク言語此四者相待テ離ル可カラズ天既ニアリ則チ亦人アリ言語ハ人ト共ニ生ス所謂ル言語ナル者豈唯聲音ニ發スルノミナランヤ目ノ視手ノ動ク亦言語ト稱シテ可ナリ但々其外ニ發洩スル自ラ巧拙ノ別



アリ辯ト不辯ト相岐ル所以ナリ  
 生人ノ初メ、神之ニ告クルノ言アリ聖經假テ以テ道ノ本源  
 ト爲ス其言ニ曰ク世界元ト無カル可カラス而シテ果シテ此  
 世界アリト嗚呼億萬無量ノ事物ヲ渾々沌々ノ中ヨリ擧ケ  
 生動、死靜、二體ノ奇觀ヲ示シテ遺サス何ソ其レ造化ノ言ノ  
 微妙ナルヤ蓋シ此言、一以テ萬理ニ貫通スルノ辯ニ非ス然  
 レモ夫ノ時、處、事物ニ應スル關係的ノ辯ニ至リテハ天下復  
 タ此上ニ出ル者ナカル可シ  
 是故ニ眞神ハ萬物ノ本ニシテ亦辯ノ源ナリ此理玄妙、而シテ  
 自ラ人ノ心肝ニ銘シテ忘レシメス但タ魔雲天ヲ蔽ヒ偽教  
 眞ヲ汨リ爲メニ人々久シク其本源ノ惟一無二ナルヲ覺  
 ヲサリシノミ然レモ昔人既ニ辰星ヲ以テ辯ノ本源ト爲ス

是レ其識見陋隘、遠ク心思ヲ眞神ノ本體ニ運スト能ハサル  
 ニ由ルモ亦以テ益、其眞神ノ廣大不可思議ナルニ敬服セシ  
 ノ證ト爲ス可シ蓋シ昔人ノ爲ス所獨リ此一事ノミナラス  
 或ハ幸福ヲ享ケ或ハ微妙ノ事ニ遇ヘハ則チ一事一物必ス  
 毎ニ其神アリテ使ムル者ナリト謂ヘリ  
 抑モ幽玄不可思議ノ界ニ在テハ眞神ヲ以テ辯ノ本源ト爲  
 スモ吾人現ニ棲息シ現ニ目撃スル、此人世ニ在テハ辯ノ由  
 テ生スル所ノ基本ニアリ何ヲカ其基本ト謂フ曰ク人道、日  
 ク快樂、此二者ハ即チ吾人ノ須臾モ相離ル、一ヲ得サル所  
 ナリ試ミニ問ハン汲々トシテ業ヲ執リ孳々トシテ學ヲ強  
 メ夙夜乾々トシテ敢テ懈ラサル者ハ將タ何ノ爲メニスル  
 所アリテ然ル乎其志、道德ヲ守リ快樂ヲ得ント欲スルニ在



ルヤ知ル可キノミ但々此二者往々其識別ニ苦ムコアリ蓋  
 シ其外觀ノ變化極リナク紫以テ朱ヲ奪ヒ粉以テ眞ヲ飾リ  
 縱令理ヲ推シ精ヲ析クモ猶ホ時ニ誤ラル、コナシトセス  
 且ツ夫レ利得ナル者ハ人ノ同シク欲スル所故ヲ以テ輒モ  
 スレハ人心ヲ蕩亂シ反覆常ナカラシム人ノ之ニ眩惑スル  
 者亦陽ニ道德ヲ假冒シ而シ陰ニ是ヲ之レ貪ル殊ニ怯懦過  
 慮ノ人ノ若キハ間々此利得ト快樂トノ外形ニ誘ハレ遂ニ  
 道德ヲ顧ミサルニ至ル嗚呼道德快樂ノ識別亦甚々難シ矣  
 以上既ニ辯ノ元素ヲ示シタリ其一ハ則チ言語ニシテ感發  
 奮迅活潑ノ勢アル者はナリ其一ハ則チ利得道德是ナリ今  
 吾人緘黙シ難キノ時機ニ際スルヤ辯必ス心裏ニ沸涌シ滔  
 々迸出シテ盡キス其勢恰モ光線ノ空ヲ驅ケ電氣ノ物ニ感

シテ動クニ異ナラス直チニ他人ノ心神ニ擠入ス可シ  
 思フニ遼古此辯ノ初メテ起ルヤ定メテ其狀態言フ可カラ  
 サルヲ知ルナリ其始メテ愛憎ノ情ヲ他人ノ心神ニ感通セ  
 シメタル所ノ言語ハ之ニ下スニ如何ノ名稱ヲ以テセシ乎  
 吾カ意ヲ吐露スル則チ此ニ之ヲ達シ聽者ノ之ニ同スルヲ  
 欲ス聽者ノ吾カ意ニ同スルヲ欲スル則チ其言語ノ奇ヲ弄  
 シ巧ヲ極メ且ツ奮激以テ人ヲ感動スルノ必要ナルコトヲ悟  
 ル乃チ知ラス識ラス遂ニ始メテ妙辯ノ域ニ達ス可キナリ  
 然レモ余豈辯ハ必ス人ノ歡娛快樂自ラ適スルニ先タサル  
 可カラス又寧ロ其境界ヲ離ル、コトヲ得可シト斷言センヤ  
 今茲ニ人アリ自ラ棄ツ人モ亦顧ミス唯其爲ス所ニ任ス此  
 人ヤ房屋衣服飲食ナク保生的ノ物散シテ其傍ニ在ルモ敢



テ之ヲ採撫スルヲ爲サス終日終夜地上ニ横臥スルノミ  
 此人ヤ未タ其情欲ヲ遂クルヲ能ハス憂苦ニ泣キ飢寒ヲ呼  
 ヒ時々大叫シテ薄命ヲ訴フ其言呶々了解ス可カラス若シ  
 其稍愛ヲ解キ悶ヲ遣リ纔ニ其情欲ノ一分ヲ充タスヲ得  
 レハ則チ大聲ヲ發シテ喜悅ヲ表ス嗚呼此人ト雖ヒ亦其妙  
 辯ヲ用フルノ時機ナカラサランヤ  
 日月流ル、カ如ク歳紀互ニ推移ス世態復タ昔日ノ觀ニ非  
 ス人既ニ相聚リテ群ヲ成シ乃チ其中ニ棲息シ自ラ以テ得  
 タリト爲ス已ニ上世無智蒙昧ノ境界ヲ脱シ加フルニ賢哲  
 踵ヲ接シテ輩出シ漸ク學術ノ發明ヲ積ミ以テ之ヲ後世ニ  
 傳フ是ニ於テ手辯モ亦遂ニ煥發シテ赫々ノ光耀ヲ成ス是  
 レ即チ近世ニ於テ見ル所ナリ

夫レ人、老幼ノ別ナク其年齒推遷ノ間各々必ス特殊ノ状態  
 ヲ有ス而シテ辯モ亦必ス之ニ追隨ス今コ、ニ其人情年ヲ逐  
 フテ變遷スルノ狀ヲ畧述セン  
 古人曰ク凡ソ人情百般ノ景狀ハ一人以テ盡ク之ヲ表示ス  
 ルヲ得可シト宜哉此言ヤ抑モ人ノ始メテ此世ニ生スル  
 ヤ其性活潑而シテ能ク激怒ス生理ハ全ク外部ニ在リ其機關  
 自ラ活動ス内部ノ生理ハ未タ至大ノ關係ヲ有セサルナリ  
 其數年ヲ閱ルニ至テヤ反動コ、ニ起ル乃チ昔日ノ固信セ  
 シ所、今之ヲ疑ヒ其真偽ニ惑ヒシ所ハ果シテ如何ナルヤヲ  
 究極セント欲ス智力日ニ發達シ心思ヲ道德ニ專ラニス  
 是ニ於テ乎形以上ノ學ヲ勉ム此ノ如キモノ數年而シテ又其  
 景狀ヲ一變ス智識身體共ニ全ク成熟シ同シク其歩ヲ進ム



而ノ其精神ノ注ク所内部ニ在ルト外部ニ在ルトヲ論セス  
 其機能概テ均シク動キ其意思ヲ百方ニ運ラシ常ニ能ク其  
 中ヲ得是レ幼穉弱少ニ見サル所ナリ若シ夫レ老耄退却ノ  
 景狀ハコヽニ之ヲ論セス  
 一人畢生間ノ景狀ハ即チ千萬人ノ景狀ナリ此ヲ推シテ以  
 テ彼ヲ知ル可シ而シテ人情ハ實ニ赤子タルノ時ニ存ス抑モ  
 此辯ナルモノ如何シテ上世ニ起リタル乎請フ神ヲ馳セ思  
 ヲ運シテ遙ニ上世ヲ想ヘ又且ツ史家ノ所謂ル人類始メテ  
 居住セシ山林ニ入テ觀一觀セヨ樹木鬱蔭土地荒廢、蝸廬ノ  
 如キモノアレヒ人住セヌ牛羊群ヲ爲シテ各々其性ヲ放ニ  
 ス更ニ步ヲ林罅ニ移セハ雲煙天ニ蒸シテ人アルヲ示ス  
 果シテ見ル衆相會シテ何事ヲカ談スルヲ須臾ニシテ衆皆

織獸、寂トシテ人ナキカ如シ忽チ辯士アリ起立シテ衆ニ謂  
 テ曰ク諸君請フ聽ケト嗚呼此境界亦猶ホ辯アリテ存ス  
 然リ生人ノ初メ猶ホ此辯アリ但々其極古人民タルノ性質  
 ヲ具フルノミ即チ多ク體勢ヲ假リ或ハ兩手天ヲ指シ或ハ  
 毛髮ノ血ニ蠟レ塵ニ汚レタルヲ示シ矢ヲ矯メテ吶喊シ出  
 戰ヲ促ス然リ而シテ敢テ其言ヲ混セス神ト交ハリ心、心ト  
 通シ我カ激怒以テ彼カ激怒ヲ挑撥ス其相應スルノ速ナル  
 一電氣ノ物ニ感スルニ異ナラス體勢手様ノ形容以テ言語  
 ノ用ヲ爲セハナリ然レヒ此ノ如キハ固ヨリ幼穉ノ人民、未  
 ヌ智力ヲ備ヘサル者ナリ  
 幼穉人民ノ景狀此ノ如シ而シテ世ノ新ニ開明ニ進ムヤ必ス  
 毎ニ此景狀ヲ呈ス蓋シ人情ナルモノ特ニ地球上ノ一角ニ



生シ而シ歳月ヲ積ミ開明ニ從ヒ漸次各地ニ派及セシモノ  
 ニ非ス特別ノ性情ヲ有スル人種遠ク其地ヲ隔テ生シ而シ  
 幼穉、育長、成熟ノ質ヲ同シフスルモノアリ之ヲ山岳ノ火ヲ  
 噴クニ喩フ一山ハ先ンシ一岳ハ後ル終ニ並ニ滅ス蓋シ其  
 火炎ノ本源同一ナルモ人之ヲ知ルヲ能ハサルノミ乃チ人  
 類ヲ生スルノ本源亦此理ニ外ナラサルナリ  
 弱少人民ノ辯ハ幼穉人民ニ於ケルモノト其性質ヲ異ニス  
 幸ニシテ學術ノ影響ヲ受ケ其辯必ス事實ニ根柢ス其人ノ  
 心神ニ感セシムルカ爲メニハ既往ノ事蹟ヲ擧ケテ之ヲ將  
 來ニ推ス乃チ復々觀感直チニ動キ速了、思慮ニ追アラサル  
 カ如キヲナシ彼レホメール（西洋紀元九百餘年前ノ詩人）ハ何人ソヤ我ニ  
 示スニ一ノ英傑ヲ以テス英傑モ亦其煩悶ヲ遣ルニ所ナク

心胸ヲ拊テ昊天ニ號泣ス（ホメール詩中ノ）ハ神女  
 ノ子、利刀ヲ頭上ニ弄シテ路傍ニ横行ス時ニ海濱ニ彷徨シ  
 テ倒山ノ怒濤ト其咆哮ノ響ヲ爭フリアームハ貴フシテ  
 且ツ老フ其窮苦ヲ嗟シ其不遇ヲ歎シテ之ヲ神人ニ訴フ嗚  
 呼世上此言ヲ聽ク者孰カ爲メニ感動ヲ起サ、ル乎又其詩  
 人ノ材料ニ富ムニ驚カス之ヲ目スルニ俊邁ノ辯士ヲ以テ  
 セサル者アル乎  
 辯アレハ則チ其法規アリ辯ハ豈唯感情ニ發スルモノ、ミ  
 ナラン哉實ニ一箇ノ術ナリ然リ而シ人其少小ノ時ニ在テ  
 ハ信ヲ、觀ル可キノ事物ニ置ク且ツ昔時ノ風教、萬事萬物不  
 可思議ト爲スヲ以テ人情亦此年紀ニ在テハ大ニ他ニ異ナ  
 ラサルヲ得ス即チ一ニ宗教上若クハ道德上ノ定則ニ歸



依信據スルヲ常トス此性質ヤ夫ノ史家ノ所謂ル黄金世界ノ名稱ニ適スルモノナリ  
 是ニ於テ乎一舉一動自ラ其正道ニ適スルヤ否ヲ省ミ人モ亦此ニ注目ス道德人心ニ徹シ是非ノ論世上ニ遍シ乃チ辯モ亦此道德ヲ以テ潤色ト爲ス若シ夫レ體裁固ヨリ完備セサルニ論ナシト雖モ然レモ其大本ニ至リテハ實ニ感歎ニ堪ヘサルモノアリ  
 今又更ニ論歩ヲ進メテ其反動ノ景狀ヲ觀察セン抑モ人生、  
 弱少ニ續クニ壯年ヲ以テス時世モ亦然リ第二期去テ第三期ニ移ル乃チ其嘗テ信シタル事物、一ニ皆之ヲ疑ヒ其初メ可認セシ論議ハ更ニ飽マテ其是非ヲ研究セントス頑硬自ラ用井專ラ其智其力ニ信依ス是レ即チ此世期反動ノ景狀

ナリ  
 辯モ亦此世期ニ從フテ推移ス其幼稚ヲ去ルヤ未タ甚タ遠カラス而シ早ク已ニ其良性質ヲ亡失ス乃チ唯新奇ヲ喜ヒ、  
 争フ可カラサル事實モ既ニ陳腐ニ屬スルモノト思料スレハ輒チ勉メテ之ヲ駁撃ス社會構成ノ舊基礎ハ摧破シテ餘サス毫モ宗教ヲ信セス而シ妄ニ共和ノ主義ヲ唱フ  
 此時ヤ辯其強暴ヲ逞フスルモノト謂フ可シ人々一ニ其力ヲ頼ミ又其度ニ過クルニ非サルヨリハ決シテ世ニ著ハルハ、  
 一ヲ得ス而シ近ク言語ノ術大ニ其光輝ヲ煥發セシノ後ヲ享クルモ其紀念ノ存スルモノ殆ト絶無ニ屬ス其僅ニ存スルモノハ亦開化ノ新主義ヲ待ツニ堪ヘサル弱少人民ニ關スルモノタルニ過キス蓋シ其人民ノ景狀、猶ホ彼ノ大膽



ナル航海者其未タ曾テ見聞セサル岸上ニ船ヲ擱スルヤ或ハ之ヲ碎キ或ハ之ヲ火ニシ以テ其復ヒ歸ラサルヲ示スト一般、獨リ進ムヲ知テ退クヲ知ラサルモノト評シテ可ナリ

時勢已ニ此ノ如シ此辯ノ元素タル道德、利得ノ二者果シテ如何ナル景狀ヲ呈セシ乎

人或ハ曰ク利得私營ハ反動ノ時世無比無類ノ根軸ト爲ルト此言信シ難シ諸共和政治ノ吏ニ徵スルニ身吝唯利是レ貪ルヨリハ寧ロ節義ニ勇ミ身ヲ殺シテ仁ヲ成スノ風アリ

又曰ク當時ノ改新者流、道德ヲ以テ其目的ト爲スト是レ亦採リ難キノ言ナリ何ヲ以テカ之ヲ言フ古來革命ノ景狀ヲ察スルニ其結果或ハ纒ニ道德ノ一分子ヲ含ムモ其方法、主

旨共ニ道德ニ適セス又其之ニ適スルヲ望ミ難キナリ是ニ於テ乎辯以テ眞純道德ノ本ヲ明ニシ以テ世ノ擾亂ヲ理メ人ノ情欲ヲ抑ヘサル可カラス然リ道德實ニ此世期ヲ支配セサルモ非道不徳亦之ヲ支配スト謂フ可カラス

此中位ノ景狀去テ成熟ノ時期之ニ續ク乃チ利得實益ノ支配コ、ニ創メテ起リ貴賤貧富トナク各々其私ヲ營マンヲ爭フ然レモ此爭ヤ深ク秘シテ外ニ見ハレス一人ノ敢テ其恥ツ可キノ胸襟ヲ披テ之ヲ公示スル者アラス百方力ヲ盡シテ私情ヲ掩蔽ス若シ夫レ已ムヲ得サルニ至レハ則チ正道德義ノ假面ヲ蒙フリテ之ヲ明白ニス嗚呼孰カ此偽君子ノ瞞着スル所ト爲ランヤ然レモ世人舉テ此方ヲ用井以テ其私情ヲ發洩セサルハ莫シ



吾人正ニ此世期ニ在リ其辯果シテ如何ト評ス可キ乎蓋シ  
 當世ノ辯ヤ大ニ見ル可キモノアリ而シテ亦缺失スル所ナク  
 シハアラス其體裁ノ善且ツ美ナル以テ萬世ノ師表ト爲ス  
 ニ足ル然レモ最モ厭フ可ク最モ恥ツ可キノ貪婪ニ誘惑セ  
 ラレ非ヲ矯メテ是ト爲シ一ニ外貌ヲ粉飾シテ非理ノ理ヲ  
 弘布ス嗚呼此辯果シテ如何ト評ス可キ乎  
 辯ノ用亦漸ク大ナリ事ヲ成シ志ヲ遂ケント欲スル者皆之  
 ニ依ラサルハ莫シ或ハ不義ノ利ヲ射ル、辯亦之カ用ヲ爲ス  
 ニ至ル且ツ夫レ世上ノ議論固ヨリ千岐萬端、一定ニ歸スル  
 一ヲ期シ難シ而シテ所謂ル當然ノ事ナルモノ亦果シテ然ル  
 ヤ否ヲ判別シ易カラス萬事萬物、人爲之ヲ左右スル一ヲ得  
 可シ又夫ノ正道ナルモノ辯士ノ舌頭輒ク之ヲ邪僻ニ枉ク

ル一ヲ得可シ故ヲ以テ動モスレハ道德ヲ斥ケ非道不徳ヲ  
 勸メ世人亦自ラ覺ラス誤テ其邪説ニ迷フニ至ル嗚呼人生  
 固有、最美最優ノ能、濫用何ソ一ニ此極ニ達スル乎何爲レソ  
 其本同シフシテ其末ノ異ナル此ノ如クナル乎嗚呼又言語  
 ノ得失ヲ云々スル彼ノエツツ西洋紀元五百餘年前ノ言ヲ  
 シテ實ナラシムル一此ニ至ル乎實ニ歎惜ニ堪ヘサルナリ  
 辯ノ性質、時世ニ從フテ變遷スルノ狀畧ホ前ニ述フルカ如  
 シ請フ以下、此編ニ録スル所特種ノ辯ヲ以テ之ヲ彼ノ利得、  
 人道ノ二根軸ニ照シテ果シテ如何ナル乎ヲ觀察セヨ  
 吾人正ニ鐵世ニ在リ此間人心未タ全ク正道徳義ヲ失ハス  
 但タ其光輝未タ爛トシテ灼ナラサルハ前ニ説示スル所ノ  
 如シ然リ而シテ凡ソ百般ノ學術各世其説ヲ異ニシ從テ其應



用ヲ同シフセス辯ニ至テモ亦然リ其初メヤ獨リ辯士ノ掌中ニ歸ス稍々其岐ヲ分チ各々其特妙ヲ極ムルニ至レリ人道ノ範圍ニ就テ之ヲ言ハン古今幾多ノ教牧、豫言者、教父、道德者、及ヒ特種ノ教會アリ各々其辯ヲ有ス此編其善美ヲ盡セルモノヲ掲載スルヲアラン

實利實用ノ辯ニ至リテハ諸學會ノ著述、審判上ノ議論、議場ノ演說等アリ枚舉ニ違アラヌ

又夫ノ無聲ノ辯ハ二三ノ技術之ヲ具フルモノアリ然レモ此編獨リ有聲ノ辯即チ言語文辭ニ發スルモノ、ミヲ說カントス

今ヤ漸クニシテ此緒言ノ首ニ示シタル廣大無涯ノ論題中ニ於テ吾人ノ注思、常ニ相離ル可カラサル、確的ナル一點ヲ

發見スルニ至レリ此點ヤ蓋シ百般智識上ノ事業ニ比スレハ殆ト窺測スルヲ能ハサルモノナリ

我輩ノ企圖實ニ高尚ナリト謂フ可シ何トナレハ法廷ノ辯ハ智識上ノ事業中ニ於テ至重ノ位地ヲ占ムレハナリ且ツ其目的、實利實益ヲ保護スルニ在リ而シテ世上ノ事物固ヨリ千萬ヲ以テ盡スヲ能ハス多クハ人智ノ豫知シ難キ所ニ生スルカ故ニ一事一物、其皮相ノ上ニ於テ相同シキカ如モ深ク之ヲ察スレハ必ス其由テ來ル所ヲ異ニス是ヲ以テ代言人タル者私法ニ關シテハ殊ニ必ス道德ニ根據シテ其說ヲ立ルヲアルヘシ

以下各世ヲ逐ヒ其今日ニ至ルマテ或ハ演說ニ或ハ文章ニ依リ以テ此代言社會ノ辯ヲ高尚ニシ以テ彼ノ國家ノ大事



ヲ議スルノ政談ト差等ナキニ至ラシメタル諸大家ノ事歴  
ヲ畧述セント欲ス

### 第二章 上古法廷ノ辯

#### 第一節 希臘ノ辯

抑モ上古此辯ノ進歩セシヤ其迅速ナルヲ疾風奔雷モ管ナ  
ラス世未タ所謂ル人定法ナルモノアラズ故ヲ以テ事毎ニ  
必ス此辯ニ依ル須臾モ之ヲ闕クヲ得ス人其正邪ノ判定  
ヲ得ント欲スルヤ先ツ其言ノ以テ人ヲ感動敬服セシムル  
ヲ要ス人ヲ感動敬服セシムルノ事古人之ヲ神女ノ口、黄金  
ヲ吐クニ喩フ蓋シ時處ノ別ヲ問ハス人々之ヲ以テ必期ノ  
目的ト爲ス此目的ヲ達スルヲ最モ難シ  
人ヲ感動敬服セシムルノ事必要闕ク可カラサルハ古今萬

國ノ事ノ大小輕重ニ論ナシ凡ソ人世ノ大事ニ當リ其力ヲ盡  
シ其功ヲ擧ケ遂ニ赫々タル威權ヲ掌握スルニ至ルモノ一  
ニ皆人ヲ感動敬服セシムルニ依ラサルハ莫シ人々相唱ヘ  
相和シ互ニ其心思ヲ交換スル亦必ス此ニ賴ル古ヨリ人相  
稱ス曰ク共同和合ハ至大ノ力ヲ成スト此言果シテ眞ナラ  
ン乎則チ其共同和合ノ本亦人ヲ感動敬服セシムルノ一事  
ニ歸ス何トナレハ此一事ナキニ於テハ則チ人々各々其孤  
見ヲ固執シ其說ノ衆論ニ應シ又爲メニ誘化セラル、一ヲ  
喜ハス乃チ共同ヲ潰亂シ和合ヲ破壊シ人衆億萬又億萬ノ  
心アリ各々孤城一隅ニ割據シ片旗隻幟ヲ樹ルヲ望ムニ至  
レハナリ  
人ヲ感動敬服セシムルノ事ハ特ニ言語ノ能スル所ノミナ



ラス或ハ意外ノ事變或ハ德行ノ勢力ニ藉ルヲアリ其事變  
 ノ如キハ固ヨリ人意ニ關セサルモノ多シ望ンテ得可カラ  
 ス其德行ニ至リテハ道德者脩身家ノ分トスル所ナリ故ニ  
 我輩ハ此二者ヲ除キ唯言語ノ能ク人ヲ感動敬服セシムル  
 ノ一事ヲ論セントス  
 竊ニ按スルニ人ヲ感動敬服セシムルトハ即チ言語ノ辯ナ  
 ルヲ謂フニ外ナラス而シテ辯ノ義タルヤ前百年紀間ノ學者  
 已ニ解釋セシカ如ク言語以テ人ノ元氣、神心ノ上ニ動クノ  
 能力ナリト謂フテ可ナリ其人ハ元氣ノ上ニ動クハ即チ其  
 ヲシテ會得セシムル所以ナリ其人ハ神心ノ上ニ動クハ即  
 チ其ヲシテ痛痒相關シ感憤已マサラシムル所以ナリ此二  
 能力アリ始メテ能ク人ヲ感動敬服セシムルヲ得可シ

然リ而シテ人ヲ感動敬服セシメント欲セハ當ニ如何カスヘ  
 キ乎辯學家皆曰ク先ツ人ノ何物タル乎ヲ知ラサル可カラ  
 スト此言今ニ至ルマテ人皆之ヲ信シテ疑ハス然レモ其實  
 果シテ當ヲ得タル乎我輩ハ此ニ疑ナキヲ能ハサルナリ試  
 ミニ看ヨ深ク人心ヲ極メ能ク人情ニ通スル者必シモ常ニ  
 人ヲ感動敬服セシムルノ能アラス古昔哲學ノ未タ明ナラ  
 サルノ時ニ當リ此能ヲ有セシ者一モ之アラサリシ乎近世  
 以テ諸共和政治ノ下ニ立テル民權者流、懸河ノ辯ヲ振フテ  
 千萬人ヲ感動シ或ハ其怒腸ヲ和ラケテ仁慈ノ心ヲ發セシ  
 メ或ハ其愛情ヲ轉シテ憎惡ニ移シ或ハ其沈靜ヲ去テ奮激  
 ニ就カシムル等能ク人ヲシテ其心情ヲ翻覆セシメタルモ  
 ノ皆果シテ其心情ヲ解シタルニ由ル乎否々渠レ未タ人心



ヲ解セス又未タ自家心裏ノ感情ヲモ會得スルヲ能ハス然  
 リ而シテ其辯ノ巧妙ナルモノ抑モ何ノ原由アリテ然ル乎蓋  
 シ渠レ奮激禁セス且ツ其言語滔々正シク其神心ノ感情ヲ  
 寫出スニ由ルナリ余世人ニ告ク子等此二條件ヲ具備スル  
 一ヲ得ハ必ス能ク人ヲ感動敬服セシメン子等亦必ス雄辯  
 ノ域ニ達セン  
 是ヲ以テ彼レ辯學家ノ説ニ同シ人ヲ感動敬服セシムル必  
 ス先ツ人心ヲ知ルヲ要スト妄信スルヲ勿レ須ラク子等  
 カ心ノ言ハント欲スル所ニ一任セヨ若シ然ラハ子等カ感  
 情自ラ言語ニ從フテ至ラン徒ニ其感情ヲ列叙セン一ヲ務  
 メ爲メニ聽衆ヲシテ五里霧中ニ彷徨セシムルカ如キ一ア  
 ル可カラス

抑モ人智ノ中ニ發シテ外ニ動クハ必ス先ツ自家其神心ノ  
 能動ヲ起シ以テ之ヲ自家ノ上ニ加ヘ而シテ後始メテ他ニ施  
 及セシムルモノナリ吾我カ思想スル所ヲ知リ我カ能ク身  
 心ヲ運スヲ知リ我カ欲望スル所ヲ知リ我レ能ク記憶ス  
 ル所ヲ知ル是ヲ以テ推シテ其他人ニ於ケルモノヲ覺ル可  
 シ  
 辯モ亦此理ニ外ナラス我カ神心先ツ我カ神心ノ上ニ反動  
 シ而シテ後他ノ神心ノ上ニ及フ可シ乃チ人ヲ感動敬服セシ  
 ムルノ方畧ヲ索メンヨリハ寧ロ如何シテ我カ感動セラル  
 ハヤヲ究ムルヲ要ス  
 以上ノ言未タ盡サ、ル所アリ今之ヲ詳述セントセハ恐ラ  
 クハ益々空理ニ涉ラン故ニ之ヲ實ニシ以テ其要畧ヲ擧ケン



曰ク第一、感情直チニ發スルノ辯ハ諸法則ヲ知ルノ以前ニ在リ第二、考案ヲ積ミ而シテ後ニ發スルノ辯ハ彼ノ辯學家ノ説ノ如ク他人ノ心情ヲ以テ其根本ト爲スモノニ非スシテ必ス自家ノ心情ニ基ク可シ

此學ヤ中世以來大ニ闡明ナルヲ致セリ而シテ其本、全ク心理學ニ屬ス我輩今之ヲ此ニ説ク固ヨリ小冊子ノ盡ス所ニ非ス故ニ一切省略シ唯神心ノ大ニ言語ノ術ニ關係アリ心理學ノ此術ニ裨補アルヲ示スノミ

我ヲ知り又彼ヲ知り或ハ往事ヲ記憶シ或ハ推理法及ヒ道德ノ大勢力ニ藉リ或ハ其思想言語ヲ高尙ニスルハ皆此術彼ノ神心ノ知識インテリゲンチヤンスニ假ル所ナリ其同感、奮激自ラ禁スルヲ能ハサラシムルモノハ神心ノ感發力サンシビリチニ假リ手操體勢以テ事

物ヲ形容スルハ神心ノ活動力フォルスモトリニ假リ優美溫雅ノ好ニス可キヲ解スルハ神心ノ醜美識別力エステチツクニ假リ其行爲ノ責ニ任シ其進退ヲ高尙ニシ決斷自ラ生シ其勢ノ活潑タルハ神心ノ意向ウオランテニ假ル所ナリ

言語ノ術神心ノ能力ヲ假ルヤ此ノ如シ而ルモ寧ロ此言ヲ倒ニシ、神心ノ能力相和シ相合シ以テ新奇ニシテ且ツ燦爛タル此辯ヲ生成スルモノト謂フ可キナリ

辯モ亦許多ノ細則アリ自ラ上文ニ散見ス各々其本源ノ能力ニ溯リテ之ヲ求メサルハ莫シ辯ノ術タルヤ唯其中ニ發スルノ時ト外ニ動クノ時トヲ問ハス一ニ能ク諸能力ヲ調和スルニ在ルナリ

若シ專ラ其力ヲ感情ノ發動ニ用井ン手則チ其言語相接觸



セス且ツ其論旨ノ滅裂ナルヲ見シ若シ夫レ單ニ其智識ニ依ラン乎則チ其言語互ニ照應シ頗ル推理ノ法ニ適シ又且ツ道德ニ合シ大ニ見ル可キモノアラン然レモ惜哉人ノ感情ヲ挑撥スル此燦爛タル神變不可思議ノ火炎ナキヲ奈何セン抑モ辯士ナル者滔々數千言ヲ列不能ク其序ヲ亂サス而シテ明々白々タル者ヲ稱スルニ非ス又其意ヲ吐クヤ言理共ニ調諧シ好言映辭以テ之ヲ脩飾シ能ク人ノ心意ヲ樂マシメ能ク人ノ耳朶ヲ喜ハス者ヲ指スニ非ス凡ソ是等ノ才能ヲ具有シテ之ヲ活用シ且ツ其之ヲ聽ク者ノ意中ヲ知得シ而シテ大手力ヲ以テ自在ニ諸情ヲ發動セシムル者は是レ即チ所謂ル眞ノ辯士ナリ

故ニ辯士タラント欲スル者歲月ノ久シキ徒ニ公衆ニ見ル

ノ態ヲ學ヒ因テ以テ時處ニ應スルノ法ヲ此ニ取り得タリト臆斷スルヲ勿レ此ノ如キノ研究誠ニ實益ナシ何ソヤ辯ハ必ス機ニ臨ミ變ニ應セサル可カラズ而シテ其機其變ナルモノ固ヨリ千萬ヲ以テ數ヘ難ク且ツ人智ノ豫知スル所ニ非サレハナリ故ニ辯士タラント欲スル者ハ先ツ其言語ノ當ニ及フヘキノ限界ヲ劃定シ自家及ヒ聽衆ノ性質ニ適應シテ其言語ノ潤色脩飾センヲ勉メ日夜屹々トシテ此ニ従事ス可キナリ果シテ此義ヲ守リ自然ノ性ニ一任セハ則チ彼ノ威儀嚴肅ナル法官ノ前ニ發言スルト他ノ公場ニ演説スルト其狀ヲ同シフスルカ如キヲナカラン視ヨ彼ノシ

セロン  
西洋紀元百餘年前  
羅馬有名ノ辯士  
ヲ視ヨ其膝ヲ大敵ノ前ニ屈シテ懇請スル所アルニ當リテハ復タ其總理スル元老議會中ノ



シセロンニ非ス又復々其救援セル人民ニ對シテ發言スル  
 ノシセロンニ異ナリ  
 以上略ホ辯ノ總則ヲ盡セリ今一々其特別ノ法規ヲ舉示セ  
 ント欲スルモ恐ラクハ煩冗ヲ極メン且ツ試ニ二百年來  
 ノ諸說ヲ收拾スルモ猶ホ一大部ヲ成スニ足ル可シ嗚呼言  
 語ノ術此ノ如キノ法則アリ彼ノ如キノ論說アリ而ソ辯士  
 ノ出テサルト何ソ此極ニ至ルヤ以テ長大息ス可シ  
 然リ而シテ言語ノ術ヲ論シ以テ世人ノ指針標準ト爲スニ  
 足ルノ良書ハ輒今殆ト之アルヲ見スジャン、ジャック（即チ佛  
 ソル）ノ世ニ當リテハ其口ニ說キ書ニ筆スル所實ニ其奇  
 絶ニ驚クモノアリ抑モ今日吾人ノ勉ムル所ハ彼ノ辯ニ在  
 ラスシテ寧ロ此ノ辯士タルノ方法ニ心ヲ苦ムルモノト謂

フ可シ乃チ今人ノ失ハ古人ニ反ス古人ハ法則ヲ墨守スル  
 ニ過キ今人ハ之ヲ放擲シテ顧ミス古人ハ生命ノ過半以テ  
 無益ノ習業ニ供シ今人ハ就學未タ半ナラス早ク已ニ道ニ  
 通スルト以爲ヘリ今人ノ輕捷速成、許多ノ弊害ヲ生ス志氣  
 ハ世上ニ充溢ス而ソ至テ狭小ナリ學科ノ數實ニ多シ而ソ  
 其識極メテ淺薄ナリ蓋シ其長其短ヲ乘除セハ敢テ今日ニ  
 其足ヲサル所ヲ見スト雖モ將來ヨリ之ヲ見レハ必ス不充  
 分ノ譏ヲ免カレス彼ノ田野ヲ見ヨ小流無數時ニ溢レテ之  
 ヲ澆スト深淵ノ水、晝夜滾々、常ニ之ニ灌溉スルト其利害得  
 失果シテ如何ソヤ  
 思フニ上世法廷ノ辯以テ今日ノ模範ト爲ス可キモノアリ  
 乎是レ人ノ必ス先ツ疑フ所ナリ蓋シ其法術ノ構成今日ニ



異ナリ代言人アリト雖モ今日ノ一社會ヲ成スモノト同シ  
 カラス而シテ其民事辯論ノ性質大ニ今日ニ差ヲ且ツ希臘ニ  
 三ノ共和政治ニ在リテハ辯ハ即チ道理ヲ害シ人心ヲ亂ル  
 モノト爲シ法令以テ其辯士ヲ邦城外ニ逐フカ如キ此時ニ  
 當リ果シテ後世模範ヲ取ル可キモノ存シタル乎是レ人ノ  
 疑團ヲ生スル所以ナリ  
 上世法廷ノ辯其困難ナルヲ名狀ス可カラサルカ如シ然レ  
 比之ヲ史上記載スル所ニ照スニ其實大ニ然ラサルモノア  
 リ請フ先ツ上世共和政治建國ノ體ヲ考察セヨ又公場議會  
 ヲ問ハス到ル處辯ノ發セサルハ莫ク且ツ大小ノ民事亦公  
 益ニ關スルハ事ト同シク之ヲ國民ノ前ニ訴ヘタルノ狀況  
 ヲ回想セヨ然ラハ則チ其法廷ノ辯議場ノ辯名異ニシテ其

實一ナルヲ解得シ又彼ノソロン、ピシストラット、ペリクレ  
 ース、クレオン、クリチアース、テラメース、アルシピアード、イ  
 ソクラット、デモステース以上皆有等ノ諸大家此法廷ノ辯ニ  
 關スル歴史ト密着相離ル可カラサルノ關係アルヤ一般ノ  
 辯ニ關スル歴史ニ於ケルカ如キヲ知了ス可キナリ  
 亞典希臘ノ羅馬此二共和政治國ハ百般學術ノ本源其名萬  
 世ニ朽チス亞典ハ土地膏腴、氣候和順其人民至幸ノ能力ヲ  
 備フ而シテ天又之ニ賦スルニ溫雅、整齊、調和ノ諸性ヲ以テシ  
 以テ之ヲ四方ニ光被セシム嗚呼何ソ亞典ノ大幸ナルヤ辯  
 ノ本ト爲リ又技術ノ源ト爲ル而シテ其辯其技術并ニ溫雅ノ  
 煥發ニ外ナラス  
 希臘ノ辯士始メテ上世ニ著ハル、者ヲソロント爲スソロ



シハ賢明ナル立法者能クリキユルグノ教ヲ感得ス  
 リキユルグハ強毅英邁能ク嚴能ク寛而シ其寡欲ナルヤ尊重  
 無比ノ冠冕ヲ辭シ敢テ不義ノ利ヲ營マヌラセデモ一ヌノ  
 人民皆其徳ニ化シ正直端肅勉勵忍耐ノ人民ト爲リ寧ロ言  
 語ヲ棄テ實行ヲ勉メ治ヲ望ミ亂ヲ警メ兵馬ノ事ハ幼童ノ  
 遊戯ト爲シ又法律獨リ其研學ヲ聽許ス合スレハ則チ富實  
 散スレハ則チ貧窶能ク版圖ヲ守リ敢テ之ヲ廣ムルコトヲ求  
 メス而シ其正當ノ權利ハ飽マテ之ヲ主張シ寸毫モ屈退ス  
 ルコトヲ爲サス且ツ功名ナクシテ徒ニ生ヲ貪ランヨリハ寧  
 ロ殘酷ノ死ヲ甘受スルコトヲ優レリト爲スニ至レリ  
 ソロンハ寛大ノ長者賢ニシテ嚴ナラス剛ニシテ果ナラス  
 勇ニシテ猛ナラス溫厚篤實識高ク見卓ナリ漸ニ基礎ヲ脩

メテ亞典ノ共和政治ヲ建テ其ヲセデモ一ヌ人ノ曾テ無益  
 ナリトシテ禁制シタル諸ノ美術ヲ復興シ又惰民ヲシテ奮  
 起事ニ從ヒ各々其才力ヲ研磨セシメンカ爲メニ法令ヲ立  
 テ、身體ヲ強壯、輕捷ナラシメンカ爲メニ體操術ヲ設ケ、心神  
 ヲ高尚ニスル爲メニ智力ヲ闢ハシメ、正道ヲ行ヒ邪僻暴行  
 ヲ排スル爲メニ軍旅ノ事ヲ演習セシム凡ソ是等ノ事一ト  
 シテ其志ヲ遂ケサルハ莫シ而シテ亞典ノソロンノ法則ヲ遵  
 奉スルヤ其間四方八垓邦トシテ其文物ノ美ヲ此ニ採ラス  
 ンハアララス實ニ盛大ヲ極メタリト謂フ可シ  
 抑モソロンノ能ク亞典人ヲ化シ至徳大平ノ治ヲ爲シタル  
 モノハ一ニ其嚴ニシテ弛マス且ツ活潑勢力アルノ辯ニ依  
 ルナリ然リ而シテ原動大ナルモノ必ス反動ノ大ナルモノヲ



生ス是レ自然ノ數免カル可カラサル所ナリ乃チ賢明正直ナル立法者ニシテ且ツ俊秀ノ辯士タルソロンニ反抗スル者ヲ生ス是レ即チ辯佞利口而シテ壓制ヲ逞フスルピジストラット其人ナリ

テミストークルハ其後ニ出ツ此人其雄辯ヲ議場ニ振フヤ敢テ其勝ヲ戰場ニ博スルノ技倆ニ劣ルコトナシ

然レモ言語ノ勢力當ニ施及スヘキノ限界ヲ示シタルハ殊ニペリクレーヌヲ推シテ其鼻祖ト爲ス可シ

ペリクレーヌノ母ヲアガリストト曰フ一夜狡獪ヲ生ムト夢ミ幾モナクシテペリクレーヌヲ生ム此事正史記シテ以テ實事ト爲シ口碑亦之ヲ傳フ乃チ他年其聲名ヲ希臘ノ盛世ニ專ラニセシモ亦異ムニ足ラサルナリペリクレーヌ幼

ニシテ岐嶷自ラ謂ヘラク當世ノ人民輕薄ニシテ反覆常ナラス此間ニ處シ身不正不義ノ行ナクシテ能ク大名ヲ博スル者ハアラスト乃チ其間ニ在リテ輒ク民望ヲ得又之ヲ失フ所以ノ原因ヲ探窮セリ而シテ其大ニ顯ハレ大ニ鳴リ以テ世人ヲ驚カサント欲シ深ク其門ヲ杜シテ出テス其生時ノ吉兆アリ加フルニ拔群ノオト山積ノ財トヲ以テス宜ク速ニ大權ヲ掌握スヘシ而シテ急遽之ヲ求メス時ニ亞典巳ニアリスチード、テミストークルノ兩雄ヲ亡ヒシモン貴族政黨ノ首領ト爲リ民權黨、正ニ其統領ヲ闕クペリクレーヌ乃チ此好機ニ乘シ始メテ出テ世ノ公事ニ與ル其世ニ出ルヤ光輝赫灼以テ對敵ノ眼ヲ奪フ蓋シ當世ノ人民固ヨリ感化シ易シ其間ニ在リテハ身、何レノ政黨ニ處スルヲ問ハス其辯



以テ速ニ功績ヲ奏スルヲ得可シ然レモペリクレース遽ニ其威權ヲ擴張セス又其言語ノ巧妙ナル以テ世人ヲ喜ハスノミナラス亦固ク正道ヲ執リ以テ海内ノ景仰ヲ博ス渠レ自ラ民間ノ辯士ヲ以テ任シ人民ノ利益ヲ保護シ又殊ニ其傲慢不遜ナルニ忤ハス權家ノ威ハ之ヲ憚ラス之ヲ慍ラス然レモ其身已ニ首領ヲ戴キ已ニ大名ノ進路自ラ開クルニ至レハ則チ此ニ始メテ旗幟ヲ樹テ權家ニ反抗ス我輩ハコヽニペリクレースガ一生ノ行事ヲ列叙セス唯言語ノ術、其才徳ヲ長スルニ與ガリテカアルヲ示スノミ其タナグラ、ペロポネーゾス、アガルナニ、エウペー、諸處ノ軍功及ヒエビドメール、メトローヌノ近傍アルシダミュースト戰フテ不測ノ變ニ遇フノ事其他政權ヲ握リ又之ヲ失ヒ遂ニ彼

ノ紀元前四百二十九年ニ當リ慘狀ヲアチックニ極メタル所ノ惡疫ニ斃ルニ至ルマテノ事歴ハ史家ノ傳記之ヲ詳ニスルモノアリ就テ見ル可シペリクレースノ辯、其一班傳ヘテ今日ニ至ル是レ實ニチュシヂドノ賜ナリ而シテ其言語ノ美ニ至リテハシセロン亦三歎敬服シテ已マス加フルニチュシヂドノ言ヲ以テス復タ他ニ其證ヲ索ムルヲ要セスペリクレースカ分疏ノ言、即チ今日ニ傳フルモノナリ蓋シ自家一身上ノ私事ハ今人之ヲ民事法衛若クハ新聞、著書ノ以テ世ニ公布スルニ任ス昔人ハ然ラス必ス之ヲ國民ノ法衛ニ訴フ此習風ヤ我輩已ニ之ヲ説ク而シテ今其證ヲペリクレースノ言ニ得タリ其言ニ曰ク惡疫正ニ流行ス惡疫正ニ



流行ス然レモ惡疫ナルモノ固ヨリ我輩ノ責任之ヲ豫防セ  
 サル可カラサルモノニ非ス而シテ惡疫ノ酷虐ナルヤ復ニ他  
 ノ害惡ノ上ニ在リ思フニ今余カ諸子ノ怨望ヲ招ク職トシ  
 テ此惡疫ノ流行ニ由ル諸子已ニ此禍害ヲ以テ余カ責ニ歸  
 ス其將來ニ幸福ヲ得ル則チ亦以テ余カ使ムル所ナリト爲  
 スナラン夫レ上天、福ヲ降ス則チ命ナリトシテ之ヲ忍ヒ外  
 敵、境ヲ侵ス則チ力ヲ戮セテ之ヲ防ク是レ昔日ノ人能ク知  
 ル所ナリ此堅忍不拔ノ氣象ハ即チ共和政治ノ一徳ナリ嗚  
 呼命運竭ルノ日ハ名譽ヲ極ムルノ日ニ在リ今日諸子カ荐  
 リニスパルトトニ送ルノ行人ハ能ク諸子カ窘厄ヲ援ハス而  
 シテ唯諸子カ多事ニ困ムノ狀ヲ揚言スルニ過キス云々  
 然レモ言ノ如ク能ク之ヲ盡セルモノアラス其言ニ曰ク余カ  
 ペリクレースヲ壓倒シテ之ヲ膝下ニ躡ムヤ彼レ猶ホ屈服  
 セス其未タ敗没セサルヲ大呼シ而シテ亦能ク人ヲシテ其  
 言ヲ信セシムトチュシヂト又曰クペリクレース威權ヲ衆  
 中ニ執リ而シテ能ク衆ヲ容ル統御其方ヲ得、人民ヲシテ已レ  
 ニ背反セシメス其初メ威權ヲ掌握スルヤ偏ニ公明正大ナ  
 ル方法ニ依リ毫モ詐偽術數ヲ交ヘス故ヲ以テ民情ノ反覆  
 常ナキヲ憂慮セス而シテ其反覆スル者アルニ當リテハ寸  
 モ假貸スル所ナク之ヲ抑壓シテ之ヲ防制シテ餘力ヲ遺サス  
 其亞典人ノ大膽ナル、危險ヲ意トセス強暴妄リニ動クヲ見  
 ルヤ大ニ怒リテ其魁首ヲ説キ又之ヲ制伏ス其人民ノ卑屈

然レモ其生前之ト反抗シ其死後之カ傳ヲ録セルチュシヂ  
 ドノ言ノ如ク能ク之ヲ盡セルモノアラス其言ニ曰ク余カ  
 ペリクレースヲ壓倒シテ之ヲ膝下ニ躡ムヤ彼レ猶ホ屈服  
 セス其未タ敗没セサルヲ大呼シ而シテ亦能ク人ヲシテ其  
 言ヲ信セシムトチュシヂト又曰クペリクレース威權ヲ衆  
 中ニ執リ而シテ能ク衆ヲ容ル統御其方ヲ得、人民ヲシテ已レ  
 ニ背反セシメス其初メ威權ヲ掌握スルヤ偏ニ公明正大ナ  
 ル方法ニ依リ毫モ詐偽術數ヲ交ヘス故ヲ以テ民情ノ反覆  
 常ナキヲ憂慮セス而シテ其反覆スル者アルニ當リテハ寸  
 モ假貸スル所ナク之ヲ抑壓シテ之ヲ防制シテ餘力ヲ遺サス  
 其亞典人ノ大膽ナル、危險ヲ意トセス強暴妄リニ動クヲ見  
 ルヤ大ニ怒リテ其魁首ヲ説キ又之ヲ制伏ス其人民ノ卑屈



ニ陷ルヲ見ルヤ一聲高呼シテ其勇ヲ鼓舞シ其氣ヲ振作ス  
 之ヲ要スルニ當時民主政治ノ名アリテ其實賢良君主ノ之  
 ヲ統治スルモノト謂フ可シ云々  
 ペリクレース同時ノ人ニシテ其名聲赫々タル者頗ル多シ  
 クレオンハ反亂煽動ノ人民而シテ活潑比類ヲ見サルノ辯士  
 ナリアルシバードハ造化ノ戯レニ生ム所、行爲常ナク今日  
 ハ無道ヲ極メ明日ニハ大徳ヲ成スクテシアース、テラメイ  
 スハ共ニ政壇上其名ヲ專ニス  
 哲學ノ希臘ニ弘布スルヤ恰モ響ノ物ニ應スルカ如シ是レ  
 諸學士ノ四方ニ奔走シテ其説ヲ傳播セシニ依ルゴルジア、  
 ル、レオンタンハ新辰星（即チ辯新神）ヲ以テ目ス可シ其テッサリ  
 ニ入ルヤ言語ノ美才以テ其國ノ蠻民ヲ化スアブデールニ

プロタゴラアリセオースニプロヂキョースアリエリースニ  
 ヒスピアースアリ各々哲學ノ博士ニシテ雄辯ノ大家ナリ  
 哲學ノ其歩ヲ進ムルヤ從テ自ラ言語ノ習風ヲ一變ス蓋シ  
 道德ハ哲學ノ元則由テ生スルノ本源、而シテ此元則以テ道德  
 ノ微ヲ明ニス是ニ於テ乎辯士ノ公衆ニ對スルヤ善良以テ  
 其外貌ヲ飾リ以テ其辯ノ人ヲ感動敬服セシムルヲ猶ホ有  
 徳者ノ口ヨリ出ルカコトキヲ勉ムルニ至レリ  
 蓋シ此習風仍ホ今日ニ存ス今日吾人辯士ノ演説ヲ聽クヤ  
 亦啻ニ其言ヲ耳ニスルノミナラス其名ヲ問ヒ又其聲ヲ聽  
 ク著書ニ於ケルモ亦然リ其書ヲ讀ミ又其人ヲ想フヲ常ト  
 ス其言語其論法ヲ以テ之ヲ其人ニ比較シ其身位、年齢、性質、  
 宗教及ヒ其族ノ貴賤等ニ對照シ以テ其相匹敵スルヤ否ヲ



視察シ其人其書、一ニシテ離ル可カラスト断定スルハ寔ニ  
 人世免カル可カラサルノ弊ナリ之ヲ要スルニ世人、性理ノ  
 書ニ就キ善人ヲ發見セシテ求ムルニ似タリ  
 我輩カ此言豈虛妄ナランヤ上世已ニ其實ヲ證スルモノア  
 リ彼ノ教誨以テ神プラトニヲ育成セルイソクラットノ如キ  
 ハ人皆以テ上天、道德ヲ明ナラシムル爲メ此世ニ降シタル  
 所ノ者ナリト爲セリ  
 イソクラットノ世ニ出ルヤ言語ノ術大ニ其光輝ヲ亞典ニ發  
 スイソクラット幼ヨリゴルシア、プロヂキユース、テラメーヌノ  
 三人ニ師事ステラメーヌ曾テ專政家三十人ノ爲メニ陷レ  
 テ死刑ノ宣告ヲ受クルニ當リテヤイソクラット畢生ノ才  
 カヲ振ヒ百方之ヲ辯護シ以テ師恩ニ報ス其後幾モナクシ

テ遂ニ三師ノ上ニ立ツ然レモ一旦報國ノ大義ヲ思ヒ其才  
 ヲ政治上ニ試ミント欲シ而シテ其社會ニ入ルヤ勢ヒ其志念  
 ヲ絶チ其曾テ希望セシ一大經國家タルノ英名ヲ放擲セサ  
 ル可カラサルニ至レリ  
 イソクラットノ性質、學業共ニ其他日英華ヲ言語ニ發ス可キ  
 一ヲ兆ス然レモ其初メヤ口訥ニシテ稠人廣座ノ中ニ發言  
 スルト能ハス氣怯レ心忤キ言ハント欲シテ言ハス其困苦  
 實ニ想フ可シ蓋シ此狀又之ヲデモステーヌニ見ル嗚呼是  
 等儼然タル大家ニシテ其初メ何ソ此ノ如キ乎又何ソ其相  
 似ル一ノ此ニ至ル乎寔ニ異ムニ足ル可キナリ  
 イソクラットノ其初メ言ニ訥ナル此ノ如シト雖モ其進ンテ  
 テラメーヌヲ辯護セシトハ我輩已ニ上文ニ説ク所ナリ爾



後數年ヲ經テテラメ一ヌ死シ其弟子或ハ隠レ或ハ逃ルハ  
 モイソクラット變セス其死ノ明日獨リ喪服ヲ着ケテ仍ホ衆  
 人ヲ見ルヤ舊ニ異ナラス  
 イソクラット辯才餘アリ而シテ其志ス所ニ實用スルコトヲ  
 得ス乃チ因テ以テ貨殖ノ資ト爲サンコトヲ思ヒ是ニ於テ或  
 ハ不文ノ者ニ代リテ其詞狀ヲ作り或ハ辯學ノ校舍ヲ設ケ  
 テ諸生ニ教授ス他日文學若クハ政治ヲ以テ希臘國ニ鳴ル  
 者多クハ此校舍ヨリ出ツイソクラット又政治上ノ大事希臘  
 國當時ノ急務及ヒ道德上ノ疑議ニ關スル論文ヲ草シ又戲  
 レニ當時譎辯家ノ爲スニ傲ヒ無用輕浮ノ文章ヲ弄セシコ  
 アリ世ノ論者或ハ壇ニ登リテ功名ヲ成ス者アルモ敢テ之  
 ヲ意ニ介セス獨リ門戸ヲ杜シテ心ヲ讀書ニ潛メ言語文辭

ノ用法ヲ正シ毫モ誤謬ナカラシメンコトヲ期シ其前後ノ照  
 應ヲ闕キ及ヒ動詞ノ相累ナル等凡ソ耳朶ヲ喜ハシメサル  
 モノヲ除カンコトヲ勉ム乃チ其一編ノ著述且ツ數春秋ヲ費  
 シ其稱贊ノ辭ノ如キハ十年間ノ工夫ニ成ルト云フ  
 希臘ノ人民素トヨリ言語ノ巧美ナルニ感シ易シ故ニイソ  
 クラットノ言辭ノ絶妙ナルヤ理固トニ迅速驚ク可キノ好結  
 果ヲ生ス可キナリ然ルモ今日ニ傳フル當時譎辯家ノ著書  
 ニ依ルニ其譎辯家ノ喫驚歎服セシハ單ニイソクラットノ言  
 語能ク相調和スルノ一點ニ在リ而シテ上乘ノ元理、道德ノ大  
 本等イソクラットノ高見卓識其書ニ寓スルモノニ至リテハ  
 彼レ之ヲ看破スルコト能ハス其本體ノ高尙ナルハ外貌ノ比  
 ニ非サルコトヲ覺ラサルハ亦其正鵠ヲ失フモノナリ



プラトンはハイソクラットに踵テ出ツ然レモ其美才以テイソ  
 クラットノ遺名ヲ滅却シ其紀念ヲ世ニ斷タシムルヲ得ヌ  
 テモステータハ常ニプラトンを侍シテ其言語ヲ聽ク乃チ  
 其高邁絶美以テ亞典人ノ景仰、歸服ヲ得タルモ一ニプラト  
 ンノ黨陶ニ成ルモノトス是レ猶ホプラトンカセタヒチュシ  
 ァードノ書ヲ手寫シ因テ以テ百折不撓ノ精神ヲ振作シ遂  
 ニ能ク對敵ヲ屈服シタルモ其本チユシザートノ賜ニ歸ス可  
 キカコトシ

夫レ衆人ノ才ハ必ス能ク一人ノ才ニ凌駕ス是レ真理ノ經  
 ナルモノニシテ而ノ亦其變ナルモノアリ即チ才思ノ群ヲ  
 拔キ衆ニ秀ル者自ラ彼ノ智識界ニ奔飛スル電氣雲ヲ引致  
 シ又能ク天宇ノ奮雷ヲ招來ス乃チ威權此ニ歸シ名譽此ニ

鍾ル而ノ渠レ決シテ其機器ヲ製スルニ非ス機器自ラ來歸  
 シテ終始其傍側ヲ離レサルナリ

デモステータハ則チ此真理ノ變ヲ表スルノ人ナル哉當世  
 有ル所ノ威權ハ悉ク之ヲ集メテ一身ノ專有ト爲ス其智、千  
 變萬化偏ニ亞典人民ノ所好ニ從フテ動ク而ノ其定マヲサ  
 ルヤ禍福ノ常ナキカ如ク又風候ノ轉シテ一ナラサルニ似  
 タリ當時凡百ノ影響一トシテ之ヲ其身ニ受ケサルハ莫ク  
 而ノ又其測ル可カラサルノ才ヲ以テ一々之ニ反應ス其フ  
 リップノ戰將ニ起ラントスルヤ其所由ヲ考ヘ之ヲ説キ之ヲ  
 論ス其褒貶、獎勵、諫爭ノ言皆其妙ヲ極ム其說常ニ人民ノ之  
 ヲ聽ク者ニ對シ柔順敢テ忤ハサルノ意ヲ表スルモ亦必ス  
 純一ニシテ且ツ屹然卓立ス亞典人民ニ對シテハ能ク其意



ヲ邀ヘ其心ヲ怡ハシム而シテ軍興金ヲ擧ケテオレントノ軍費ニ供センヲ求メ又フリップト干戈ヲ交ユルノ己ムヲ得サルヲ公言シ敢テ其死ヲ以テ脅迫スルノ告令アルヲ怖レヌ或ハ亞典人民ヲ稱揚シテ高尙明智大ニ尊重ス可キノ人民ナリト言ヒ而シテ後其聲色ヲ厲フシ其語ヲ紹テ曰ク人民ノ懦弱且ツ姑息ナルハ遂ニ必ス國家ノ衰亡ヲ致サシ各人公益ノ爲メニ其業ヲ勉メス徒ニ新ヲ唱ヘ奇ヲ傳フル者ノ妄言ニ迷ヒ唯其言ヲ聽キ以テ自ヲ樂ム是レ共和政治ノ幸福名譽功績ニ反スルノ風俗ニシテ長大息ニ堪ヘサル所ナリト嗚呼デモステーヌハ眞ニ辯士ノ推戴シテ首領ト爲ス所其深ク人ヲ感動敬服セシムルノ術ヲ究メ而シテ之ヲ活用セシハ爭フ可カラサルノ事ナリ

デモステーヌハ當時世上ノ良風惡俗ヲ擧ケテ簡短ニ之ヲ説キ盡セリ蓋シ其才ノ屈伸自在婉轉シテ定マラサル其思想ヲ發洩スルノ千狀萬態ナル是レ皆亞典人固有ノ性ナリ倨傲ヲ極メ好名ニ僻シ強暴甚シク及ヒ聲音ヲ美ニシ口頻リニ報國ノ大義ヲ説ク而シテ中心其實ナク唯己レヲ愛シ私ヲ營ムハ亦亞典人ノ心情而シテデモステーヌノ洞察熟知スル所ナリ然リ則チ大家ノ書若クハ其言ニ就キ以テ當時ノ景狀ヲ推知スルヲ得可シ蓋シ俊秀特立ノ才ハ能ク一世ヲ感化スルヲ得サルモ亦必ス當時世上ノ善惡得失ヲ遺サス悉ク之ニ通曉ス凡ソ物相聚マレハ則チ大力ヲ生ス乃チ一箇ノ心千萬ノ世事ニ熟達スル者ニ於ケルモ亦同シ而シテデモス



テ一又ハ即チ其人ナリ爾來其右ニ出ル者アル乎我輩未タ  
 之レアルヲ見サルナリ  
 デモステ一又己ニ亞典ノ非ヲ擧ク乃チ又其共和政治ノ是  
 ヲ表セサル可カラズ抑モ非ハ是ノ反ナリ是アリ故ニ非ア  
 リ亞典己ニ非アリ則チ是亦無クンハアラズ亞典ハ一大都  
 府、技術ノ巧妙ヲ以テ鳴ル而シテデモステ一又ノ如キ其性質  
 ノ奇絶ナル、天下復々之ニ過ル者アラス亞典人ノ徒ニ大ヲ  
 好ムヤデモステ一又モ亦其誘フ所ト爲ルヲ免カレス其  
 人民ノ性質浮薄ニシテ妄リニ動クヤデモステ一又ヲシテ  
 危キヲ見テ變セス常ニ沈靜ヲ守ラシム然レモステ一又  
 又永ク黙セス大喝一聲、黒雲忽チ天ヲ蔽フテ霹靂四方ニ奮  
 馳スルカ如ク以テ聽衆ノ膽ヲ奪ヒ以テ其義心ヲ喚起シ其

敵愾ノ念ヲ振作シ或ハ又大徳ノ事ヲ行ハシム  
 嗚呼絶妙ナル哉デモステ一又、子カ聲音ノ反響、永ク後世ニ  
 存シ人ヲシテ驚歎ヲ發セシム子カ才實ニ天稟而シ他ノ影  
 響ヲ假ルコトナシ子カ威權ノ赫々タル、後人唯其之アルヲ  
 知ル而シ其然ル所以ヲ解セス子カ言語文辭ノ奇絶ナル、後  
 人能ク之ヲ知ル而シ其種子ヲ四方ニ採リタルヲ覺ラ  
 ス子カ思想ハ即チ普通ノ思想、子カ論議スル所ハ即チ當時  
 ノ論點而シ人民ト云ヒ衆庶ト云ヒ一般ノ元氣ト云フモノ  
 一トシテ子カ其美華ヲ言語ニ發セシノ本源ナラサルハ莫  
 シ後世ノ人漠トシテ其根據ノ此ニ在ルヲ覺ラス悲哉子  
 カ靈ニシテ知ルコトアラハ其レ之ヲ何トカ謂ハン  
 デモステ一又ノ後エスシーヌアリ較活潑ノ力ニ乏シヒビ



アードハ少シクエスシーヌニ優ルカ如シリシアースハア  
 チック全國ノ衆美ヲ鍾ンテ己レヲ粉飾シテナルクハ一心テ  
 モステータヌヲ學ビ而シテ遠ク及ハステアマードハ善ク戯謔シ  
 ウアレールノデメトリウスハ頗ル其言辭ヲ脩ムテオフラスト  
 ハ實ニ希臘自由政治ノ下ニ於ケル最終ノ辯士ナリ是レ猶  
 ホアリユチヌスノ羅馬ニ於ケルカコトシ蓋シ此等ノ大家各々  
 鞠躬盡力セサルニ非ス而シテモステータヌノ歿後俄ニ此辯  
 ノ衰退ヲ來セリ是レ他ナシ真正ノ辯ナルモノ自由ノ大氣  
 ヲ呼吸スルニ非スンハ其英華ヲ煥發スルヲ能ハサルニ由  
 ル抑壓ノ制御ハ高尚ナル感情ヲ枯死セシム奴隸ノ聲ハ唯  
 一大叫喚タルニ過キサルノミ安ソ其辯ノ絶妙ナルヲ  
 望ム可ケンヤ

希臘自由政治ノ末年ニ方リ謠辯家四方ニ起リ而シテ其言語  
 ヲ卑俚ニシ且ツ猥雜ノ用ニ供ス其僅ニ賃銀ヲ得ルヤ乃チ  
 遠近ニ遊説シ揚々トシテ得色アリ其甚シキニ至リテハ他  
 人ノ聲色ヲ假扮シ或ハ小説ヲ話スル等一ニ愚民ノ心ヲ怡  
 ハスノ用ニ供ス嗚呼昔日演壇ニ立チ能ク民心ヲシテ自由  
 功名ニ傾向セシメタル、調和、奮激ナル言語ハ復タ安クニ在  
 ル哉  
 人ニ生長ノ法アリ乃チ幼少、成壯、老衰ニ論ナク各々其法ヲ  
 有ス而シテ萬物皆亦此法ニ從フ言語モ亦然リ此社會ヤ業已  
 ニ其用ヲ爲シ了レリ業已ニ其極ニ達セリ豪傑ノ士將ニ其  
 中ヨリ起リ復タ一大邦ヲ他ニ建立セントス其時正ニ來レ  
 リ其機正ニ熟セリ蓋シ大邦ヲ建テ大事ヲ成スハ之ヲ豪傑



ノ士ニ望ム可ク而シテ蓋爾タル萬民ニ望ム可カラサルナリ

### 第二節 羅馬ノ辯

羅馬ノ辯、其共和政治ノ初期ニ於テハ大ニ他ト相異ナルモ  
ノアリ即チ其辯、專ラ人ノ五官ニ發シ其外感ニ動キ及ヒ言  
語ノ體、能ク中心ノ感情ヲ舉ケテ之ヲ外ニ發洩シ人ヲシテ  
其形容ヲ感得セシムルニ在ルモ是ナリ思フニ我輩カ此  
言、彼ノ言語ヲ以テ文字ノ偶然相集マルニ成リ人智之ニ關  
係スルナシト爲ス者ヨリ之ヲ觀レハ必ス以テ微細ニ過  
クルノ評ヲ下サン  
此舉動ニ顯ハル、ノ辯ハ羅馬人民ニ在テ必要、闕ク可カラ  
サル所トス何トナレハ其人民最モ外觀ニ感スルノ性アレ  
ハナリブリュチユスカ其王タルキャンノ旗ヲ舉ケテ之ヲ羅馬外

ニ逐ハント欲スルヤ豫メ其言辭ヲ推敲セズ其憤懣ノ情ヲ  
發洩スルニ敢テ巧妙ノ辯ヲ假ラスタルキャン王ノ爲メニ辱  
メラレ因テ自盡セルリユクレース婦カ死屍流血猶ホ滴ルモ  
ノヲ擁シテ之ヲ衆ニ示ス而シテ其人心ヲ感動セシヤ演説ノ  
遠ク及フ所ニ非ス是レ即チ所謂ル體勢手様ノ辯ナリマン  
リユスカ、仇敵ノ奸黠ナル、其曾テ救援セル人民ヲ馳テ己レニ  
反抗セシメ又冤罪ヲ以テ己レヲ陷レントスルヤ奮然自ラ  
起テ羅馬人民ノ會場ニ臨ミ手ヲ舉ケテカピトルヲ指シ而  
シ其陳述スル所巧妙絶倫、今日ニ傳ヘテ人々之ヲ稱ス是レ  
實ニ法廷ノ辯、其典型ヲ取ル可キ所ナリ或ハ薄命ナル負債  
者、人民ノ中ニ奔走シテ滌淚雨ノ如ク長歎大息、其窮苦ヲ訴  
フルヤ人民大ニ感動シ爭フテ元老議會ニ走リ而シテ直チニ



棄捐ノ令ヲ布ク以テ羅馬人民ノ外觀ニ感スルノ甚シキヲ見ル可シ

羅馬初世ノ政體亦此辯ノ進歩ヲ助ケタリセシユリスハ將種ニシテ政畧ニ富ム人ノ階級ヲ分テ三等ト爲ス曰ク王、曰ク元老、曰ク人民、ニユマ、ポンピリウスハ哲學者、宗教ヲ尊崇シテ國家維持ノ大綱ト爲スブリュチウス及ヒピュブリエラハ其王ヲ逐フノ後、偏ニ人民ノ愛國心ヲ鼓舞作興ス蓋シ此心能ク其慾情ヲ制シ永ク國家ヲ維持セリ而シテ世ノ人ノ父タル者必ス先ツ其子女ニ教フルニ愛國ノ事ヲ以テシ且ツ十二銅表亦此事ヲ彫刻シ以テ人民ノ心肝ニ銘ス可キヲ示セリ  
羅馬ノ景狀、其推遷スルヲ此ノ如シ因テ以テ人民ノ辯ヲ煥發スヴァレリウスハ奇絶ナル小説ヲ作り以テ人民ノ道レテサ

クレー山ニ隱レタル者ヲ召還シアッピユス、クローヂユスハ元老議會ノ搖動シテ常ナキヲ定メ且ツ其ピリユスト和スルヲ妨クフアリシユスハタルキャンニ使シテ俘虜取還ノ事ヲ商議シポピリウスハ祭服ヲ着ケ犧牲ヲ神ニ供スルニ方リ俄ニ變亂ノ起ルヲ聞クヤ身寸鐵ヲ帶ヒス其德望ヲ甲ト爲シ其巧辯ヲ兵ト爲シ即チ人民ノ前ニ進ミ百方說諭シ遂ニ衆相樂ンテ道ニ復リ順ニ歸スルヲ致ス其他辯士ノ陸續輩出セル一々枚舉スルニ遑アララス

コルネリウス、セテギユス、フラミニウス、ヴァロン、マクシミュス、ランチュリス、クラッシユス等ノ如キハ實ニ辯士ノ錚々タル者ナリ爾來共和政治自ラ其景狀ヲ一變ス即チ新法出テ新制興リ言語モ亦從テキリニユスノ當基礎ヲ改脩シ其蠱暴過激等幼稚ノ



性質ヲ脱シ漸ク温厚和順ナルニ至レリ  
 今コヽニ其變遷改良ノ原因ヲ詳論スルモ煩冗ニシテ讀者  
 ニ益ナシ故ニ唯詩歌詞賦ノ能ク言語及ヒ人心ノ上ニ勢力  
 ヲ及ホセシヲ示サン然リ而シテ法律ヲ學ヒ其理ヲ究メン  
 ト欲スル者ノ爲メコハプロート、テランス二子ノ學蓋シ其  
 用アルヲ見ス然レモ人情ニ通シ言語ヲ流暢ニシテ美辭  
 好詞ヲ用ユル等凡ソ辯ノ根據ト爲ル可キモノハ之ヲ其學  
 ニ從事スル者ニ問ハサル可カラズ  
 プロート、テランスノ二家多ク希臘ヲ師トス其言語ヲ除ク  
 ノ外其地其人其風俗等總テ其口ニ説キ書ニ筆スル所一ト  
 シテ希臘ナラサルハ莫シ然レモ希臘、羅馬其宗敎ヲ同シフ  
 シ亦其政體制度相類スルヲ以テ二家ノ詞賦文章全ク羅馬

人ノ意表ニ出ルヲ能ハス其羅馬人ノ辯將來其本源ヲ希臘  
 ニ取ルモノ即チプロート、テランスノ功ニ歸セサル可カラ  
 ス實ニ二家ノ大著述多クハ亞典ニ根原ス而シテ羅馬人ニ示  
 教スルニ其先進辯士ノ文體ニ熟達ス可キヲ以テセリ  
 プロート、テランストハ互ニ兄タリ難ク弟タリ難シ而シテ  
 殆ト其人ヲ同シフスルカ如シ然レモ亦其間自ラ別アリテ  
 ランスハ奴隸ナリプロートモ亦然リト云フノ説アリ思フ  
 ニプロート素ト良家ノ子、初メ商業ヲ營ミテ利得ヲ博シ後  
 大ニ失敗シテ復タ奈何トモスルヲ能ハス卒ニ穀麥搗場ノ  
 傭夫ト爲リ水礮ヲ轉シテ餬口ヲ計リタルカ如シ  
 夫レ商業、勞役共ニ詞賦ノ才ヲ長スルニ適セス寧ロ其害ヲ  
 爲スナリ乃チプロート此二者ニ從事スルノ故ヲ以テ亦人



ノ何物タル、社會ノ何物タルヲ究ムルニ違アラス唯偏ニ其  
 天稟ノ才ヲ擧ケテ之ヲ希臘國ノ詞賦ヲ模擬スルニ用井タ  
 ルニ似タリ其言論ノ本體トスル所卑俗ヲ離レス而シテ深ク  
 人心ニ徹底スルノ妙ニ乏シ  
 テフランス初メ奴隸ノ籍ニ没スルモ幸ニ其主翁ノ殷富仁慈  
 ナルニ依リ教育ヲ受ケ又良民ト爲リ幾モナクシテ肩ヲ羅  
 馬初期人民ニ比スルニ至レリ是レ實ニフュリス、レリュス、ス  
 シピヨン等ノ友愛ニ成ルテフランス已ニ此諸大家ノ眷顧ヲ  
 受ケ又奎運開明ノ時ニ際ス乃チ其人ノ心性感情ヲ研究知  
 覺シ之ヲ稱説スルノ古人ニ優リタルハ異ムニ足ラサルナ  
 リプロートハ善ク人生ノ悲惨ヲ狀シ人ヲシテ悽然タラシ  
 ムテフランスハ戯謔ニ妙ナリ人ヲシテ人生ノ樂ム可キヲ

覺ラシムプロートハ滑稽ニ吝ナリテフランスハ之ニ反シ其  
 片言隻語、人ノ願ヲ解キ又能クランテルスノ有徳者レリコ  
 ス、及ヒスシピヨンノ心意ヲ樂マシムシセロンノ哲學ニ精  
 ク忠ヲ國家ニ盡シ又雄辯ナルモ猶ホ三歎ヲプロートニ發  
 スホラースハ古ノ有名ナル滑稽家、其テフランスノ性爽快ナ  
 ルヲ稱セサルモ亦其中心ノ誠實ナル其言語ノ微妙ナルヲ  
 贊シテ已マスプロートハ壽四十四歳ヲ以テ終ル遺稿二十  
 一篇其他詩歌ノ未タ稿ヲ定メサルモノ無數ナリテフランス  
 ハプロートヨリ少キヲ十歳、其死スルヤ遺稿僅ニ六篇ニ過  
 キス然レモ其文格ノ正確ナルハ羅馬古文學ノ史中ニ於テ  
 第一座ヲ占ム可キナリ  
 此時ニ當リフュリス、スシピヨンノ二家アリ一ハ言行共ニ



温和ナルヲ以テ著ハレ一ハ言語ノカアリ且ツ高尙ナルヲ  
 以テ鳴ル此ノ如ク辯ノ徳星一時ニ相聚マル加フルニ亦小  
 衛星アリ其側ヲ離レス曰クラビヨンドクメテリユス曰ク  
 ガルバ曰クエシリユス、ルビヂユス曰クリシユス兄弟曰ク  
 スビユリユス、ミンミユス曰クカルボン曰クチベリユス、グラキ  
 ス此人ノ辯活潑奮激ナリ變亂紛争ヲ止ムルニ適ス曰ク  
 ンチヨリユス元老議會ノ貴人ナリ曰クデシユス曰クドリユシ  
 ス曰クフラミニユス曰クキリユス曰ククリユス曰クスコ  
 ロン曰クカイユス、グラキユス是等ノ人皆衛星ヲ以テ目ス可  
 シ  
 カイユス、グラキユスハ羅馬ノ辯其美ヲ極メタルノ日ニ鳴ル  
 此時ニ當リ世ノ辯士タル者皆人ノ耳朶ニ觸レ人ノ中心

ニ感スルヲ以テ足レリトセス亦人ノ道心ノ上ニ動キ人ノ  
 精神ニ薄ルヲ勉ム乃チカイユス、グラキユスノオノ美ナル加  
 フルニ其母ハスピヨリノ女、賢ニシテ善ク之ヲ教育スル  
 ヲ以テス其言語世人ニ卓絶シ且ツ之ニ交ユルニ後世ノ訓  
 誨ト爲ス可キモノヲ以テスルハ固ヨリ其所ナリトス若シ  
 此人其邦國ヲ愛スルヲ其兄弟ニ過キ又其才ヲ以テ好名ノ  
 業ヲ助クルニ用非サラシメハ寔ニ一般ノ大幸ナリ而シテ  
 此ニ出テサルハ惜ム可シ  
 カイユス、グラキユスノ後ハ即チ言語ノ術最極度ニ達スルノ  
 時ニシテコ、ニシセロンヲ生ス  
 夫レ英傑ノ士、天稟ノ大才ヲ以テ億萬ノ上ニ立チ一時ノ功  
 名智識己レ獨リ之ヲ專ニスルハ是レ史上各世ニ見ル所ナ



リ而ノ其英傑ヲ亡フニ至レハ則チ人民ノ心神萎靡シテ振  
 ハス沈靜安居以テ豪俊大智識ノ更ニ出ルヲ待ツカ如シ其  
 更ニ豪俊大智識ヲ出タスヤ恰モ曉天初メテ太陽ヲ見一堂  
 ノ中萬燭ヲ點シテ其光輝ノ爛々タルヲ望ムニ異ナラス蓋  
 シ政治、理學、文學ヲ問ハス一世必ス一世ノ光輝ヲ煥發ス彼  
 ノメセーヌハ詩人ヲ其下ニ聚メ路易第十四世ハ技術、那勃  
 列翁ハ兵馬ノ才、各々其妙ヲ感得シテ之ヲ一世ニ發揚セシ  
 ム  
 シセロンカ當時ニ其化ヲ施スヤ順ニシテ激ナラス此時ヤ  
 辯ヲ微妙ニシ以テ其完全ヲ期ス可キノ時ナリ乃チシセロ  
 ンモ亦時運ノ將ニ發開セントスル所ニ悖ラス敢テ又自ラ  
 退クヲ爲サス而シ其才ノ秀絶ナルハ文人詞客ハ固ヨリ

論ナク文字ニ朦キ者猶ホ之ヲ測知セサルハ莫シ世ノシセ  
 ロンヲ論スル者極メテ多シ然レモ我輩ハ其之ヲ盡シテ餘  
 蘊ナキヲ信セサルナリ今シセロンカ眞性ヲ知ラント欲  
 セハ須ク其著述ニ就テ之ヲ觀察スヘシ必ス爲メニ誘惑セ  
 ラル、所アラシ其人ヲ誘惑スルハ即チシセロンカ才ノ致  
 ス所ナリ彼ノ「シニアダ」ハ人ノ神心ヲ迷ハスノ神女、而シセ  
 ロンノ書中之カ魔力ヲ假用セサル所ナシ子等其人ヲ忘レ  
 偏ニ唯其著述ニ驚歎スルナランシセロンカ是非善惡又其  
 歎美ス可キト否トハ子等此ニ關心スルヲ勿レ其人ノ性質  
 ニ付キ百方理論解説ヲ爲スモ決シテ子等ニ益スルヲナシ  
 其文海ニ入テ遊ヘハ一文一章交々兩岸ヲ挾ニ爛熳ノ花、芬  
 馥ノ香以テ子等カ心ヲ奪ハン子等又或ハ歎セン彼ノ不屈



ノ勇不折ノ氣、能ク此活潑勢アルノ文章ヲ綴成セシメシ  
 ヲシセロンノ失ハ慈惠恩愛ニ在リ其辯ノ光輝アリ且ツ溫  
 和ナル以テ此失ヲ濟フニ足ル可シ其政治社會ニ敗ル、ヤ  
 其哲學ニ愁訴ハル猶ホ兒女身ヲ其父母ニ投シ其膝ヲ抱テ  
 而シ泣クニ異ナラスシセロン已ニ敗ル猶ホ未タ自ラ安ン  
 セス其後ヲ顧ミテ且ツ怖レ且ツ恨ム其恐怖怨望ハ即チ亦  
 一能ナリ子等シセロンヲ評セントスル必ス先ツ其愛ス可  
 キヲ感セン其之ヲ酷論シテ功ヲ成シ政ヲ執ルセザール  
 カトン、ボンペー一様ノ人ト爲スハ正鵠ヲ失スルモノナリ  
 夫レ當時共和政治已ニ腐敗シ政黨互ニ爭鬪スマルキユス、チ  
 リユス、シセロンカ此間ニ立ツ其位地實ニ通常ニ非スシセロ  
 ンハ溫厚ナルアピナームノ一人士其志、父母ヲ顯ハサン

ヲ願ハス又軍功ヲ立テンヲ望マス唯一箇ノ文人タルノ  
 ミ其雄辯ト藝術トハ即チ一生ノ心事、以テ其思想ヲ活動シ  
 其心神ヲ奮興セシムシセロンカ領政官ト爲リシハ實ニ其  
 一生ノ禍害、自ラ亦其此ニ至リタルヲ解セス其志ヤ偏ニ  
 文事ニ在リ而シ其長スル所亦此ニ在リ身ヲボンペー、セザ  
 ール二雄ノ軋轢間ニ置キ又「パトリシアン」「プレベイアン」兩  
 族相競争スルノ間ニ交ル而シ其軋轢競争ヲ見、憐々トシ恐  
 怖スルノミ其狀猶ホ美術家ノ洋上颶風ニ遇ヒ怒濤ノ間ニ  
 漂フカコトシシセロンハ實ニ哲學ノ大家其辯巧妙ナリ若  
 シ此人ヲシテ腕力、利ヲ争フノ場ヲ去ラシメハ其將來ノ幸  
 不幸果シテ如何ソヤ唯恐ヲクハ復タ其雄辯ヲ用フルニ由  
 ナカラン故ニ渠レ敢テ其修羅ノ鬪場ヲ去ラス遂ニ彼ノ船



破レ舵折ケ身ヲ帆樁ニ網着セラル、ト一般相同シキニ至ルナリシセロンハ温雅ノ君子、而シテ功名ヲ望ミ又徳ヲ好ム然レモ其徳ヲ施ス可キノ所ヲ知ラス左顧右眄則チ唯罪囚ト死屍トヲ見ル又其前後、廉恥ヲ破ル者、極刑ヲ受クル者ヲ以テ充滿スシセロン徒ニ二雄ノ兵、國家ヲ殘害スルノ間ニ踟躇ス而シテ未タ其志ヲ決セス其志ヲ決スルヤ已ニ其時ニ後ル而シテ又其志ヲ決シタルヲ悔ヒ幾モナクシテ其前ニ之ヲ悔ヒタルヲ悔フ其備サニ辛酸ヲ嘗メ且ツ常ニ兩端ヲ持シテ其志ヲ決セサルハ即チ其辯ヲシテ益、巧妙ナラシムル所以ナリ其聲音ハ最モ人ヲ感動シ其學識ハ大ニ長セリ其數、變亂ニ遭遇シ悲惨ナル活劇ニ參與セシハ亦シセロニニ益スル所ナキニ非ス乃チ其死ヲ善クス可キヲ悟レ

リセザール、ポンペーノ軋轢ニ關シテハ殆ト其才ノ半ヲ亡ヒ又其天壽ヲ損セリ其政治上ノ大任ニ至リテハ抑揚頓挫、變化極リナキノ辯ヲ以テ之ト交換セシト謂フモ過言ニ非ラサルナリ  
以上シセロンヲ論スルモノ蓋シ此外ニ出ツ可キナシ而シテ我輩ハ自ラ評シ得テ當レルヲ信ス  
シセロン如何シテ自ラ世變ニ處シ又何等ノ力ヲ以テ其不慮ノ事變ニ抗セシ乎ヲ探究スルハ決シテ無用ノ業ニ非ス其技藝家タルト經國家タルト、一箇人タルト世ノ人民タルト其公私ノ二點ヲ相照シテ之ヲ觀察シ又其長スル所ニ因テ其短ナル所ヲ知リ其短ナル所ニ因テ益、其有徳者タルヲ知ルハ頗ル有益ノ事トス抑モ人、寧ロ其才ノ美ヲ去ルモ



其心神ノ強毅ナランコトヲ欲スル者ハ必ス痛ク其身ヲ檢束  
 ス而シテ他人蟻附屬至之ヲ愛慕ス時ニ過失アルモ所謂日月  
 ノ食ト爲シ假貸シテ之ヲ問フコトナキナリ  
 プロート、テランス二家ノ詞賦一ニ希臘ノ體ヲ移スシセロ  
 ンモ亦希臘ノ開化ヲ取テ之ヲ羅馬ノ開化ニ混ス其友ニ交  
 ルノ信義アリ其人ニ接スルノ懇篤ナルハ眞ニ亞典人ニ似  
 タリ而シテ其一奴隸ノ死ニ感慟スルノ甚シキ、人或ハロミリュ  
 スノ子孫ニ適セサルヲ疑フシセロン亦自ラ其事ヲ叙シテ  
 曰ク余カ心ニ感動スル、ヘルキユルノ感動セシニ異ナラス嗚  
 呼ソシステユス死セリ此愛ス可キノ兒ヤ曾テ余カ爲メニ  
 校讀者タリ其死ノ余カ心ヲ哀マシムル、一奴隸ヲ失フカ如  
 キノ比ニ非サルナリト此慈愛ノ感情ハ昔日ノ羅馬ニ見サ

ル所ナリ其レ然リ故ニシセロンカ毀譽ノ繫ル所ノ大事ヲ  
 斷スルニ當リテハ此感情忽チ變シテ婦人ノ仁ト爲ルクロ  
 ギュスカ法律ヲ犯スヤ、其罪狀正ニ定マリ元老議會將ニ之ガ  
 斷案ヲ下サントス此時ニ當リシセロン自ラ謂ヘラク宗教、  
 身位、正理、名譽等ノ上ニ於テ其身必ス確乎不拔ナラサル可  
 カラス兇惡ヲ鋤去シテ將來ノ鑑戒ト爲スコトヲ要スト而シ  
 其法廷ニ臨ムヤ哀憐ノ情倏チ起リテ其刑罰ヲ施スニ忍ビ  
 ス乃チ衆ニ謂テ曰ク余不肖ナリト雖モ亦固ヨリ一小リキ  
 ルグタランコトヲ期ス然レモ奈何セン余ヤ日ヲ逐フテ益、寬  
 宥ニ流ル若シ夫レ大事ヲ斷行シテ動カサル者ハ即チカト  
 ン其人ナリト  
 以上ノ言行以テシセロンノ徳ヲ累ハスニ足ラス益、以テ其



人ト爲リヲ知ル可シ蓋シ確乎不拔能ク自ラ守ルハシセロ  
 ンガ長スル所ニ非ス之ヲシセロンニ求ムルハ其當ヲ得サ  
 ルナリ但タシセロンガ慈愛ニ過キ寛柔ニ失スル爲メニ不  
 是ノ結果ヲ生ヤサルコトヲ得ス即チ或ハ其心實ヲ掩蔽シ或  
 ハ怯懦度ニ過キ又時ニ猜疑シテ己マサルニ至ル惜哉シセ  
 ロン朋友ヲ信スルコト能ハス又仇敵ヲ忌ムコト能ハス請フ其  
 一證ヲ舉ケンシセロンハ素トボンペーノ黨與ナリ其プロ、  
 レシニマニクアノ演説ニ於ケル極メテボンペーヲ稱賛シ殆  
 ト畢生ノ辯力ヲ盡シタリボンペー乃チ之ニ報フルニ親愛、  
 尊敬、稱揚ヲ以テス然レヒシセロンガ政治上翼望スル所固  
 ヨリ小ナラス而シテ黨首之ヲ容レサルヲ以テシセロン心ニ  
 嫌シトセス反テボンペー己レヲ愚弄スルト誤認シ因テアッ

チキニスニ書ヲ贈テ曰クボンペーハ陽ニ余ヲ愛シ余ヲ親ミ  
 余ヲ稱スルノ爲ニス而シテ其實余ヲ忌ム者ナリボンペー豈  
 高尚、真率、誠實、自由、寛厚ナル人ナランヤト  
 嗚呼シセロンハ何ノ故アリテ其公然稱揚スル所ノ人ヲ私  
 ニ傷ケントスル乎ボンペー己ニ高位ヲ占メ又且ツ人民ノ  
 心醉瞻望スル所ト爲ル此人ニシテ己レヲ媚疾スルト認め  
 タルモノハ抑モ何等ノ因由アル乎シセロンカ爲ス所ハ實  
 ニ辯士ノ屑トセサル所ナリ凡ソ人、人ノ己レヲ媚疾スルヲ  
 怒ルモノハ概シテ自愛ニ過キ且ツ嫉妬ノ念アルニ非サルハ  
 莫シシセロンニシテ此念ナクンハ則チ此ノ如ク輕々ボン  
 ペーヲ咎ムルコトナク唯永ク其友交ヲ斷チシナラン蓋シシ  
 セロンガ此言、其性ノ柔弱、猜疑、怯懦ナルヨリシテ之ヲ發ス



思フニ極メテ人ノ善ヲ揚ケ又直チニ其非ヲ譏スル者豈獨  
 リシセロンノミナランヤ古ヨリ此ノ如キ者多ク之アルヲ  
 見ル彼ノカイユス、ピゾンノ如キ其プランシユスノ爲メニ演  
 説スルヤ之ヲ稱シテ英雄ナリ豪傑ナリ誠實ノ人ナリ驚歎  
 スベキ者ナリト公言シ而シテ舌頭未タ乾カサルニ早ク已ニ  
 其ノ兇惡ノ狀ヲ簡牘第十八(第一卷)ノ中ニ鳴ラセリ  
 世ノシセロンヲ傷ケント欲スル者ハ其アッチキユスニ贈ルノ  
 書ヲ奇貨トシ喜ンテ其非ヲ揚ケ以テ平凡、卑賤且ツ貪欲ナ  
 ル小人ト爲サン蓋シ我輩已ニ評論セシ所及ヒ此辯士カ位  
 置ノ困難ナルト其精神、其代言社會ニ於ケルノ狀態トヲ除  
 去セハ或ハ其偽君子タリ怯懦拙劣ナル人物タルノ證ヲ得  
 ルカ如シ然レモ今正シクシセロンヲ評セントセハ須ク當

時ノ景狀如何ヲ觀察スルヲ要ス史ニ徵スルニ當時社會ノ  
 景狀人々相詐リ相欺キ虚偽實ニ至ラサル所ナシ人民ハ般  
 富且ツ開明ニ進ム而シテ終ニ土崩瓦解ス各政黨ノ首領、欲望  
 饜ルヲ知ラズ犯罪ハ宇宙間ニ充滿シ復々誠實真正ナル  
 者ヲ見ス試ミニ問ハンセザールハ果シテ其共和政治ノ厄  
 難ヲ解カンヲ思ヒシ乎否々渠レ實ニ之ヲ欲セス唯之ヲ  
 揚言セシニ過キサルノミポンペーノ心中果シテ舊制ヲ保  
 守スルニ在リシ乎否々渠レ己ニ眞志ヲ遂ク乃チ之ヲ口ニ  
 藉キ以テ苟安ノ計ヲ爲スノミカトシ其人ノ如キモ亦猶ホ  
 論難ヲ免カレサルモノアリ嗚呼悲哉當時ノ景狀シセロン  
 實ニ其間ニ棲息ス其一身ノ備ハランヲ求メント欲スル  
 モ得可カラサルナリ



シセロンカ自愛ニ過クルノ失ハ固ヨリ之ヲ詰責セサル可  
 ガラス渠レ自ヲ其失ヲ認メ又寧ロ之ヲ矜伐シテ其心ニ恥  
 チスシセロン毎ニ自負シ輒モスレハ曰ク我、奇變ノ戰鬪ニ  
 長ス曰ク我カ聲音、雷ノ震フカ如シ曰ク我能ク常ヲ守ル日  
 何曰ク何、其口ニスル所自家ノ才識ヲ誇説スルニ非サルハ  
 莫シ是レ蓋シ自ヲ信スルノ厚キ知ラス識ラス此ニ至ルモ  
 ノトス然リ而シテ災禍不意ニ生シ内訌卒カニ起ルヤシセロ  
 ン驚愕殆ト措ヲ失ス以テ其自ヲ辯ノ勢力ニ依ルテ度ニ過  
 キ毫モ事變ニ備ヘサルヲ見ル可シ  
 シセロンノ爲ス所終始遠慮ニ乏シク常ニ戒虞ヲ忽ニスセ  
 ガール、ボンペー、クラッシュス相結ンテ共和政府ニ反抗スルヤ  
 シセロン亦此三人ニ與ス而シテ又此三人ヲ忌ム故ニ退テ郷

士アランチホームノ近邑ニ隱レ此ニ其身心ヲ盡シテ哲學ニ  
 従事ス是レ實ニ其所ヲ得タルモノナリ若シ夫レシセロン  
 自ヲ悟ル所アリ早トニ身ヲ哲學ニ委子敢テ他ヲ顧ミサル  
 ハ則チ其幸福誠ニ知ル可カラサルモノアラシ渠レ亦自ラ  
 其長スル所ニ哲學ニ在リ餘ハ皆其能スル所ニ非サルヲ  
 ヲ知ル而シテ其従事ス可キ所ニ迷フハ何ソヤ算命師ネボス  
 將ニ客遊セントス其小地位ヲ以テ之ヲシセロンニ讓ルシ  
 セロン此ニ揚々自得シ而シテ大呼シテ曰ク見ル可シ余カ輕  
 薄ナルヲ、余ハ眞ニ氣力ニ乏シト  
 若シ夫レシセロンカ一生ノ行事ニ就テ之ヲ論スレハ則チ  
 往々非難ヲ容ル可キモノアリ然レモ其文人、辯士、哲學家ト  
 爲リテハ其過失ヲ償フニ餘リアル可シ其同胞キヤンチヌスヲ



諫ムルノ言、遠識アリ條理アリ懇切周到以テ應用哲學ノ法  
 則ト爲スニ足ル其命ヲ人ニ下スヤ寬嚴宜キヲ得、政治家タ  
 リ施政者タルニ適スシセロンハ一个ノ有德者ヲ以テ視ル  
 可カラス其辯ノ巧ナル其言ノ文ナル、人ヲシテ之ヲ聽ク  
 ヲ樂マシム

シセロンハ殆ト希臘ノ人ナルカ如シ其舊羅典ノ俗體ヲ採  
 ラス而シテ寧ロ亞細亞ノ風ヲ喜フ其文章ヨシノ色味ヲ帶ヒ  
 其簡牘アチツクノ舊體ニ倣フ花ヲホメールニ假リ辯ヲエウ  
 リピードニ假ル固ク希臘哲學家ノ格言ヲ守リ又ペンダー  
 ルノ詞賦ヲ諷詠シ以テ其氣力ヲ鼓シ功名ニ志ス凡ソ希臘  
 詩文ノ體格シセロンノ心裏ニ充溢スト謂フ可シ其政治社  
 會ニ在リテハ三人政府創メテ設ケラル、ヤシセロン謂ヘ

ラク自家亦其所ヲ得ント然ルニ元老議會斃レ共和政治敗  
 ル而シテ其朋友皆威權ヲ專ニシテ之ヲ分タス是ニ於テ乎僻  
 地ニ閒居シ深ク隠レテ出テス乃チ人々復々來リテ時事ヲ  
 議スルコトナク又英傑ノ此ニ潜在スルコトヲ知ラス唯シセロ  
 ンヲ以テ一个ノ富豪ナリト爲シ其政治家タルコトヲ認メス  
 然レトモ變亂益甚シキニ至ルヤシセロン復々羅馬ニ出テ計  
 畫スル所アリ此時ニ際シ其生命財產ノ危險ヲ冒スコト幾回  
 ナルヲ知ラスクロヂュス已ニ其志ヲ得タリシセロンカ素性  
 又々其進退ヲ決スルコト能ハスクロヂュスカ成功ヲ可トセハ  
 又、之ヲ不可トセス、猶豫以テ時機ハ來ルヲ待ツ、シセロン自  
 ラ省ミテ其氣力ノ缺乏ヲ歎シ且ツ舊友アツチキユスカ其側  
 ニ在テ提携指教セサルコトヲ憾ミ惴々トシテ恐怖ス其最終



ノ方法ハポンペーノ幕下ニ歸シテ其保庇ヲ受クルニ在ル  
ノミ而シテポンペーハ實ニシセロンカ名譽ヲ保護スルヲ  
欲セサル者ナリ

シセロンカ行爲、氣力ニ乏シク又其世ニ處スルノ拙ナルヤ  
此ノ如シ然レモ一旦復々威權ヲ掌握シ良民ノ心服瞻望ヲ  
得ル其間僅ニ三月而シテ遂ニ羅馬ヲ逐ハル、ニ至ル

嗚呼シセロンカ羅馬ヲ逐ハレ邊地ニ謫セラル、ヤ亦依テ  
以テ其性質如何ヲトスルニ足ル可シシセロン能ク其辛酸  
ヲ忍ヒタル乎此ニ疑ヲ容ル、モ失當ニ非サルナリ

其護送セラル、ノ途次人ニ贈ルノ書中曰ニ其頭首ヲ失ヘ  
リト言ヒ第二次ノ書ハ其落魄ヲ訴ヘ第六次ノ書ハ唯其爲  
ス所ヲ知ルノミト言ヒ第七次ノ書ハ光明ニ堪ヘス而シテ自

ヲ隠ル、トヨ記シ第八次ノ書ハ悲痛其腸ヲ斷チ其身ヲ  
碎クト言フ宜哉其婦切ニ諫争シ煩ニ勸戒シ以テ其品位ヲ  
墮サ、ヲシメントテ勉メタルヲ、蓋シシセロンカ貶謫ニ遇  
フハ實ニ大禍厄其生國ヲ去リ其家亡ヒ而シテ其仇敵正ニ志  
ヲ得ルコトヲ見ル、此ノ如キノ不幸天下復々之アルコトナカル  
可シ然レモシセロンヨ、子カ哲學果シテ何ノ用ヲカ爲ス子  
カ曾テゼノン、プラトン派ノ學者ニ就キ多年刻苦セシノ成  
功何クニカ在ル子ヤ政治家ナリ子ヤ近コロ一様ノ喪服ヲ  
着スルニ萬ノ人衆ヲ從ヘクロヂヌヲ憚ラスシテ亡國ノ吊  
祭ヲ行ヘルニ非ス乎子ヤ其爲ス所ハ即チ死ト謫トヲ致ス  
所以ナルコトヲ悟ラサル乎嗚呼子自ラ政黨ノ争ニ與リ而シ  
甲破レ胃折ケ身微傷ヲ被リ流血少シク臂鎧ヲ汚スヲ見ル



ヤ怯懦度ナク婦女一般ノ態ヲ爲スハ如何、シラ巳ニ統政官  
 ノ名ヲ以テ政權ヲ專ニスマリ、ニスノ死屍瀝氣未タ全ク去  
 ラス死謫ノ刑ニ上ル者羅馬ノ街衢ニ滿チテ其數ヲ知ラス  
 而シテ子ヤ元老議會ノ決議、子ヲ都府外四百「シール」里ノ地ニ  
 謫スルコトヲ聞キ驚愕極リナシ子ヤ政治界ノ鬭爭場ハ角觝  
 ノ戲場ニ異ナラサルコトヲ知ラサル乎子ヤ巳ニ一舉シテ世  
 事ニ與カレリ而シテ其名没シテ知ラレサルノ人士ト同シク  
 平安其生ヲ終ヘンコトヲ欲ス子ヤ曾テ法律ノ明文ニ背キ人  
 民ノ審判ニ附セスシテ徒黨事ヲ謀ル者ヲ獄中ニ縊殺セシ  
 メタリ又此不法ヲ行フノ氣力アルコトヲ自負セリ又此不法  
 ノ事以テ「パトリシアン」種族ノ困厄ヲ救ヒタリ然リ而シテ子  
 カ行爲、招ク所ノ結果ニ對シ辟易途退スルモノハ抑モ何ソ

ヤ子ヤ儼然タル辯士ナリ子カ心神ノ脆弱ナルハ子カ學力  
 ノ廣大ナルニ相若ク乎

夫レ能ク大事ヲ斷行シテ不拔ノ氣象アル者ハシセロンカ  
 災厄、貶謫ヲ以テ之ニ加フルモ必ス甘シテ之ヲ受ケンシセ  
 ロンカ婦テランシアハ其氣力大ニ良人ニ過ク乃チ貶謫ヲ  
 以テ反テ功名ノ事ト爲シ公然之ヲ人ニ誇レリシセロンノ  
 羅馬ヲ去ルヤ二萬ノ少年喪服ヲ被ルアツチキユスハ莫逆ノ友、  
 爲メニ一年ノ日月ヲ供シテシセロンカ利益ヲ計畫ス其他  
 シセロンヲ憐レム者勝テ數フ可カラスシセロンカ同胞キヤ  
 ンチユスハシセロンカ薄待スル所ナリホルタンシユスハシセ  
 ロンカ對敵ニシテシセロン曾テ其非ヲ訶ケリポンペー、セ  
 ザールハ共ニシセロンカ陽ニ己レニ依リ而シテ其實己レニ



歸セサルヲ知ル者ナリ然レモ是等ノ人一モシセロンヲ  
 棄ルヲナシ乃チ貶謫ハ寧ロ名ヲ成スモノニシテ恥辱ト爲  
 スニ足ラス此時ヤ共和政治ノ氣息將ニ絶ヘントシ變亂四  
 方ニ起ル其際ニ在テ此貶謫ノ一事之ヲ至大ノ災厄、絶無ノ  
 不幸而シ若カク歎異ス可キノ事ナリト謂フ可キ乎  
 思フニ貶謫ハ此ノ如キノ大事ニ非スシセロンハ怯懦ナリ  
 自ラ其失ヲ蔽フヲ能ハス其勝ヲ取ル者ニ對スルヤ面色變  
 シテ土ノ如ク之ヲ敬シ又之ヲ忌ム常ニ躊躇シテ決セス偏  
 ニ仇敵ヲ畏ル是レ實ニシセロンカ爲メニ惜ム可キ所ナリ  
 抑モ仇敵ヲ避ケテ終ニ交ラサルハ即チ朋友アルヲ望マ  
 サルナリ我カ真心ヲ顯シ或ハ此ニ交ハリ或ハ彼ニ敵シ毫  
 モ慶ス所ナキハ心神ノ高且ツ大ナルニ由ルシセロンノ爲

ス所此ニ出テス故ニ貶謫ヲ免カレス籍没ヲ遁カレス遂ニ  
 又小人ノ爲メニ刺殺セラル、ニ至ル  
 シセロンカ死後羅馬ノ景狀猶ホ亞典ノデモステースヲ失  
 ヒタル後ニ異ナラス辯ノ光輝ヲ消スルヲ之ヲ日月ノ食ニ  
 喩フ可シ蓋シ物盛ナレハ則チ衰フルハ自然ノ數ナリ而シテ  
 シセロン已ニ死シ日月ノ食スルカ如クナルモ猶ホ暫ク殘  
 光ヲ放テリ即チキヤンチリアン、プリーヌ、タシットノ三士アリ  
 以テ共和政治ノ盛世ヲ終フ

### 第三章 羅馬ノ衰世

#### 第一節 基督教ノ辯

羅馬ノ連リニ外邦ニ捷ツヤ四方ノ奇珍盡ク之ニ歸ス是ニ  
 於テ乎千百ノ失德亦此ニ胚胎萌生ス彼ノ貪慾、好名、奢侈、逸



樂等人ノ心ヲ奪ヒ宗教法律共ニ其勢カヲ失フ昔日ノ信心衰ヘテ新意ノ混淆シ來ルモノアリ何ニ依テ能ク人心ヲ維カンヤ人々兵ヲ交ヘテ互ニ威權ヲ爭フ是レ其意世ノ太平ヲ期スルニ在ラス己レ獨リ快樂ヲ逞シフセント欲スルニ出ツ内ニシテハ極刑絶ヘス或ハ數盛大ナル祭儀ヲ起シ又奢侈ヲ宴會ニ極ム外ニシテハ州郡「プロコンシユル」官ノ聚歛ニ委シ壓制到ラサル所ナク而シテ人民ハ奴隸ニ異ナラス此内外ノ景狀紛亂、絲ノ如キモノ遂ニ相合シテ一人ノ有ニ歸ス是レ即チ帝王ト稱スル者、其身中央ニ位シテ諸惡ヲ四方ニ流布セリ

是ニ於テ手神ノ聰明睿智ナル、東北ノ蠻民ヲ驅テ羅馬ニ侵入セシメ以テ其豫期スル所ノ事業ヲ施サントス乃チ蠻民

一ニ神ノ命令ニ從ヒ羅馬帝國ノ關城ヲ踰ヘテ交々突進シ四隅ニ驅ケ八垠ニ走り蹂躪到ラサルコトナク以テ此帝國ニ存スル所ノモノ擧テ之ヲ滅ス是レ即チ史上、蠻民ノ侵入ト稱スルモノナリ

世界果シテ此時ニ滅スル乎否々一聲高ク猶太國ニ鳴リ以テ其生誕ヲ示ス者アリ其漸ク成長スルヤ普ク風教ヲ改造人民ノ上ニ被ラシム

辯モ亦神カヲ假リテ再ヒ此世ニ生シ漸ク其巧妙ノ域ニ達セントス聖祖ノ徒弟各雄辯ヲ振フテ人民ヲ感化シ人民モ亦其思想ノ高ク其言語ノ巧ナルハ即チ其教法ノ廣大不可思議ナルニ由ルコトヲ覺レリ

基督教ノ起ルヤ當時一國ヲ建ルノ民アリ水草ヲ逐フテ移



ルノ民アリ其離合定マラス主人アリ奴隸アリ施治者アリ  
又被治者アリ而ノ人類一家ヲ成スノ景狀ナシ惡主義普ク  
行ハレテ彼我ノ間ヲ離隔ス各其家ニ居レ各其身ハ爲メニ  
セヨトハ是レ當時ノ格言以テ人民ノ習俗政治ノ状態ヲ推  
知ス可シ希督乃チ此兇惡ノ鼻祖タルサトシノ邪法ニ反抗  
シ友愛ノ法、生命ノ法ヲ説ク是レ實ニ此世ノ爲メニ惡ヲ去  
リ、善ニ導クノ福音ト謂フ可シ其言語ノ威力アリ且ツ溫和  
ナル、深ク人心ニ徹スル其勢何ヲ以テ之ニ譬フルコトヲ得ン  
乎貧人モ往キ弱民モ往キ遂ニ舉國ノ人之ニ歸依シ能ク其  
言語ヲ解得ス即チ始メテ人ノ靈妙貴重ナルコト及ヒ其履行  
ス可キノ道ヲ覺レリ而シテ漸ク進ンテ上、眞神ニ溯ルヤ其聰  
明睿智遠ク人類ノ及ブ所ニ非サルコトヲ知レリ是ニ於テ乎

豪族公侯王者ヲ問ハス皆一ニ之ニ服從シ勢ヒ亦希督教法  
ヲ遵守セサル可カラサルニ至ル  
此ニ人アリ身體疲レ精神衰ヘ心思ノ活力殆ト消滅シ唯死  
期ノ近ツクコトヲ憂慮シ而シテ智識ノ機能ヲ失フ今此人ニ對  
シ之ヲシテ能ク生シ能ク死シ現時ノ平穩幸福及ヒ將來ノ  
安寧ヲ得セシメ且ツ法律、文學、技藝ヲ問ハス其中一新路ヲ  
開キ就テ以テ其功ヲ成サシム可キノ力ヲ復興センコトヲ約  
セヨ又前人已ニ此ニ依テ其志ヲ遂ケタルコトヲ告ケヨ此人  
豈此恩約ニ應セザラン哉  
然リ此人喜ンテ承諾スルハ疑ヲ容レス然レモ其再生復興  
ニ付テ自ラ力ヲ盡サ、ル可カラサルニ至レハ或ハ勇氣ニ  
乏シキコトヲ致サン何ソヤ此人宿昔ノ妄誤ヲ去ラサル可カ



ラス而ノ其妄誤タルヤ固ヨリ一朝一夕ニ生シタルモノニ非ス幼穉ノ時ヨリシテ已ニ其中ニ陥リ爾來相離ル、ナク互ニ長成シ往々之ニ依テ事ヲ成シ功ヲ遂ケ又其情欲ヲ足シ世人亦多ク此妄誤ノ中ニ彷徨ス此人此妄誤其關係形ノ影ニ於ケルカ如ク密着シテ離ル可カラス此人其厭忌ス可キト及ヒ其人ニ害アルトヲ知ラサルニ非ス然レモ中心聡ル所アリ及ヒ從來ノ傳説教育ニ制セラレ遂ニ奮フテ之ト相斷ツト能ハス是レ其勇氣ニ乏シキヲ致ス所以ナリ

羅馬未期數百年ノ間其美術ノ景狀恰モ此人ノ景狀ニ異ナラス希臘ノ價直殆ト地ニ墮チ伊太利ノ早熟ナル精神之ニ代ル此ニ至リテ百事皆廢シ人智モ亦之ヲ天然ノ消長ニ委ス故ヲ以テホメール、イソクラット、プラトン、メナンドル、アリ

ストフ、アース、タシット、サリュスト、シセロン、ホラーニス、ウールシール、テランズ、プロート其他アチック有名ノ大家ノ上ニ出ルト能ハス

夫レ有名ノ大家陸續輩出スルノ後ヲ承ク乃チ文運當ニ益隆盛ナルヘシ而シテ事此ニ出テス且ツ蠻民侵入ニ前チ百般ノ學術已ニ制度風俗ト共ニ衰滅ニ歸シタルモノハ何ソヤ思フニ昔時ノ社會ニ於テハ或ハ自然教、ホメール派ノ多神教、チト、リーヴ、オヴ、オヴ、ドノ傳説、或ハ埃及、印度ノ偶像教及ヒ哥爾ノ「ドリユイード」教等凡ソ多神ヲ奉スルノ宗教ヲ以テ其基本ト爲セシニ由ル蓋シ是等ノ宗教、人ヲシテ天命ニ一任シ若クハ情欲自放ニスルノ主義ニ傾向セシム是故ニ勢ヒ制度、風俗、學術、各其衰滅ニ歸スルニ任セ敢テ之ヲ顧ミサル



ニ至ルコトヲ免カレサルナリ  
抑モ學術ノ本源ハ天ニ出ツ乃チ亦此草昧混沌ノ境界ヲ脱  
シ又任命自放ニ教ノ主義ヲ離レサル可カラズ其固有ノ雅  
致巧美ハ之ヲ復興シ人ヲシテ惠ニ頼ラシメサル可カラズ  
嗚呼學術ヲシテ此域ニ達セシムル者ハ誰ソヤ我輩已ニ之  
ヲ言ヒ人モ亦之ヲ知ル是レ即チ基督教ノ力ナリ此宗教ヤ  
微妙不可思議能ク其反動ヲ起シテ善美ニ向ハシム上帝實  
ニ之ヲ創メ高上ノ教徒熱心ノ信徒承ケテ之ヲ續ク  
高上ナル諸教徒カ言語文章以テ其影響ヲ世上ニ被ラシム  
ルノ如何ヲ解得シ又其狀ヲ記述セルハラハルプニ若ク者  
ナシ請フ左ニ其書中ノ一二條ヲ抄出セン  
日ク第十四世紀ノ半ニ當リ羅馬帝國已ニ盛大ヲ極メ因テ

以テ四分五裂ヲ要セリ羅馬ハ復タ世界萬國ノ都會ニ非ス  
政權漸ク衰ヘ加フルニ蠻民四方ニ起リテ連リニ疆ヲ侵シ  
曾テ威權ヲ弄セシノ人民復タ之ヲ奈何トモスルコト能ハス  
唯軍紀ニ依テ僅ニ其土崩瓦解ヲ防制スルノミ此時ニ當リ  
新奇ノ辯新奇ノ宗教ト共ニ發生ス而シテ其宗教ナルモノハ  
即チ幾多ノ囹圄中幾多ノ斬首臺上ヨリ移テセザール家ノ  
帝位ニ登リ來ルモノナリ此ノ如ク大威力ヲ逞シフセシモ  
ノハ之ヲ基督教徒諸辯士ノ功ニ歸セサル可カラズ而シテ其  
中錚々ノ大名アル者ハ殆ト皆說法壇上ノ人吾人ノ常ニ相  
識ル所ニ非ス圖ラサリキシセロン、テモステーヌノ後ヲ承  
クル者之ヲ聖祖ガ諸高弟ノ後嗣ニ見ントハ然レヒ吾人希  
督教ヲ奉スル者幾多ノバジール幾多ノグレゴアール幾多



ノクリソストームニ對シ奉教上ノ敬禮ヲ失フナク此ニ其辯才ニ就テ觀察ヲ下スモ亦妨ナカル可キナリ何ヲ以テ其文學史上ノ地位ヲ觀察スルヲ要スル乎他ナシ是等ノ人固ヨリ熱心ノ教徒專ラカヲ宗教ニ盡シ勉メテ邪教ヲ排シ眞正教牧タルノ龜鑑ヲ將來ニ垂レ能ク人民ヲ化シ又傳道ノ爲メニ備サニ艱難ヲ經タリ而シテ亦旁ラ此歴史此文學ニ大關係ヲ有スレハナリ抑モ古來ノ歴史概テ壓制好名惑溺等ノ諸惡ヲ以テ之ヲ蔽フ而シテ其中又是等ノ大徳常ニ他ノ憎惡障礙ヲ受ケタルヲ傳ヘ及ヒ其道德ノ高ク且ツ純ナル、溫厚沈靜物ニ驚カス帝王ニ告クルノ言ハ寸毫モ實ヲ失ハス罪囚ニ對スルハ其中心ノ苦ヲ慰メ上天ノ罰ヲ諭シ薄命不遇ノ者ニ對スルハ相憫レムノ友情ヲ表示セシメテ

載ス是レ其歴史ニ關係アリト謂フ所以ナリ文學ニ於ケルモ亦然リ是等諸大徳カ能ク人ノ性情ヲ明悉スルニ依リ文運ノ隆盛ナルヲ致シ且ツ其此ニ遊フヲ以テノ故ニ文學ノ名從テ世ニ明著ナルニ至ル是レ其文學ニ於テモ亦關係アリト謂フ所以ナリ是ヲ以テ其人ヲ評シテ熱心ノ教徒深信ノ大徳ナリト爲スニ前チ寧ロ文學ノ大家ナリト謂フ可ク又大智識ナリト評スルノ前矢ツ辯士ナリト謂フ可キナリ云々

由是觀之ニ基督教ノ文學勃興スルハ邪教ノ文學衰滅スルノ時ニ在リ其新精神先ツ舊様ニ依テ現ハル是ニ於テ乎基督教ノ辯亦從テ其方向ヲ二途ニ分ツ一ハ即チ希臘羅馬文學上ノ傳説ト混同シ一ハ即チ專ラ本源ノ定理ニ遵ヒ毫モ



邪教ノ影響ヲ受ケス  
 第五世紀ニ當リ哥爾ニ二人ノ教徒アリ此傾向ヲ示ス一ヲ  
 エンノヂュスト曰ヒ一ヲ聖セバールト曰フエンノヂュスハア  
 ルニ生レ巴理ノ教正ト爲ル此人ヤ往々信徒及ヒ教正中  
 ニ見ル所ノ俗氣アルヲ免カレス聖セバールハアルノ  
 教正、純正基督教ノ模範ト爲ス可ク而シテ毫モ邪教ノ影響ヲ  
 受ケスエンノヂュスハ教正ニシテ辯士ヲ兼ヌセバールハ教  
 正ニシテ且ツ傳教師タリト謂フテ可ナリ  
 エンノヂュスハ一大教院ニ在テ第一座ヲ占ム其職ノ重キヲ  
 當時其比類ヲ見ス今試ニ其著書ヲ繙閱セヨ其詩其文、片  
 言隻語、偶像教ノ意ニ出テサルハ莫シ其簡牘ノ若キハ以テ  
 昔時邪教ノ文學第五世紀ノ間仍ホ哥爾ニ存シ蠻民侵入ノ

後亦其蹟ヲ絶タサリシヲ證スルニ足ル彼ノ聖ルミ  
 簡牘亦以テ昔時文學上ノ傳説ヲ窺フ可シ其クロヅ  
 告ルノ言ニ曰ク汝カ敬信セシ所ノモノヲ燔ケヨ汝カ燔キ  
 シ所ノモノヲ敬信セヨト此言以テ其基督教徒タルヨリハ  
 寧ロ一个ノ辯士タルヲ示ス又クロヅニスニ贈ルノ書中  
 彼ノ強暴ナルシカンブルヲ諫ムルノ言ヲ載ス是レ甚々適  
 當セサルノ言ナリ曰ク人其憂慮ニ堪ヘスシテ汝カ幕下ヲ  
 去ルヲ爲サ、ルモ須ク汝カ買奴ノ資ヲ散スヘシト  
 基督教及ヒ邪教、互ニ相混合セシハ第五世紀ニ在テ之ヲ  
 セバール、エンノヂュスノ二人ニ徴ス可シ蓋シ此景狀仍ホ中  
 世ニ存シ輓今ニ至リテモ亦文學中此臭味ヲ帶フルヲ免  
 カレス



抑モ此世界ニ在テハ學術、宗教ヲ問ハス總テ彼ノ萬物ヲ支配スル輪廻進化ノ大法ニ從フ而シテ新ニ代リ來ルモノハ必ス陳謝シ去ルモノ、幾分ヲ留メテ之ヲ保存ス加之、萬物互ニ相援ケ相交ハル而シテ多クハ冥々ノ中ニ於テス自ラ其然ル所以ヲ解セス且ツ之ヲ博物家ニ聞ク曰ク動植等ノ自然物、其主要ナルモノニ至リテハ研究以テ其彼此ノ間ニ差異アルヲ見ルト雖モ亦必ス中性的ノモノアリテ其基本ヲ合一ス而シテ所謂ル中性的ノモノハ彼ニ似又此ニ類シ終ニ之ヲ合一セシムルノ作用アルモノ、如シト形以上ノ事亦此理ニ外ナラス文學、技術、理學、宗教、世々互ニ相謝シ相代ル其間自ラ定度定數アリ以テ能ク其順序ヲ守ラシムルニ似タリ彼ノ蒼天ニ翔ル鳥鵬ノ大、以テ肉眼ニ觸レサル蟲魚ノ

微ニ至ルマテ一々之ヲ觀察スルヲ得ル者ハ實ニ人生ノ最大幸福ナリ人此最幸福ヲ受クルニ至レハ則チ國家全體ニ關スルノ歴史ヲ記シ其治亂興亡進化革命ノ迹ヲ狀シ其原因ヲ推シ其結果ヲ示シ又眼光ヲ一人民ノ風俗習慣ニ轉シ而シテ彼ノ正史野乘ニ充滿セル微細ノ事ヲ探ラサル可カラス又基督教ノ勢力、人智發達ノ上ニ於テ果シテ如何ナル乎ヲ叙シ其新主義、此辯殊ニ法廷一部ノ辯ノ範圍内ニ入リテ其改良ヲ來セシトテ究ムルハ亦此人ノ自ラ任ス可キ所ナリ實ニ基督教ノ勢力廣大ナルハ疑ヲ容レス試ミニ中世維新間諸辯士ノ爲ス所ヲ見ヨ正直ヲ保護シテ邪曲ヲ排除シ強大ヲ抑ヘテ弱小ヲ助クルヲ主旨トス而シテ其片言隻語モ彼ノ陋隘偏僻ナル邪教ヲ壓伏シテ此ノ基督教ノ廣



大仁愛ナル主義ヲ施スニ非サルモノナシ  
 然リ而シテ昔時代言社會ノ言語ノ體ニ就テハ如何ナル觀察  
 ヲ下ス可キ乎彼ノ邪教ノ文法、此ノ基督教ノ信心、志氣、論議  
 ノ中ニ混和シ來ルモノ果シテ幾許ナル乎大小ノ神祇神類  
 及ヒオレンプ山上ノ英雄、皆盡ク法律家ノ書中ニ充滿ス此  
 ニ境界ヲ爭ヘハ則チ「メルキユル」セレーヌ「兩神ノ事ヲ想起シ  
 夫妻分居ノ論アレハ則チ偶像教上「ヒメーヌ、ヂスコルダン」  
 (夫妻乖離ノ義)ノ事ヲ援引稱述スルヲ數十回、又我子ヲ爭フヤ必ス  
 リュシーヌノ名ヲ呼フ偶像教ノ遺蹟實際ニ存スルヲ此ノ如  
 クナルモ以テ基督教ノ大本未タ此世ヲ統轄セスト速了ス  
 ルヲ勿レ此教ヤ千萬人ノ心裏ニ存シ千萬人ノ舌頭ニ上ル  
 身ヲ致シテ之ヲ奉スル者ハ血盟シテ其渝ヲサルヲ證シ

辯士或ハ仍ホ昔時ノ野態ヲ存スルモ亦大慈大悲ノ真神ヲ  
 指シテ言論ス中世ノ景狀、百事混淆錯雜未タ一ニ歸セス啻  
 ニ言語ノ羅典ニ依ルノミナラス法典モ亦實ニ羅典ヨリ來  
 ルシヤル、マ—ニテオド—ズ二帝ノ俊邁ナル、天下ヲ掌上ニ  
 運スノ大威力アルモ猶ホ其先王ニ觸ル、毎ニ未タ曾テ震  
 慄セスンハアラス或ハ其法ヲ解釋シ之ヲ改定シ之ヲ增補  
 スルヲアルモ其大體ヲ動スヲナク而シテ復タ當世ニ適セサ  
 ルヲ問ハス是レ他ナシ天、厚ク此萬物ヲ保シ此億民ヲ護  
 セント欲スルヤ乃チコ、ニ干犯ス可カラサルノ大法ヲ施  
 スニ由ル何ヲカ其大法ト謂フ舊時ノ制度文物ハ之ヲ敬シ  
 之ヲ存シ而シテ其ヲシテ世ノ進化ニ從ヒ自ラ時ノ需要ニ應  
 セシムルヲ即チ是ナリ



代言至要附錄

第一 佛蘭西代言人規則

○代言人ノ職業ノ執行及ヒ代言人組合ノ取締ニ付

キ規則ヲ設クル千八百十年十二月十四日ノ勅

書(法律全誌第四部第六千七百七十七號)

(下ニ記スル千八百二十二年十一月二十日ノ

勅書第四十五條ヲ以テ廢止ス)

第一卷 總則

第一條 第十二年「バントー」月二十二日ノ法律ヲ執行ス

ル爲メ各上等裁判所及ヒ初審裁判所ニ於テ職務ヲ行フ  
所ノ代言人ノ姓名表ヲ作ル可シ

第二卷 代言人ノ姓名表並ニ代言人ノ容受及ヒ



其姓名ノ記入

第八條 毎年各上等裁判所及ヒ初審裁判所ノ開廳ノ後チ事故ノ爲メ已ムヲ得サルニ至ラシメシ追加及ヒ變更ヲ該姓名表ニ附記シテ再ヒ之ヲ印刷ス可シ

第九條 姓名表ニ記入セラレタル者ノミニテ代言人組合ヲ組成ス可シ

第十一條 上等裁判所ノ代言人ニシテ初審裁判所ニ其地位ヲ定メタル者ハ上等裁判所ノ姓名表ニ記入ヲ得タル日ヨリ該初審裁判所ニ於テ班位ヲ有スル者トス

第十三條 法律學「リサンシエー」(學士)ノ級ニ登リタル者ニシテ代言人ノ組合中ニ容受セラレント欲スル各人ハ檢事局ニ至リテ檢事長ニ面會ス可シ而シテ其各人ハ其「リ

「リサンシエー」ノ級ヲ得タル免狀ト第十三年ノ第四閏日ノ勅書第三十二條ニ據リ渡シタル法律學校記入ノ保證書トヲ檢事長ニ示ス可シ

第十五條 代言人見習ノ證又ハ勉勵シテ訟廷ニ出席シタルノ證ハ取締會議ヨリ渡シタル保證書ニ因リ之ヲ立ツ可ク若シ取締會議ノ有ラサル時ハ檢事ヨリ渡シタル保證書ニ因リ之ヲ立ツ可シ

第三卷 取締會議

第二十四條 取締會議ハ報酬ヲ受ケサル相談局ヲ設立スルニ因リ貧困者ノ辯護ヲ爲スニ準備ス可シ但シ其相談局ハ每週一回之ヲ開ク可キ者トス○其相談局ニ於テ正當ナリト思考シタル訴訟ハ其意見書ヲ附シテ之ヲ取締



會議ニ送り取締會議ハ其順番ヲ以テ之ヲ代言人ニ分配  
 ス可シ○相談局ハ右ノ相談ニ付キ至極ノ注意ヲ爲シ以  
 テ第三ノ人ニ患害ヲ被ラシメ到底其訴訟費用ノ償還ヲ  
 得ル能ハサルニ至ルヲ無カラシム可シ○見習中ノ若年  
 ナル代言人ハ闕席ナク右相談局ノ會議ニ出ツルヲ要  
 トス○檢事ハ特ニ本條ノ規定ノ執行ニ注意シ且ツ其必  
 要ナリト思考スルニ於テハ右相談局ノ會議ニ出席ス可  
 キ代言人ヲ自カラ指定ス可キノ任アリ但シ其代言人ヲ  
 指定スルニ付テハ成ル可ク丈ケ其順番ニ從フ可キ者ト  
 ス

第四卷 代言人ノ權利及ヒ義務

第三十三條 代言人組合ハ第十九條ニ記シタル如ク取締

會議員ノ候補者ヲ撰擧スル爲メ其組合長ヨリ招集ヲ受  
 クルニ非サレハ集會スルヲ得ス○組合長ハ總テ其他  
 ノ事項ヲ評議スルヲ許ス可カラス若シ本條ノ規則ニ  
 背反スル者ハ不法ノ結社又ハ集合ニ關スル刑法第二百  
 九十三條ニ循ヒ其犯罪者ヲ告訴シ及ヒ懲罰スルヲ得  
 可シ

第三十四條 若シ一箇ノ裁判所ニ附屬スル總テノ代言人  
 又ハ數名ノ代言人ニ於テ其口實ノ如何ヲ問ハス最早其  
 職務ヲ行ハサル旨ヲ申述センカ爲メニ相通謀スル時ハ  
 此等ノ代言人ノ姓名ヲ姓名表ヨリ抹殺シ而シテ更ニ再  
 ヒ其姓名表中ニ之ヲ記入ス可カラサル者トス

第三十五條 代言人ハ「リサンシエー」又ハ「ドクトウル」ノ級



ノ被衣ヲ着用ス可ク而シテ姓名表ニ記入セラレタル者  
 ハ「ハパルケ」トノ間ニ設ケタル場所ヲ云フ  
 ス可シ○代理人ハ起立シ且ツ帽ヲ戴キテ辯論ス可シ然  
 レモ結局ノ請求ヲ爲ス時又ハ訴訟ノ證據書類ヲ讀上ク  
コンクリエジョン  
 ル時ニ於テハ帽ヲ脱ス可キ者トス○代理人ハ法律上ニ  
 定メタル場合ニ於テハ裁判官及ヒ檢察官ノ缺ヲ補フ可  
 キノ招喚ヲ受クルコト有ル可ク然ル場合ニ於テハ辭退又  
 ハ差支ノ理由無クシテ之ヲ否ムコトヲ得ス  
 第三十六條 代理人ハ其自カラ作ラス又ハ商議セサル相  
 談書要領書及ヒ文書ニ姓名ヲ手署スルヲ特ニ禁止シ又  
 代理人ハ訴訟辯論ノ前ニ其謝金ニ付テノ約定ヲ爲シ又  
 ハ訴訟ヲ爲ス本人ヲシテ強テ其煩勞ヲ謝セシムルコトヲ

禁止ス若シ此規則ニ背反スル者ハ初犯ニ付テハ譴責ヲ  
 受ケ再犯ニ付テハ排斥又ハ塗抹(除名)ヲ受ク可シ  
 第三十七條 代理人ハ正理及ヒ眞實ヲ辯護スル爲メ自由  
 ニ其職務ヲ行フ可ク又事實ニ於ケル假想引證ニ於ケル  
 詭欺及ヒ其他ノ不善ナル方法ヲ一切制止シ又然ノミナ  
 ラス無益及ヒ餘計ナル言詞ヲモ一切制止スルヲ要トス  
 ○又代理人ハ訴訟ノ爲メニ已ムコトヲ得サル事アリテ且ツ  
 依頼本人若クハ其代書人ヨリ書面ヲ以テ特ニ任セラレ  
 タル時ニ非サレハ相手方本人又ハ其辯護人ニ對シテ誹  
 議及ヒ罵詈ヲ爲シ又ハ其名譽ヲ害スル實事ヲ申立ツル  
 ヲ禁止ス若シ其定期ニ背反スル時ハ刑法第三百七十一  
 條ニ記シタル如ク其罪ヲ告訴セラレ可シ



第三十八條 又代理人ハ其文書ニ於テモ又ハ言詞ニ於テモ又ハ其他如何ナル方法ニ於テモ裁判ヲ尊敬スルノ道ヲ失ハサル可ク而シテ又其職務ヲ行フ所ノ裁判所ノ法官ニ對シ敬禮ヲ失セサルコトヲ命令ス

第四十一條 若シ民事ニ於テ一方ノ者ニ辯護人ノ有ラサル時裁判所ヨリ其職務ヲ以テ代理人一名ヲ指定ス可キニ於テハ之ヲ指定ス可シ

第四十二條 犯罪被告人ヲ辯護スル爲メ裁判所ノ職務ヲ以テ任命セラレタル代理人ハ辭退又ハ差支ノ理由ヲ允許セラレタルニ非サレハ其職務ノ執行ヲ否ムコトヲ得ス

○ 巴里府ノ上等裁判所ニ於テ容受セラル可キ代言

人ノ各箇ノ宣誓ニ付キ其特示ノ原由ノ爲メニ十五「フランク」ノ税ヲ收受スルコトヲ命令スル干八百十一年十月三日ノ勅書(法律全誌第四部第七千三百三十六號)

上等裁判所及ヒ初審裁判所ニ於ケル訴訟ノ論辯ニ付テノ干八百十二年七月二日ノ勅書(法律全誌第四部第八千一百一號)

第一條 各上等裁判所ニ於テ凡ソ訟廷ニ提出シタル訴訟ハ該上等裁判所ノ代理人姓名表ニ記入セラレタル代理人又ハ干八百十年十二月十四日ノ勅書第十六條ニ循ヒ見習ヲ許サレタル代理人之ヲ論辯ス可シ

第二條 畧式ヲ以テ裁判セラル可キ性質ノ者タル附帶ノ



訴訟及ヒ訴訟手續ニ關スル總テノ附帶ノ事件ハ上等裁判所ニ於テ訴訟ノ手續ヲ行フ代書人其引受ケタル訴訟ニ於テ之ヲ論辯スルコトヲ得可シ

第三條 上等裁判所及ヒ重罪裁判所ノ首地並ニ各州ノ首地ニ設置シタル初審裁判所ニ於テモ亦右ト相同シカル可クシテ此等ノ裁判所ニ於テハ總テ畧式ノ訴訟ニ付キ代書人論辯ヲ爲スコトヲ得可シ而シテ又總テ其他ノ初審裁判所ニ於テハ代書人其引受ケタル各種ノ訴訟ニ付キ論辯ヲ爲スコトヲ得可キ者トス(下ニ記スル千八百二十二年二月二十七日ノ勅書ヲ以テ變更ス)

第四條 代書人ハ大裁判官兼司法卿ノ許可ヲ得タル上ニテ其姓名ヲ記入セラレタル上等裁判所又ハ初審裁判所

ノ管轄地外ニ行キ訴訟ノ論辯ヲ爲シ得可キ旨ヲ定ムル千八百十年十二月十四日ノ勅書ノ定規ハ之ヲ更改スルコト無シ(下ニ記スル千八百三十年八月二十七日ノ勅書第四條ヲ以テ之ヲ廢止ス)

第五條 若シ代書人ノ不在ナル歟又ハ訴訟ノ辯論ヲ爲スヲ否ム時ハ上等裁判所又ハ初審裁判所ノ代書人ハ各種ノ訴訟ニ付キ論辯ヲ爲スノ允許ヲ裁判所ヨリ受クルコトヲ得可シ

第六條 若シ一箇ノ訴訟事件ヲ任セラレ而シテ其證據書類ヲ掌握シタル代書人ノ病ニ罹リタルカ爲メ其訴訟ヲ論辯ス可キ日ニ出席スルコト能ハサル時ハ訟廷ヲ開ク前ニ書面ヲ以テ其旨ヲ裁判所上席人ニ申告シ而シテ證據



書類ヲ代書人ニ送付ス可シ但シ此場合ニ於テ代書人右ノ訴訟ヲ論辯シ又ハ最近ノ日ニ其訴訟ヲ延スコトヲ得可シ

第七條 若又一箇ノ訴訟ヲ呼上ケタル時ニ當リ其代書人之下同時ニ會席ヲ開ク所ノ同裁判所中他局ノ訟廷ニ於テ其職務ヲ行フ時ハ亦前條ト相同シカル可シ

第八條 前二條ノ場合ヲ除クノ外若シ訴訟事件ヲ任セラレ而シテ其證據書類ヲ掌握シタル代書人ノ其訴訟呼上ケノ時ニ當リテ闕席シ而シテ其闕席ノ爲メニ右ノ訴訟ヲ訴訟列記簿中ヨリ取除キテ之ヲ其指示シタル期日ニ論辯スルコトヲ得サル時ハ其代書人ニ右延期ノ費用ヲ負擔ス可キ旨ヲ言渡スコトヲ得可ク且ツ之ヲ爲メ本人ニ損

害ヲ生セシメタル時ハ本人ニ對シテ其損害ヲ償フ可キ旨ヲ言渡スコトヲ得可シ

第九條 第十二年「バンドー」月二十二日ノ法律ニ據リ此勅書公布ノ時ニ至ル迄ニ「リサンシエ」ノ級ヲ得テ而シテ右ノ法律第三十二條ニ因リ付與セラレシ權利ヲ獲得シタル代書人ハ從前ニ儘其權利ヲ享有ス可キ者トス

第十條 上等裁判所及ヒ初審裁判所ノ代書人取締局ノ上席人ハ此勅書公布ノ時ヨリ一箇月内并ニ其後毎年上等裁判所及ヒ初審裁判所ノ開廳ノ時ニ於テ前條ノ法則ヲ適用ス可キ各代書人ノ姓名ト其容受ノ日附トヲ記シタル姓名目錄ヲ作り之ニ自己ノ姓名ヲ手署シテ其職務ヲ行フ裁判所ノ書記局ニ之ヲ差出ス可シ但シ其姓名表ハ



上等裁判所ニ於テハ檢事長之ヲ檢視ス可ク又初審裁判所ニ於テハ檢事之ヲ檢視ス可キ者トス

第十一條 千八百十年十二月十四日ノ勅書第三十七條第三十八條第三十九條ノ法規ハ訴訟ヲ論辯スルノ權利ヲ行フ所ノ代書人ニモ亦適用ス可キ者トス

第十二條 代書人ノミニ限リ千八百十年十二月十四日ノ勅書第三十五條ニ循ヒ被衣ヲ着用シ且ツ帽ヲ戴キテ發言ス可シ



○ 代書人ノ職業ノ執行及ヒ代書人組合ノ取締ニ付キ規則ヲ設クル千八百二十二年十一月二十日ノ勅書(法律全誌第七部第一萬三千七百五十五

號

第一卷 姓名表

第一條 千八百四年三月十三日(第十二年「バント」月二十二日)ノ法律第二十九條ニ據リ作りタル姓名表ニ記入セラレタル代書人ハ之ヲ數箇ノ縦線即チ區畫ニ分ツ可キ者トス(下ニ記スル千八百三十年八月二十七日ノ勅書ヲ以テ廢止ス)

第二條 若シ該姓名表ニ百名若クハ更ニ多數ノ代書人ヲ包含スル時ハ七箇ノ縦線ヲ作ル可ク又百名ヨリ更ニ少ナク五十名ヨリ更ニ多數ノ代書人ヲ包含スル時ハ四箇ノ縦線ヲ作ル可ク又五十名ヨリ更ニ少ナク三十五名ヨリ更ニ多數ノ代書人ヲ包含スル時ハ三箇ノ縦線ヲ作ル



可ク又三十五名ヨリ更ニ少ナク二十名ヨリ更ニ多數ノ  
 代言人ヲ包含スル時ハ唯二箇ノ縦線ヲ作ル可シ(下ニ記  
 スル千八百三十年八月二十七日ノ勅書ヲ以テ廢止ス)

第三條 前二條ニ定メタル配分ハ上等裁判所ニ於テ職ヲ  
 行フ所ノ代言人ニ付テハ檢事長ヨリノ招集ニ因テ集會  
 シタル以前ノ組合頭取及ヒ現ニ職ヲ行フ取締會議ニ於  
 テ之ヲ爲ス可ク又初審裁判所ニ於テ職ヲ行フ所ノ代言  
 人ニ付テハ該裁判所ニ於ケル檢事ヨリノ招集ニ因テ集  
 會シタル以前ノ組合頭取及ヒ現ニ職ヲ行フ取締會議ニ  
 於テ之ヲ爲ス可シ(千八百三十年八月二十七日ノ勅書ヲ  
 以テ廢止ス)

第四條 右ノ配分ハ若シ檢事長ノ求メニ因リ又ハ取締會

議ノ願ニ因リ上等裁判所ヨリ三箇年毎ニ之ヲ更新ス可  
 キ旨ヲ命シタル時ハ三箇年毎ニ之ヲ更新スルコトヲ得可  
 シ(下ニ記スル千八百三十年八月二十七日ノ勅書ヲ以テ  
 廢止ス)

第五條 何人ニ限ラス現ニ一箇ノ初審裁判所又ハ上等裁  
 判所ニ於テ其職ヲ行フニ非レハ該裁判所ノ代言人姓名  
 表中ニ記入セラル、コトヲ得ス

第六條 其姓名表ハ各裁判年度ノ初メニ於テ改メテ之ヲ  
 印刷シ而シテ其記入セラレタル代言人ノ附屬スル上等  
 裁判所又ハ初審裁判所ノ書記局ニ藏ム可シ

第二卷 取締會議

第七條 取締會議ハ第一ニハ嘗テ組合頭取ノ職務ヲ行ヒ



タル代言人第二ニハ表ノ順序ニ從ヒ各縦線中ノ最舊ノ者二名第三ニハ滿三十歳以上ノ年齢ニシテ少ナクトモ十年間其職ヲ行ヒタル各人ノ中ヨリ區別ナク撰擢シタル書記一名ヨリ組成ス可シ(下ニ記スル千八百三十年八月二十七日ノ勅書ヲ以テ廢止ス)

第八條 組合頭取及ヒ書記ハ投票ノ完全ナル多數ニ因リ取締會議ニ於テ之ヲ撰任ス可シ○其撰任ハ上等裁判所及ヒ初審裁判所ニ於ケル檢事ノ招集ニ因リ各裁判年度ノ初メ毎ニ之ヲ更新ス可シ(下ニ記スル千八百三十年八月二十七日ノ勅書ヲ以テ廢止ス)

第九條 組合頭取ハ其組合ノ長ニシテ取締會議ニ上席スル者トス

第十條 若シ姓名表ニ記載セラレタル代言人ノ員數ノ二十名ニ達セサル時ハ取締會議ノ職務ハ左ノ如ク之ヲ履行ス可シ即チ上等裁判所ニ於テ職ヲ行フ所ノ代言人ニ關スル時ハ該裁判所所在ノ都府ノ初審裁判所右ノ職務ヲ履行ス可ク又其他ノ場合ニ於テハ姓名表ニ記入シタル代言人ノ附屬スル初審裁判所右ノ職務ヲ履行ス可シ

第十一條 前條ニ據リ取締會議ノ職權ヲ委任セラレタル初審裁判所ハ毎年開廳ノ日ニ於テ組合頭取一名ヲ撰任ス可シ但シ其組合頭取ハ記入ノ順序ニ從ヒ姓名表ノ最初ノ三分二中ニ包含セラレタル代言人ノ中ヨリ之ヲ撰ム可キ者トス

第十二條 取締會議ノ職權ハ左ノ諸件ニ在リトス



第一 組合ノ姓名表中ニ於ケル記入ノ事ニ關シタル紛争ヲ裁定スル事

第二 其組合ノ名譽及ヒ資益ノ爲メニ必要ナル監察ヲ行フ事

第三 規則ニ因リ允許セラレタル取締ノ處分ヲ適用ス可キト有ル時ハ之ヲ適用スル事

第十三條 取締會議ハ各上等裁判所ニ於テ代言人タルノ誓ヲ爲セシ法律學「リサンシエ」(學士)ノ級ニ昇リタル各人ヲ見習中ニ入ル、事及ヒ見習期限ノ終リシ後チニ其見習代言人ヲ姓名表中ニ記入スル事並ニ嘗テ一旦姓名表中ニ記入セラレシ後チ其職業ノ執行ヲ廢止シ更ニ再ヒ其職業ヲ行ハント求ムル者ノ班位ノ事ニ付キ裁決ヲ

爲ス可キ者トス

第十四條 取締會議ハ立君政體ト憲法上ノ制規トニ對スル忠誠ノ意志ヲ保持シ及ヒ代言人組合ノ榮譽ノ基本タル遜讓公平正直ノ原則ヲ保持スルノ任アル者トス○又取締會議ハ見習代言人ノ風儀及ヒ品行ヲ監察ス可シ

第十五條 取締會議ハ姓名表ニ記入セラレタル代言人ノ行ヒシ犯則及ヒ過失ヲ自己ノ職務ニ因リ又ハ他ヨリ受クル所ノ告訴ニ因リ懲制ス可シ

第十六條 若シ代言人ノ裁判所ノ訟廷ニ於テ過失ヲ行フタル時裁判所ニ於テ其過失ヲ懲制スルノ權ハ前數條ノ制規ヲ以テ之ヲ變更スルコト無シ

第十七條 取締ノ權利ヲ執行スルカ爲メ檢察官又ハ民事



原告人ヨリ輕罪或ハ重罪ヲ組成スル所爲ノ懲制ヲ得ン  
ト裁判所ニ告訴スルヲ得ルノ權利ヲ妨ク可カラス

第十八條 取締ノ刑ハ左ノ如シ

諭告(アベルチスマン)

譴責(レプリマンド)

一時ノ停職(アンテルシグシヨン)

姓名表中ノ塗抹(ラシアシヨン)

其一時ノ停職ハ一箇年ノ期限ニ超過スルヲ得ス(下ニ  
記スル千八百五十二年三月二十二日ノ勅書ヲ以テ變更  
ス)

第十九條 犯罪ノ被告タル代言人ノ申述ヲ聽キタル歟又  
ハ八日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出シタル上ニ非サレハ之ニ

取締ノ刑ヲ言渡スヲ得ス

第二十條 裁判所ニ於テ取締會議ノ職務ヲ行フ所ノ法衙  
ニ於テハ如何ナル取締ノ刑ト雖モ組合頭取ノ意見書ヲ  
差出サシメタル後ニ非サレハ之ヲ言渡スヲ得ス

第二十一條 凡ソ一時ノ停職又ハ姓名ノ塗抹ヲ爲サシム  
ル取締會議ノ決定書ハ三日内ニ之ヲ檢事長ニ送達シ檢  
事長ハ其決定ノ執行ヲ確保シ且ツ之ヲ監督ス可シ

第二十二條 檢事長ハ若シ其必要ナリト思考スル時ハ諭  
告又ハ譴責ヲ爲サシムル決定書ノ寫ヲ受取ラント求ム  
ルヲ得可シ

第二十三條 又檢事長ハ取締會議ニ於テ犯罪ノ被告タル  
代言人ノ放免ヲ言渡ス總テノ裁定書ノ寫ヲ得ント求ム



ルコトヲ得可シ

第二十四條 一時ノ停職又ハ姓名塗抹ノ場合ニ於テハ其刑ヲ言渡サレタル代言人ハ其管轄地ノ上等裁判所ニ控訴ヲ爲スコトヲ得可シ

第二十五條 第十五條ニ定メタル場合ニ於テ取締會議ヨリ爲シタル裁定ヲ控訴スルノ權利ハ檢事長ニモ亦屬スル者トス

第二十六條 檢事長又ハ刑ヲ言渡サレタル代言人ノ控訴ハ組合頭取ヨリ取締會議ノ裁定書ヲ送付セシ時ヨリ十日内ニ爲シタルニ非サレハ之ヲ受理ス可カラス

第二十七條 各上等裁判所ハ其裁判所及ヒ初審裁判所ノ職員ニ對シテ爲シタル所ノ取締處分ニ付テハ千八百十

年四月二十二日ノ法律第五十二條ニ定メタル如ク右ノ控訴ニ付キ總會議ヲ爲シ且ツ裁判官會議室ニ於テ裁定ヲ爲ス可キ者トス

第二十八條 若シ刑ヲ言渡サレタル代言人ヨリ控訴ヲ爲シタル時ハ檢事長ノ方ヨリ亦同シク控訴ヲ爲スコト無キニ拘ハラズ別段ノ道理アルニ於テハ上等裁判所ヨリ更ニ重キ刑ヲ言渡スコトヲ得可シ

第二十九條 罷責又ハ停職ノ刑ヲ受ケタル代言人ハ其所屬タル縦線中最後ノ班位ニ之ヲ記入ス可シ

第三卷 見習(スタージュ)

第三十條 見習ノ時間ハ三箇年トス

第三十一條 見習ハ數期ニ分テ之ヲ爲スコトヲ得可シ然レ



三箇月以上之ヲ中止ス可カラス

第三十二條 取締會議ハ場合ニ從ヒ見習ノ時間ヲ延ス  
ヲ得可シ

第三十三條 見習代言人ハ姓名表中ノ一部ヲ爲ス者ニ非  
ス然レモ其代言人ハ各其見習ヲ許サレタル日附ニ從テ  
配分セラレ且ツ各箇ノ縦線ノ末ニ記入セラル可キ者ト  
ス

第三十四條 見習代言人ハ自己ノ縦線ニ屬スル取締會議  
員二名ヨリ二箇年間勉勵シテ訟廷ニ出席シタルヲ證  
スル保證書ヲ得タル上ニ非サレハ如何ナル訴訟ニ於テ  
モ論辯ヲ爲シ又文書ヲ作ルヲ得ス但シ右ノ保證書ハ  
取締會議ノ檢視ヲ受ク可キ者トス

第三十五條 姓名表ニ記入シタル代言人ノ員數ノ二十名  
ニ足ラサル法衙ニ於テハ其上席人及ヒ檢事ヨリ右勉勵  
ノ保證書ヲ渡ス可シ

第三十六條 見習代言人中ニテ既ニ二十二歳ニ達シタル  
者ハ第三十四條ニ因リ命セラレタル義務ヲ免除セラル  
可シ

第三十七條 法律學リサンシエー(學士)ノ級ニ昇リタル代  
言人ニシテ其職ヲ辭セシ後チニ代言人ノ組合ニ入ラン  
ト求ムルモノハ見習ヲ爲サ、ルヲ得ス

第四卷 總則

第三十八條 法律學リサンシエー(學士)ノ級ニ昇リタル者  
ハ上等裁判所ニ於テ代言人中ニ容受セラル可シ蓋シ之



カ爲メ右ノ者ハ左ニ記スル所ノ誓ヲ爲ス可キ者トス

余ハ國王ニ忠誠ニシテ憲法ニ順聽シ又辯護人或ハ代辯人ト爲リテ法律、規則、風俗、國安、靖寧ニ有害ナル件ハ之ヲ説述セス又之ヲ公告セス並ニ決シテ裁判所及ヒ公ケノ官署ニ對スル敬禮ヲ失ハサルヲ誓フ

第三十九條 及ヒ第四十條(下ニ記スル千八百三十年八月二十七日ノ勅書ヲ以テ廢止ス)

第四十一條 重罪被告人ノ辯護ノ爲メ職權上ヨリ任セラレタル代言人ハ重罪裁判所ヨリ其辭退又ハ差支ノ理由ヲ允許セラレタルニ非レハ其行職ヲ否ムヲ得ス但シ重罪裁判所ハ其代言人ノ抗命ノ場合ニ於テハ前第十八條ニ定メタル刑中ノ一箇ヲ言渡ス可シ

第四十二條 代言人ノ職業ハ補役ヲ除クノ外總テ各種ノ司法上ノ職務ト兼子行フヲ得ス又州長、郡長、州廳大書記ノ職務ト兼子行フヲ得ス又裁判所書記、公證人、代書人ノ職務ト兼子行フヲ得ス又雇賃ヲ得ル職分及ヒ會計吏員ノ職分ト兼子行フヲ得ス又各種ノ商業ト兼子行フヲ得ス又事務世話人ノ職業ヲ行フ所ノ各人ハ代言人ノ職業ヲ排除セラル可シ

第四十三條 若シ代言人ノ其辯論又ハ文書ニ於テ法教、立君政體ノ原則、憲法、國ノ法律又ハ設定セラレタル官署ニ對シ攻撃ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ其訴訟ヲ審理スル所ノ裁判所ヨリ直ニ懲制セラル可ク而シテ其裁判所ハ第十八條ニ定メタル刑中ノ一箇ヲ言渡ス可キ



者トス但シ此規則ト別段ノ道理アルニ於テハ異常ノ告  
訴ヲ受ク可キノ規則ト相觸ル、ト無カル可シ

第四十四條 各上等裁判所ハ嚴密ニ千八百十年四月二十  
日ノ法律第九條ヲ遵守シ依テ代○言○人○中○ニ○テ○其○明○知○才○能  
ニ○因○リ○殊○ニ○該○職○業○ノ○性○質○タ○ル○可○キ○濫○厚○及○ヒ○公○平○ニ○因○テ○  
衆○ニ○拔○ゲ○タ○ル○者○ヲ○毎○年○尙○璽○兼○司○法○卿○ニ○上○申○ス○ル○ヲ○命○ス

第四十五條 千八百十年十二月十四日ノ勅書ハ之ヲ廢ス  
而シテ又代○言○人ノ職業ヲ執行スルニ付キ其權利及ヒ義  
務ニ關シテ代○言○人組合ニ於テ從來遵守シタル慣例ハ之  
ヲ保存ス

第五卷 假リノ規則

第四十六條 千八百十年十二月十四日ノ勅書ニ定メタル

法式ニ從ヒ此勅書ノ公布以前ニ撰任シタル取締會議ハ  
更新ノ爲メ此勅書ニ定メタル時期ニ至ル迄之ヲ保存ス  
可シ

第四十七條 前條ニ記載シタル取締會議ハ其職權ヲ行フ  
ニ付テハ此勅書ノ條規ニ循フ可キ者トス

○ 代○言○人ノ職業ヲ執行スルニ付テノ條規ヲ包含ス  
ル千八百三十年八月二十七日ノ勅書(法律全誌  
第九部第百十號)

第一條 此勅書公布ノ時ヨリ後ハ凡ソ姓名表ニ記入セラ  
レタル各代○言○人ヨリ組成シタル組合集會ニ於テ直接ニ  
取締會議員ヲ選舉ス可シ而シテ其選舉ハ數人連名ノ投



票ヲ用ヒ且ツ出席員ノ比較多數ニ因テ之ヲ爲ス可シ(下ニ記スル千八百五十二年三月二十二日ノ勅書ヲ以テ廢止ス)

第二條 取締會議ハ記入セラレタル代言人ノ員數ノ三十名以下タル法衙(今日ニ至ル迄裁判所ニ於テ該會議ノ職務ヲ行フタル法衙モ亦之ヲ包含シテ云フ)ニ於テハ假リニ五名ヲ以テ組成スル者トシ又記入セラレタル代言人ノ員數ノ三十名ヨリ五十名ニ至ル場合ニ於テハ假リニ七名ヲ以テ組成スル者トシ又其代言人ノ員數ノ五十名ヨリ百名ニ至ル場合ニ於テハ假リニ九名ヲ以テ組成スル者トシ又其代言人ノ員數ノ百名以上タル場合ニ於テハ假リニ十五名ヲ以テ組成スル者トシ又巴里府ニ於テ

ハ假リニ二十一名ヲ以テ組成スル者トス

第三條 組合頭取ハ同上ノ集會ニ於テ取締會議員ヲ選舉スル前ニ各自別々ノ投票ヲ用ヒ完全ノ多數ニ因テ之ヲ選舉ス可シ

第四條 同上ノ時期ヨリ後ハ凡ソ姓名表ニ記入セラレタル各代言人ハ別段ノ允許ヲ得ルヲ要セスシテ全國中ノ各上等裁判所及ヒ各初審裁判所ニ於テ論辯ヲ爲スヲ得可シ但シ治罪法第二百九十五條ノ定規ハ格別ナリトス

第五條 代言人ノ職業ヲ執行スルニ關シタル法律及ヒ規則ノ確定ノ訂正ハ成ル可ク急速ニ之ヲ爲ス可シ





代 言 人 組 合 ノ 選 舉 ニ 關 ス ル 千 八 百 五 十 二 年 三 月  
二 十 三 日 ノ 勅 書 ( 法 律 全 誌 第 十 部 第 三 千 八 百 三  
十 九 號 )

第 一 條 各 上 等 裁 判 所 及 ヒ 初 審 裁 判 所 ニ 於 テ 職 務 ヲ 行 フ  
代 言 人 ノ 取 締 會 議 ハ 姓 名 表 ニ 記 入 セ ラ レ タ ル 代 言 人 ノ  
總 集 會 ニ 於 テ 從 前 ノ 如 ク 直 接 ニ 之 ヲ 選 舉 ス 可 シ 而 シ テ  
其 選 舉 ハ 數 人 連 名 ノ 投 票 ヲ 以 テ 之 ヲ 爲 ス 可 シ ト 雖 出  
席 員 ノ 完 全 ノ 多 數 ニ 因 テ 之 ヲ 爲 ス 可 キ 者 ト ス  
第 二 條 組 合 頭 取 ハ 取 締 會 議 ニ 於 テ 投 票 ノ 完 全 ノ 多 數 ニ  
因 リ 之 ヲ 選 舉 ス 可 シ 但 シ 其 組 合 頭 取 ハ 該 會 議 ノ 員 中 ニ  
非 サ レ ハ 之 ヲ 撰 擢 ス ル ヲ 得 ス ( 下 ニ 記 ス ル 千 八 百 七 十  
年 三 月 十 日 ノ 勅 書 ヲ 以 テ 廢 止 ス )

第 三 條 今 ヨ リ 後 テ ハ 千 八 百 二 十 二 年 十 一 月 二 十 日 ノ 勅  
書 第 十 八 條 ニ 明 記 シ タ ル 取 締 ノ 刑 中 ノ 一 箇 ヲ 適 用 セ ラ  
ル 可 キ 代 言 人 ハ 當 時 ノ 景 況 ニ 從 ヒ 且 ツ 同 一 ノ 裁 定 ニ 因  
リ 十 年 ニ 過 キ サ ル 時 間 取 締 會 議 員 タ ル ノ 權 利 ヲ 剝 奪 セ  
ラ ル 、 一 有 ル 可 シ

第 四 條 左 ノ 各 人 ハ 取 締 會 議 ノ 員 中 ニ 撰 舉 セ ラ ル 、 一 ヲ  
得 ス

巴 理 府 ニ 於 テ ハ 十 年 間 姓 名 表 ニ 記 入 セ ラ レ サ リ シ 代  
言 人  
其 他 ノ 都 府 ニ シ テ 控 訴 裁 判 所 ノ 首 地 タ ル 各 地 ニ 於 テ  
ハ 五 年 間 姓 名 表 ニ 記 入 セ ラ レ サ リ シ 代 言 人  
第 五 條 巴 理 府 ニ 於 ケ ル 代 言 人 討 論 會 ノ 書 記 ハ 組 合 頭 取



ヨリ推薦ノ上ニテ組合會議ヨリ之ヲ指定ス可シ但シ取締ノ刑ニ處セラレタル見習代言人ハ該書記ノ職ニ就カント求ムルヲ得ス

第六條 千八百二十二年十一月二十日ノ勅書及ヒ千八百三十年八月二十七日ノ勅書ノ條規中ニテ此回ノ勅書ニ背反セサル者ハ之ヲ保存ス

○ 帝國內ノ各上等及ヒ下等ノ裁判所ニ於テ代言人組合ノ頭取ヲ撰擧スル事ニ關スル千八百七十年三月十日ノ勅書(法律全誌第十一部第一萬七千五百八十三號)

第一條 帝國內ノ各上等及ヒ下等ノ裁判所ニ於ケル代言

人組合ノ頭取ハ姓名表ニ記入シタル總テノ代言人ヨリ組成スル所ノ組合總會議ニ於テ投票ノ完全ノ多數ニ因リ之ヲ撰擧ス可シ  
第二條 千八百五十二年三月二十二日ノ勅書第二條ハ之ヲ廢ス

○ 「リサンシエ」ノ級ニ昇リシ者ニシテ其免狀ヲ差出スト能ハサル各人ヲ別段ノ條件ヲ定メテ代言人見習ノ職ニ容受スルヲ許ス千八百七十一年一月十五日ノ決議書(法律全誌第十二部第四百九十二號)



參議院及ヒ大審院附代官人 原語「アホ  
カ、オウ、

ユンセイユ、デター、エ、ア、ラ、  
クウル、ド、カツサシヨン、

大審院ニ於ケル代書人ハ代官人ノ名義ヲ取り用  
フ可キ旨ヲ定ムル千八百六年六月二十五日ノ

勅書(法律全誌第四部第七百三十三號)

參議院ニ於ケル代官人及ヒ使吏ノ撰任ヲ定ムル  
千八百十四年七月十日ノ勅書(法律全誌第五部

第百八十九號)

國王諮問會議ニ於ケル代官人ノ組合ト大審院ニ

於ケル代官人ノ結社ト相合シテ之ニ國王諮問  
會及ヒ大審院ニ於ケル代官人組合ノ名稱ヲ附

シ並ニ在職者ノ員數ヲ確定シ及ヒ組合内部ノ

取締成規ヲ設クル千八百十七年九月十日ノ勅  
書(法律全誌第七部第二千八百二十三號)

第一條 國王ノ諮問會議ニ於ケル代官人ノ組合及ヒ大審

院ニ於ケル代官人ノ結社ハ國王諮問會及ヒ大審院ニ於

ケル代官人組合ノ名稱ヲ以テ之ヲ併合ス

第二條 此等ノ職務ハ今ヨリ後ハ分別ス可カラサル者ト  
ス

第三條 在職者ノ員數ハ千八百十四年七月十日ノ勅書ニ  
循ヒ確然之ヲ六十名ト定ム

第四條 右ノ併合ニ因リ左ノ各人ハ國王諮問會及ヒ大審  
院ニ於ケル代官人タリ(此所畧ス)

第五條 在職者ノ相互ノ間ニ於テ保存ス可キ班位ヲ定ム



ル爲メ組合ノ取締會議ニ於テ一箇ノ姓名表ヲ作り其姓名表ニハ各代言人ノ其併合シタル二箇ノ結社中ノ一ニ容受セラレタル最舊ノ日附ニ因テ其姓名ヲ記入ス可キ者トス

第六條 大審院ニ於テ職ヲ行フ爲メ法律上ニ必要ナリト定ムル保證金ヲ未タ差出サ、ル者ハ此勅書ノ日附ヨリ毎三箇月ノ四期ニ於テ其保證金ヲ拂ヒ納ム可シ

第七條 國王諮問會及ヒ大審院ニ於ケル代言人組合ノ内  
部ノ取締ノ爲メ一箇ノ取締會議ヲ設クヘシ但シ其會議ハ上席人一名ト議員九名トヨリ成ル者トス而シテ其議員中ノ二名ハ總代人ノ分限ヲ有シ他ノ一名ハ書記兼出納役ノ分限ヲ有スル者トス

第八條 上席人ハ組合ノ總會議ニ於テ投票ノ完全ノ多數ニ因リ撰擢セシ候補者三名ヲ推薦シタル上尙璽官ヨリ之ヲ補任ス可シ(下ニ記スル千八百五十年十月二十八日ノ勅書ヲ以テ變更ス)○其他ノ取締會議員九名ハ投票ノ完全ノ多數ニ因リ總會議ヨリ直接ニ之ヲ撰任ス可シ○取締會議ハ其員中ヨリ總代人二名ト書記兼出納役一名トヲ撰擢ス可シ

第九條 取締會議ノ上席人及ヒ其議員ノ職務ハ三年間繼續スル者トス故ニ毎年其議員ノ三分一ヲ更新ス可シ而シテ本年撰マレタル議員ノ更新中第一年及ヒ第二年ノ二回ハ抽籤法ヲ以テ之ヲ爲ス可キ者トス但シ一旦退キタル議員ハ一年ヲ經シ後ニ非サレハ再撰セラル、トヲ



得ス○前文中最後ニ記シタル定規ハ最初ノ撰任ニ付テハ現今職ヲ行フ所ノ大審院ノ代言人總代員並ニ國王諮問會ノ代言人取締局員ニ適用ス可カラス

第十條 右ノ撰任ハ毎年八月ノ最後ノ一週間ニ之ヲ爲ス可ク而シテ組合ノ總會議ハ裁判署ニ於テ之ヲ開ク可シ

第十一條 取締會議ノ上席人ハ組合ノ長ニシテ總會議ノ上席ヲ爲シ又總代人ハ投票検査役ノ職務ヲ行ヒ又出納役ハ書記ノ職務ヲ行フ可シ若シ上席人ニ差支アル時ハ第一ノ總代人若クハ第二ノ總代人ノ代理ヲ爲ス可ク又總代人ニ差支アル時ハ議員中ノ最年長者ノ代理ヲ爲ス可ク又書記ノ不在ニ於テハ議員中ノ最年少者ノ代理ヲ爲ス可シ

第十二條 總會議ハ組合員ノ半數以上ヨリ組成シタル時ニ非サレハ決議ヲ爲スコトヲ得ス○取締會議ハ組合員ノ六名以上出席シタル時ハ法ニ適シテ決議ヲ爲スコトヲ得○取締會議ニ於テ可否ノ數相等シキ時ハ上席人之ヲ決ス可シ

第十三條 内部ノ警察及ヒ取締ニ關スル時ハ取締會議ニ於テ確定ノ言渡ヲ爲ス可ク總テ其他ノ場合ニ於テハ唯一箇ノ意見ヲ發言ス可キモノトス而シテ其意見ハ國王諮問會ニ於ケル代言人ノ職務ニ關スル事項ニ付テハ尙璽官ノ認定ヲ受クルヲ要トシ又大審院ニ於ケル代言人ノ職務ニ關スル事項ニ付テハ同院ノ認定ヲ受クルヲ要トス但シ此等ノ裁定ハ控訴ヲ爲スコトヲ得ス



第十四條 代理人ノ組合及ヒ取締會議ノ職務ニ關シテ現今存在スル所ノ規則及ヒ勅書ハ更ニ新タナル總規則ヲ公布スルニ至ル迄國王諮問會及ヒ大審院ノ代理人組合ニ於テ之ヲ遵守ス可シ但シ此回ノ勅書ニ背反シタル者ハ格別ナリトス

第十五條 自今撰任セラル可キ國王諮問會及ヒ大審院ノ代理人ハ尙璽兼司法卿ニ對シテ誓ヲ爲ス可シ

○

參議院及ヒ大審院ニ於ケル代理人組合ノ取締會議上席人ノ撰舉ニ關スル千八百五十年十月二

十八日ノ勅書(法律全誌第十部第二千五百二號)

一條 千八百十七年九月十日ノ勅書第八條ハ左ノ如ク之

ヲ改ム

參議院及ヒ大審院ニ於ケル代理人組合ノ取締會議ノ上席人ハ今ヨリ後ハ組合ノ總會議ニ於テ投票ノ完全ノ多數ニ因リ直接ニ之ヲ撰舉ス可シ



### 第二 日本代言人規則

代言人規則(明治十三年五月十三日司法省布達)

#### 第一款 總則

第一條 代言人ハ法令ニ於テ代言ヲ許サレタル詞訟ニ付テ原告又ハ被告ノ委任ヲ受ケ其代言ヲ爲ス者トス

第二條 代言ノ業ヲ爲サント欲スル者ハ第四款ニ掲クル所ノ手續ニ依リ定式ノ試験ヲ經テ司法卿ノ免許ヲ受ク可シ

第三條 免許ヲ受ケシ代言人ハ大審院及ヒ諸裁判所ニ於テ代言ヲ爲スヲ得

第四條 代言人ノ免許ヲ得ル能ハサル者左ノ如シ

- 一 未丁年者

二 身代限リノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者

三 盜罪詐僞罪ニ付刑ヲ受ケタル者

四 懲役禁獄一年以上ノ刑ニ處セラレタル者(本項ハ明治十四年一月司法省甲第二號布達ヲ以テ改正シタル者ニ係ル)

五 官吏准官吏及ヒ公私ノ雇人

第五條 免許ヲ受ケシ者ハ必ス第二款ニ掲クル所ノ代言人ノ組合ニ入リテ其規則ヲ守ル可シ若シ一時他管ニ出テ代言ヲ爲スルハ其地組合ノ規則ヲ遵守ス可シ

第六條 代言人新ニ免許ヲ受ケシ時及ヒ他ノ地ニ轉住セント欲スル時ハ其業ヲ爲ス所ノ裁判所及ヒ檢事檢事ナ檢事ノ職務ヲ攝行ス檢事ナ並ニ議會長ニ其旨ヲ届ケ廢業ノ時ル者以下之ニ倣フ



ハ免許狀ヲ檢事ニ返納ス可シ

第七條 代言免許ハ滿一年月ヲ以テ算フヲ以テ限トシ免許料ハ

金十圓トス其業ヲ繼續セント欲スル者ハ毎年免許料ヲ

納ム可シ既ニ納メタル免許料ハ廢業停業除名ノ時ト雖

モ之ヲ還付セス

第八條 新規出願ノ者ハ免許狀ヲ受クル時免許料ヲ直チ

ニ檢事ニ納ム可シ

引續キ出願ノ者ハ必ス免許期限ノ盡ル前願書ニ免許料

ヲ添ヘ檢事ニ差出ス可シ但右手續ヲ爲シタルモハ期限

後ニ係リ未タ免狀ノ下付有ラサルモ其儘代言ヲ爲スヲ

得可シ

第九條 免許料ヲ納メサルヲ以テ免許ヲ得ス又ハ期限前

ニ於テ引續願ヲ爲サスシテ免許ノ効ヲ失ヒシ者再ヒ代

言ヲ爲サント欲スル時ハ新規出願ノ手續ニ循フ可シ

第十條 免許狀ヲ紛失シ又ハ氏名ヲ改メシ者ハ更ニ免許

狀下付ノ願ヲ檢事ニ出ス可シ但願書ノ副本ニ檢事ノ檢

印ヲ受ケ置キ引替免許狀下付迄ハ之ヲ以テ免許代言人

タルノ證ト爲ス可シ

第十一條 代言ヲ爲スニハ必ス詞訟本人ノ委任狀ヲ受ク

可シ

第十二條 代言人ノ懲罰ハ第三款ニ依テ處分ス可シ

第十三條 代言人ノ所業ニ因リ生シタル詞訟本人並ニ相

手方關係人ノ損害ハ其代言人ニ於テ之ヲ償フ可シ

第二款 議會



第十四條 代理人ハ各地方裁判所本支廳所轄每一ノ組合ヲ立テ議會ヲ設ケ左ノ目的ヲ以テ規則ヲ定メ契約ヲ固クス可シ但シ組合ハ各裁判區ノ廣狹遠近ニ依リ檢事ノ見計ヲ以テ之ヲ分合スルコトアル可シ

- 一 互ニ風儀ヲ矯正スルコト
- 二 名譽ヲ保存スルコト
- 三 法律ヲ研究スル事
- 四 誠實ヲ以テ本人ノ依頼ニ應スル事
- 五 強テ本人ノ權利ヲ捏造セサル事
- 六 妄リニ言詞ヲ變改セサル事
- 七 故ナク時日ヲ遷延セサル事
- 八 相當謝金ノ額ヲ定ムル事

但該規則ハ必ス檢事ノ照閱ヲ經可シ其改正増補モ亦之ニ同シ

第十五條 組合毎ニ會長一名副會長一名又ハ二名ヲ毎年第一次會ニ於テ投票ノ多數ヲ以テ定ム可シ若シ投票ノ數相均シキ時ハ先ニ免許ヲ得タル者ヲ以テシ其時日相同シキ時ハ年長ノ者ヲ以テ之ニ充ツ可シ

第十六條 會長ハ議會ノ管理ヲ爲シ副會長ハ會長ヲ補助シ會長差支アル時ハ之カ代理ヲ爲ス可シ其任期ハ各滿一年トス但每期投票多數ヲ得ル者ト雖モ其職務ヲ繼續スルハ三期ヲ以テ限リトス

第十七條 第二十二條ニ記載シタル條件ヲ犯ス者アル時ハ各代言人ハ之ヲ會長ニ報告シ會長ハ之ヲ檢事ニ告發



ス可シ

若シ會長告發ヲ遷延シ又ハ其所犯會長ニ係ル時ハ各代  
言人ヨリ直チニ檢事ニ告發ス可シ

第十八條 議會ヲ開クハ毎年二次ヲ以テ定例ト爲シ其日  
數一次十五日ヲ過クルヲ得ス若シ已ムヲ得サル場合ニ  
於テ期日ヲ延サントスルカ又ハ臨時會ヲ開カントスル  
時ハ必ス檢事ノ認可ヲ受ク可シ但其會費ハ各代言人ニ  
於テ之ヲ擔當スル者トス

第十九條 會長ハ組合總員ノ名簿ヲ作り其本貫族籍住所  
年齢及ヒ代言免許ノ年月日ヲ記シ轉住廢業懲罰ノ有  
ル毎ニ其旨ヲ記ス可シ

第二十條 議會中詞訟事件ニ付キ參會スルヲ得サル場合

ニ於テハ其旨ヲ會長ニ届出ツ可シ

第二十一條 會長及ヒ副會長ト雖ヒ代言ノ職務ニ付テハ  
一般ノ代言人ト異ナルナシ

第三款 懲罰

第二十二條 代言人左ノ條件ヲ犯ス時ハ輕重ヲ量リ第二  
十三條及ヒ第二十四條ニ依テ懲罰ス可シ

- 一 訟廷ニ於テ現行ノ法律ヲ誹議スル者
- 二 訟廷ニ於テ官吏ニ對シ不敬ノ所業ヲ爲ス者
- 三 訟廷ニ於テ相手方ヲ陵辱罵詈シタル者
- 四 詞訟ヲ教唆シタル者
- 五 證據ト爲ル可キ者ヲ捏造シタル者
- 六 他人ノ詞訟ヲ買取リ自己ノ利ヲ圖ル者



七 強テ謝金ヲ前收シ又ハ過當ノ謝金ヲ貪リタル者  
 八 故ラニ時日ヲ遷延シ詞訟本人並ニ相手方關係人ノ  
 妨害ヲ爲シタル者  
 九 議會組合ノ外私ニ社ヲ結ヒ號ヲ設ケ營業ヲ爲シタ  
 ル者  
 十 議會ニ於テ定メタル取締規則ヲ犯シタル者  
 第二十三條 懲戒ノ目次左ノ如シ  
 一 譴責  
 二 停業  
 三 除名  
 第二十四條 所犯法律ニ該ル者ハ法律ニ依テ處斷シ仍ホ  
 第二十三條ノ罰目ヲ併科スルコトアル可シ  
 第二十五條 譴責ハ止マ阿責シテ業ヲ停メス停業ハ一月

以上一年以下其業ヲ止メ除名ハ代言人名簿ノ名ヲ除キ  
 三年ヲ經ルノ後ニ非サレハ復タ代言人タルヲ得ス若シ  
 其所犯ノ情狀重キ者ハ終身之ヲ許サス  
 第二十二條ノ懲罰ヲ受ケタル者アルキハ其旨ヲ裁判所  
 ノ扣所ニ揭示ス可シ

第四款 出願

第二十六條 代言免許ヲ願フ者ハ第二十九條ノ書式ニ倣  
 ヒ願書ヲ作り現住戶長(又ハ區長)ノ與印ヲ受ケ履歷書ヲ  
 添ヘ其所轄ノ檢事ニ差出シ定式ノ試験ヲ受ク可シ

第二十七條 出願定月

二月 八月 各上半ヶ月ヲ以テ限リト爲ス

第二十八條 試験ノ科目左ノ如シ



- 一 民事ニ關スル法律
  - 二 刑事ニ關スル法律
  - 三 訴訟ノ手續
  - 四 裁判ニ關スル諸規則
- 第二十九條 願書及ヒ履歷書々式

代 言 願

本貫住所 寄留ナル時ハ其寄留所ヲ記入ス可シ

身 分 氏 名

年 齡

代 言 營 業 仕 度 ニ 付 御 試 驗 之 上 免 許 被 成 下 度 此 段 奉 願 候 也

年 號 月 日

右

氏 名 印

司 法 卿 某 殿

前 書 ノ 通 出 願 候 ニ 付 キ 奧 印 致 候 也

右 戶 長 又 ハ 區 長

氏 名 印

履 歷 書

本貫住所 寄留ナル時ハ其寄留所ヲ記入ス可シ

身 分 職 業

氏 名



年齡

- 一 地名身分何其ニ隨ヒ何年ヨリ何年迄何學修行何
- 某ニ隨ヒ何技術ヲ修業
- 一 何年月日何職ニ任シ何年月日 免官 辭職
- 一 何年月日何々ノ廉ヲ以テ何廳ヨリ賞典ヲ受ク
- 一 何年月日何々ノ犯罪ニ依リ何ノ刑ヲ受ク
- 一 何年月日身代限リノ處分ヲ受ケ何年月日辦償ノ義務ヲ終フ

右之通御座候也

年號月日

氏名印

引續代言營業仕度候ニ付免許狀御下付被下度此段奉願  
 代言引續願 免許狀紛失氏名改換ノ時  
 ノ願書モ此式ニ倣フ可シ

候也

本貫住所 寄留ナル時ハ其寄

留所ヲ記ス可シ

年號月日

免許代言人 氏名印

司法卿某殿

○代言人取扱手續(明治十三年五月十三日司法省達)

第一條 代言ノ免許ヲ願フ者アル時ハ檢事 檢事ナキ地ハ  
 攝行ス 其願書及ヒ履歷書ヲ査閲シ若シ寄留ニテ履歷ノ  
 顛末分明ナラサル時ハ本管ニ照會シテ取調ヘタル上之  
 ヲ試驗シ一切ノ書類ヲ纏メ司法卿ニ進達ス可シ

第二條 試驗問題ハ出願定月前司法卿ヨリ各地方ノ檢事  
 ニ送付ス



第三條 檢事ハ司法卿ヨリ受クル所ノ問題ヲ以テ出願定  
月ノ下半ヶ月間ニ試験ヲ行フ可シ但試験ニ法律書籍ヲ  
携帶スルモ妨ナシ其問題ニ之ヲ許サ、ル旨ヲ記セシ時  
ハ携帶ヲ禁ス可シ

第四條 免許狀ハ司法卿ヨリ檢事ニ送付シ檢事之ヲ其本  
人ニ授與スベシ

第五條 大審院裁判所并ニ檢事ニ於テハ代言人名簿ヲ製  
シ年月日ヲ詳ニシテ左ノ件々ヲ登錄スヘシ(同年同省丙  
第十一號達參看)

- 一 氏名身分住所年齢
- 二 新規及ヒ引續免許

- 三 住所移轉姓名改換及ヒ廢業免許狀紛失等

四 懲罰

第六條 代言人ハ總テ其地ノ檢事ニテ監視シ代言人規則  
ニ照シテ之ヲ取扱フベシ若シ犯則ノ者アル時ハ其處分  
ヲ裁判官ニ求ムベシ訟廷ニ於テノ犯則ハ裁判官直チニ  
之ヲ處分シ後テ檢事ニ通知ス可シ

第七條 議會ノ規則ハ檢事之ヲ認許シ其副本及ヒ會長副  
會長組合人ノ氏名簿ヲ司法卿ニ進達スベシ

第八條 代言人他ノ裁判所管内ニ轉住シ又ハ廢業スルハ  
ハ檢事ヨリ司法卿へ上申スヘシ尤モ廢業ノハ其免許  
狀ヲ返納スヘシ

第九條 免許狀紛失或ハ改名ニ係リ書換等ニテ更ニ下付  
ヲ願出ル者アル時ハ檢事ヨリ司法卿へ上申シ其免許狀  
下付ヲ得テ之ヲ本人ニ授與スベシ但シ右出願ノ時其願



書ノ寫へ檢印ヲナシテ本人へ與へ置クヘシ

第十條 檢事ハ免許料ヲ收領シタル上ニテ免許狀ヲ本人ニ授與スベシ

第十一條 免許料ハ一月毎ニ司法省ニ納ムベシ(同年同省丙第十四號達ヲ以テ改正シタル者ニ係ル)

第十二條 代言人ノ處刑懲罰ハ其都度檢事ヨリ司法卿へ上申スベシ除名ノ時ハ其免許狀ヲ褫奪シテ返納スベシ

第十三條 檢事ハ停業ノ罰ヲ受ケタル者ノ免許狀ニ某年月日ヨリ某年月日マテ停業シタル旨ヲ裏書シ檢印ヲ爲シテ之レヲ本人ニ下付スベシ

免 許 狀 雜 形

朱書

番號

〔何 某〕

〔代 言 ヲ 免 許 シ〕

此 證 ヲ 授 ク

明 治 司 法 省 印  
年 月 日

〔括弧〕内朱書

〔免 許 期 限〕

〔從 何 年 何 月〕

〔至 何 年 何 月〕

〔停 業 期 限〕

〔從 何 年 何 月 何 日〕

〔至 何 年 何 月 何 日〕

印